

然し日本がこの光榮ある大使命を果すには獨力では出來ない。我等の信ずる處に據ると世界の文明を其危機から救ひ得るものは世界列國の中で日本の外には唯佛蘭西あるのみ。我邦は一方國內に於て大に言論思想の自由安全を確保すると同時に他方佛蘭西と呼應して共に人類文明の爲に盡くさなければならぬ。世界文明の健全なる發展を希望する上から云つて今後佛蘭西の學問が我邦に大に勃興するのは極めて必要である。獨逸の今日までの學問は著るしく經濟的帝國主義侵略的世界政策の影響を受けて居た。獨逸の哲學がさうである。社會學がさうである。政治學がさうである。就中我輩の専門とする經濟學に至つては其影響が最も甚だしい。今は或意味で獨逸の經濟學の破産時代である。所謂經濟階段を巧妙に拵へて帝國に統一した國民經濟組織を經濟生活發展の當然の歸結とした獨逸の經濟學は畢竟海賊主義に對抗する獨逸の帝國的陸賊主義を一面に於て辯護する有力な學說であつた。夫れが今破産した。我々は或意味で

頼るべき師を失つた譯である。今後は獨力に日本の特別の使命を考へた學問を建設しなければならぬ。唯順應する計りではいけない。今後大に勃興すべき佛蘭西の學問と密接な關係を有つて日本の立場から對應して行かねばならぬ。是れ吾輩が世界に於ける日本の使命なりと信ずる所である。

大正七年十二月六日談話全八年一月『中央公論』掲載

三 改造途上の世界經濟

一 英國中心の世界經濟と其改造

一 英國を中心とせる世界の貨幣經濟

此度の大戰争を中心として、其前後に於ける世界經濟の有様を述ぶるが本論の趣意である。戦前の世界經濟は英國を中心として成立つて居た。英國は其偉大なる資本の力を以つて世界の經濟を支配して居た。而して世界經濟の動源は英國の資本市場に在つた。故に話は先づ英國と其金融市場のことから始めねばならぬ。

英吉利の金融市場とは、倫敦に於けるロムバードストリートを謂ふのである。此處が銀行業及び商業取引の中心となつて居る。従つて英吉利の金融市場を代表して居り同時に又世界の總勘定を掌つて居るのである。金を拂ふにしても、ロムバード街へ持て行つて拂へば何時でも一番安く、一番安全に、一番便利に、一番確かに拂ふことが出来、又受取るにしても、此處で受取るのが一番便利で、一番安全で、一番早い。早い話が、日本で南米の或る國から品物を買つても、其の代金は直接に南米の某國へ送るのではなく、倫敦に送つて倫敦で拂ふ。又南米の某國も倫敦で受取る。其の方が何方に取つても便利であつて、且

つ安全であるからである。勿論それは爲替の作用に依るのである。

品物の代金の受拂のみならず、總ての爲替は倫敦に宛て、取組むことになつて居る。例へば印度に金を送らうと云ふ場合に、直接に印度に向つて爲替を取組むより、英吉利に爲替を取組んで送つた方が安く行く場合が幾らもある。現に戦争前までは、日本から米國に送金するに、大抵紐育宛の爲替を組んで居つたのである。戦争が始まつてから暫くの間は、倫敦宛の爲替を組んだ。そうして其の倫敦宛の爲替は、之を英國に送るのではなく、やはり米國に送るのである。米國の人は其の爲替を貰つても、現金は倫敦でなければ取れないけれども、亞米利加の方には、他に倫敦に送るべき金があるからそれと差引をする。それを爲替の裁定と名ける。殊に日本と亞米利加との爲替相場はどうして立つかと云ふと、倫敦相場を標準にして立てるのであつて、日米間丈けの關係のみで相場が立つのではない。倫敦と亞米利加との間の爲替相場が幾ら、日本と倫敦との爲替相場が幾らと云ふことを見て、日本と亞米利加との相場が何程と定まるのである。非常に經濟の發達して居る亞米利加でさへさうであるから、其の他の國に於ては、外國に對する爲替は皆倫敦

宛にして取組むことになつて居る。例へて云へば伊那の町から同じ信州の長野市に物を送るに直接に長野へ送らずに先づ東京へ送つて、東京から長野へ送つて貰つた方が早くて安く行く云ふやうな有様になつて居るのである。

倫敦は經濟上實に世界交通の焦點に當つて居るので、他の國に行くには海もあれば山もあり種々の障碍があるのであるが、倫敦に向つては世界各國から立派な道が付て居つて汽車も行けば自動車も行く、天下の大道は悉く倫敦に集つて居る様なものである。倫敦に行けば何處へ行くのにも極めて便利で、又安全である。これ倫敦のロムバード街を中心として世界の經濟生活が營まれて行く所以である。馬鹿くしいではないか、そんな遠廻りをするよりも、直接に交通した方が宜からうと云ふ考が起るであらうが、決してさうでない。倫敦を経て行く方が遙かに便利であるのである。日本が濠洲から羊の毛を買ふにも、其の註文は倫敦に向つて發する、又代金も倫敦で拂ふ。實際の品物は濠洲から神戸なり横濱なりへ運んで來るが、取引の關係は倫敦に於て行はれる。所が物に依ると現品の取引も倫敦でする方が便利のこともある。例へば日本の銅を歐羅巴に賣るには

先づ倫敦の商店に賣込む。さうして積出先も大抵倫敦にし先方からの電報に依つて積出すやうにして置く、詰り倫敦の商人に賣つたことになつて居るのである。其を買ふ方は露西亞で日本の足尾の銅を買はうと云ふ場合にも、日本の古河へ直接に註文して來ないで倫敦の銅を取扱ふ商店に向つて註文する、倫敦の商店では日本に向つて、此の間買つた銅は露西亞のペトログラードに送れと言つて電報を打つて寄越す。或は亞米利加から註文があれば、亞米利加へ送れと言つて電報を發する。日本に在つても品物は先方のものであるから、先方の命令次第何處へでも送らなければならぬ。積出す日までは先方が選擇の自由を有つて居る（之を『オプション』と名くる）。横濱に於て倫敦の商店に賣つたと云ふものゝ、其銅は亞米利加へ行くかも知れない、獨逸に向けられるかも知れない。其の決定は誰れがするかと云ふと、日本人がするのではなく、倫敦に於ける英吉利の商人がするのである。英吉利の商人と云ふが、それは實は倫敦に居る獨逸商人である。銅の賣買に就ては獨逸商人が殆ど全權を握つて居る。であるから開戰當時獨逸の商人が英國を引揚げてしまつた時には、一時銅の取引が出來なかつたと云ふ。英吉利の商人が急

に其眞似をしやうと思つたが出来ない。今日では出来るやうになつたが當時は出来なかつた。それが爲め一時銅の價が下つた。兎に角さう云ふやうに品物の取引も倫敦で行はれるものが多い。それから又世界中の船の出入船賃と云ふやうなものも倫敦で極まるのであつて他の國では分らぬ。保険料もさうである。世界中の保険料は倫敦のロイドで決定する。ロイドで認められない船には何處でも保険を附けない。日本の船でも何でもロイドで等級を附し、一番安全な船は保険料も安く怪しい船は高い。全く悪いのには保険を附けない。斯くの如くになつて居る但し何れも大體のことを言ふので、一々に就て取除の場合はいくらもあることは言ふまでもない。

さう云ふ風に商品の取引又其の代金の受拂と云ふことは、倫敦が世界の中心となつて居るのであるが、其の外倫敦には世界中の金を借りたい人、貸したい人が集つて居るから、倫敦へ行けば、何時でも一番便利に、又どんなに澤山でも自分の欲するだけの借金をすることが出来る。他の所はそれが出来ない。紐育でさへも、何時でも必ず欲するだけの借金が出来るとは言へない。倫敦へ行けば、相當な條件が具はつて居りさへすれば、何時でも

もどんな大金でも借りることが出来る。同時に又金を貸さうと云ふ者も、倫敦へ行けば、一番安全にどんなに澤山の金でも貸付けることが出来る。それと云ふものは倫敦では何時でも金が得られる、何千萬でも何億萬圓でも得られる。又其の反對に倫敦へ行けば金が何時でも賣れる、さうして倫敦で賣る相場が一番好い。だから纏まつた金を賣らう買はうとするには倫敦に行かなければならぬ。金は銀とか銅とか鐵とか云ふものと違つて貨幣になるものであるから、金が得られると云ふことは、詰り貨幣が得られると云ふことである。

そこで歐羅巴諸國も歐羅巴以外の國も、皆倫敦を中心として經濟を立て、成べく倫敦で通りの好いやう、倫敦でやつて居るのと一致するやうにと、其經濟上、商業上の仕組を立て、置く。自分の國の都合から言へば、斯うした方が宜いと思つても、倫敦へ行つて通りが悪いと云ふ事であれば、自國の便利は第二として、倫敦へ行つて通りの好いやうにする。倫敦へ行つて商賣をし、倫敦へ行つて金の貸借をし、金の受拂をするのに、どうすれば一番通りが好いかと云ふと、倫敦で受取つて呉れる金が自國の金であると云ふことが一番宜

い。倫敦で受取る金は金貨である。英國は金貨本位の國であるから、倫敦に行つて商賣をせやう、經濟上の關係を整理せやうと云ふ國は、自國の都合は第二として、金貨本位制にならなければならぬ。世界の各國が段々金貨本位を採用し、金貨本位國となつたのは、金貨本位が自國の爲めに都合が好いからではない、否、金貨本位にすることを必要とし、ない國に於いても、英國との關係を便利にする上から、金貨本位國となつて居る國が幾らもある。例へば日本は金貨本位國である。日本が金貨本位の制度を採用したのは、表面の理由としては、倫敦へ行つて商賣をしたり借金をするのに都合が好いからと云ふやうなことは誰れも言ひはしない。大藏大臣が議會に於て説明するにも、そんなことを言ひはしない。他に理由を求めて、日本も段々富の程度が高まつたからとか何とか彼とか色々の理由を言ひ立てたのであるが、それは無理にゴチ付けた理由で、實は日本も段々世界の經濟の仲間入り、英米其他の諸國と取引が行はれるやうになつたので、乃ち倫敦を中心として國の經濟を立てなければならぬと云ふことになつたからである。若し日本の必要から金貨本位になつたものならば、日本國內に金貨を流通して居るべき筈であるが、實際に

於ては少しも金貨が流通して居らない。恐らく諸君も金貨を手にはせらるゝ機會は餘り度々はなからうと思ふ。私などは金貨を見たことは殆んど無い。態々日本銀行へ行つて兌換して持て來れば格別であるが、さうでない限りは金貨を見る機會は全く無い。又見なくとも差支ない。と云ふものは吾々は實際の生活に於て金貨などには必要がない、必要がないどころではなく却つて厄介である。吾々は平生兌換券と補助貨だけで何の不自由もなく用を達して居る、金貨を持つ必要はない、従つて金貨が國內に流通して居らないのである。日本でさへそうである、印度の如きは金貨本位にする必要はない、支那にしても同様、比律賓などに於ては尙更其の必要がない。印度の如きは自國には金が無い、自國で金を使つては居らないで、外國に對して金貨本位、隨分變なことをやつて居る。此れ皆英國との附合上採用したのである。所が平時には其の變なことでやつて居つたが、今度の戰爭で其の變なことが出來なくなつて、先頃の新聞にもあつたやうに、印度證券賣出の制限と云ふことになり、之が爲に印度と貿易をして居つた商人、殊に棉花を輸入して居つた商人や紡績會社では非常に苦んだ。我邦で使用する棉花は何處から來るかと云

ふと、主に印度と亞米利加から來たのである。所が印度證券賣出制限の爲に、印度へ金が送れなくなつた。金が送れないから代が拂へない、代が拂へないから棉を買つて來ることが出来ない。それは金がないのではなく、代金を拂ふ方法が無くなつたからである。それなら金貨を持つて行けば宜いであらうが、英吉利の方で金を持つて來てはならぬと言ふ。印度人に金の味を覚えさせては困るから、金を持つて來てはならぬと言ふ。それが爲に印度から綿を買つて來ることが出来ないで、一時非常に苦しんだ。

なぜ英國との附合上金貨本位にしなければならぬかと云ふと、例へば銀貨を以て本位として居ると、金と銀とは常に同じ比價を有つて居るものではない、今日は金一匁を以て銀三十六匁を買ひ得ると云ふ相場であつても、明日は三十六匁半になるかも知らぬ、或は三十五匁になるかも知らぬ。金と銀との間の比價は斷えず變動がある。従つて爲替相場が絶えず變動する。今英吉利へ金を送らうと云ふのに、日本の一圓は二志〇片十六分の一と云ふことであれば、其の割合で金を送れば宜いのである。所が若し日本が銀貨本位國であつたとすると、銀の相場は始終變動するから、今日二志〇片十六分の一の割合で

銀を拂込んだものが英吉利で拂渡す時には銀が高くなつて二志一片十六分の一になつたとすると、英吉利ではそれだけ餘計に金を拂はなければならぬ。買つた品物でも、拂ふ金の高が時に依て違ふ。それでは商賣がやり憎くなる。物の賣買の心配の外に、爲替相場の變動の危険が伴ふ爲に、どうも商賣が圓滑に行はれない。之に反して英吉利も金貨本位日本も金貨本位であれば、爲替の需要供給の關係で、多少の差はあるけれども、金と銀との間に於ける程の變動は起らぬ。極く僅かの相違である。故にその方が貿易の上にて便利であるから、海外貿易に就ては、各國皆英吉利と同じく金貨本位の制度を採るようになつたのである。

斯くの如くに戦争の始まる前までは、世界の各國が外國との取引をしやうと云ふには、何れも英吉利と同様に金貨本位の國になり、倫敦を中心として、總てロムバード街の御厄介になつて居つた。今の世界は全く金の世の中で、金がなければ何事も出来ぬ。戦争をするのにも、第一には金が必要で、金が無ければ戦は出来ない。總てのものは金の價で處理しなければならぬ。

所が金の價で處理すると云ふことは實際現金を以て授受するのではない。殊に英吉利の發達したる金融市場に於ては現金の遣り取りと云ふものは極く少い。何十萬磅、何百萬磅と云ふやうな金を實際に動かすと云ふことは極めて稀れであつて唯だ勘定だけで決済し現金を遣り取りするのは其の勘定尻だけである。即ち日本なら日本で外國に品物を賣つて其の受取るべき代金と日本が外國から品物を買取つて其の支拂ふべき代金とは現金で受取つたり現金で支拂つたりするのではなく爲替で決済してしまふ。それを稱して信用と謂ふ。信用で總ての取引を行ひさうして餘つた金額だけを現金で渡す。だから現金で遣り取りすることは餘り立派な商賣ではない。個人でも信用の無いものは現金で取引するが信用のある者は現金の取引は極く僅かである。國と國との間の經濟上の關係と云ふものは名義上は金錢を以て勘定して居るけれども其の實は物と物との遣り取りである。物を遣りて物を取り其の差額だけを金錢で拂つたり受取つたりして居る。而して其の總勘定をする所は何處かと云ふと倫敦のロムバード街である。日本で品物を賣る國は世界中に澤山ある又買ふ所の國も澤山ある。けれども其等の國

と一々代金の受拂をするのではなく倫敦で決済することになつて居る。併し日本から輸出した品物の價と日本へ輸入した品物の價とがさうキチンと出合ふものではないから其の差額だけを現金で遣つたり取つたりする。輸出した品物の代價が少くて輸入した代價が多かつた時には其の不足しただけの金を日本から倫敦に持て行く。其の反對に近頃のやうに賣つた代價の方が多くて輸入が少い時には差引超過しただけの金を受取る。其の受取つた金は勿論日本のものであるから持て來やうとすれば持て來ることも出来るが其儘倫敦に置くこともある。それが所謂在外正貨である。

二 國際貿易の原理

諸君が近頃の新聞を見ると日本の在外正貨が非常に殖えた何億になつたと云ふやうなことが書いてある。それは詰り日本が差引して受取つた金である。而して其何億圓の日本の在外正貨の大部分は無論倫敦にあるが少しは巴里にもある紐育にもある。近頃は段々紐育の方に餘計置くやうにして居ると云ふことである。それは戦争の爲に倫

救に置くことは不安になつて來たから、比較的安んずるに持つて行つたのである。それでもまだ大部分は倫敦に置いてある。又其の一部分は日本へ持つて來たのもある。其の結果日本銀行の金庫にある在內金貨も大部殖えた。それは何によるかと云ふと、日本が買つた價のものよりも賣つた價の方が多かつたからである。それを名けて輸出超過と謂ふ。品物の輸出が輸入より多いのが輸出超過、其の反對に輸入が輸出より多ければ輸入超過となる。

輸出が殖えたと云ふには、二つの意味がある。其の一は賣つた品物の分量が實際に殖えたと云ふことである。例へば生絲に就て言ふならば、昨年十萬相賣れたものが今年は十五萬相賣れたと云ふやうなものである。第二は賣上金高の殖えたと云ふことである。賣上金高の殖えたと云ふのは金銭で言ひ現はす所の代價が殖えたと云ふ事である。例へば三年前の生絲の代價と今日の代價と比べると、今日は非常に上つて居る、それ故實際賣つた分量は同じく十萬相であつても、賣上金高は多くなる。品物を餘計に賣つて居るのではないが、代價が高くなつた爲に、賣上金高は殖えたことになるのである。

併し乍ら賣つた物の値が上ると共に、買つた物の値も上ると云ふのであると、それは唯だ呼高が殖えただけである、帳面づらが殖えただけで、國の富が殖えたのではない。併し呼高だけの殖方でも、買ふ物の方の呼高は少しも高くないか、或は高くなつても左程高くないのに、賣る方の物の價が大變高くなつて居れば、やはり本當の利益になる。何となれば勘定する上に於て、賣上高が多くなるから、結局それだけの金を貰ふから、即ち金貨が殖えるのである。

そこで戦争の前までは、歐羅巴の諸國、亞米利加、日本と云ふやうな、世界の文明諸國の大多數に就て見ると、賣る者の方が多くて買ふ物の方が少ないのが當り前である。即ち輸出超過の方が當り前である、若しさうでなければ、それは甚だ憂ふべき状態であると云ふことになつて居つた。それ故に政府を初め、其の道々の人は、輸入超過の傾向が現はれて來ると、國民に對して注意を與へる。反對に輸出が多くなつて來ると、順調である、結構のことであると、言つて喜んで居た。併し如何なる場合と雖も、輸出超過でありさへすれば、必ず宜いとのみは言へない。

斯く歐羅巴の諸國や亞米利加合衆國日本と云ふやうな國は輸出超過を以て常態として居るが、其の正反對に輸入超過を以て常態として居る國が二つある。毎年々々賣る物よりも買ふ方の多い國が二つあつた。それは即ち英吉利と獨逸である。

輸出超過を以て常態とし、賣る方が多くて買ふ方が少いのを喜んで居る國は世界經濟の上から言へば借金國である。何か知らず借金をして居る。其の借金は政府の公債もあらうし、民間の借入金もあらう。又た借金と云ふ名の付いて居らぬ借金もある。それは何かと云ふと外國の資本が國內の事業に向つて投ぜられて居るので、國から見るとそれも一種の借金である。借金をして居れば、年々利子を拂はなければならぬ、又期限が來れば元金も返さなければならぬ。故に借金國に於ては、買ふものより賣る物の方が多くならなければならぬ。其反對に英吉利と獨逸とは貸金國である。外國に金を貸して居るから、年々利息が入つて來る、又元金の償還もあるから買ふ物が多くても國內の富は減らない。

第二に賣る方の多い國は、國の外に於て人の爲に働いて、其の代價を得ることが甚だ少

いか、若しくは全く無い國である。反對に英吉利や獨逸の如き國は、國內に於てのみならず、國外に於ても大變稼ぐ。其の稼ぐ主なるものは船の運賃及び保険料である。英吉利及獨逸の船は、自國に發着するものばかりでなく、外國間に航海して外國の貨物を運搬し、其の運賃を取り又保險業を營んで保險料を取る。是等の収入は直接に金で入つて來なくとも、何時か知らず何かの形に於て入つて來る。其の外に貸金の元利金、外國の事業に投資して居れば、其の利益の配當金といふやうなものが入つて來る。それも正貨で入つて來るのではなく、多くは色々の形の品物で入つて來るのである。所が他の國は英國や獨逸の船に依て運んで貰ふから、運賃は拂はなければならぬ、又保險料も拂はなければならぬ。尙借金に對する元利金も拂はなければならぬ。それらのものは色々の品物を輸出して、それで拂ふ。若し品物だけで足りない場合には、其の不足額は倫敦に於て金貨を拂はなければならぬ。それが即ち借金國は輸出超過を以て常態とし、貸金國は輸入超過を以て常態とする所以である。

であるから日本で苦心して生絲を造つて輸出する、或は樟腦を輸出する、銅を輸出する、

美術工藝品を輸出すると云ふやうに、盛に輸出を圖つて居るが、其輸出した物は、日本が外國から買った物の代價として拂ふ外に、借金の利息にも、船の運賃にも、保険料にもなつて居る。日本の人は骨折つて生絲を拵へ、それを織物にして自分で着る代りに、自分は安い木綿を着て高い生絲を輸出し、借金の利子を拂ひ、運賃を拂ひ、買った品物の代として拂つて居る。勿論何を賣つた代が何に當ると云ふやうなことにはなつて居らない、日本から輸出したものゝ總額が日本に拂ふべき總額に當つて居るのである。所が英吉利や獨逸は外國から取るものが多いから遣る品物は少くて済む。例へば英吉利が十億磅に當る品物を外國へ出しさへすれば、それに對して十六億磅に當る品物が入つて來て、丁度勘定が出合ふとすれば、差引六億磅だけの品物が餘計に英吉利に入つたことになるから、それだけ英吉利の富が殖ゑた譯である。其の中には原料品として、精製の上再び外國に賣行くものもあらう、或は煙草であるとか、砂糖であるとか云ふやうな消耗品もあらう、又中には全く無駄な贅澤品もあらうが、兎に角其大部分は英吉利人の富となつて居る。反對に日本や亞米利加の如く輸出が超過して居る國、或は超過しなければならなかつた國は、外

國から買ふ物が二億圓、外國へ賣るものが二億六千萬圓、差引六千萬圓だけ多くのものを出さなければ勘定が出合はないと云ふことで、其の六千萬圓と云ふものは餘計に外國へ遣る譯である。自分で着るべき衣物も着ないで、外國の人の用に供して居るのである。其の點から云ふと、國內の生産品が無暗に海外に出ると云ふことは餘りに褒めた話ではない。尤も國內に於て十分に使用し、其の餘剰を出すといふならば宜しいが、國內に於ては使ひたいが使はずに、皆外國へ出してしまふことはまことに馬鹿々々しいのである。例へば折角母親が牡丹餅を拵へたが、自分も食はず子供にも食べさせずして、皆隣りの家へ持つて行つて、其で輸出が超過したと云つて喜んで居るやうなものであるから、甚だ馬鹿々々しい。出來るなら日本で作った品は、日本で皆使つた方が宜しいやうに考へられる。けれども是までの日本では、成るべく多くの品物が出るのが宜しいとしてあつた。其は何故かと云ふと、出るのが宜しい譯ではない。若し出ないでも勘定が立てば成るべく外國に出ない方が宜い。日本で出來た品物は、出來るだけ多く日本人に使はせたい。日本で出來た米は全部日本で食べ、日本で出來た生絲は皆織物にして日本人に着

せたい。現に徳川時代にはそれでやつて居つた。然し斯くすれば其の代りに、それよりも必要な役に立つ外國の品物を買つて來ることが出來ない。お母さんが骨を折つて拵へた牡丹餅を子供にも食はせず隣りの家へやつてしまつたと云ふのは、牡丹餅を隣りへ遣れば其の代りに三度の御飯が満足に食べられる、子供も學校へ行ける、書物も買ふことが出来る、遣らなければ三度の飯も食べられぬ、學校へも行かれないから、牡丹餅は食べたいが我慢して隣りの家へやつてしまふやうなもので、日本は生絲を西洋へ遣りたくない、日本の米を外國に出したくはない、けれどもそれを外國に出すと云ふことは、それよりも必要な品役に立つ品が外國から買へるから、其の代價として出すのである。吾々一個人から云つても、貰つた月給は成るべく使ひたくない、出來ることなら其の儘郵便局へ持つて行つて預けて置きたい、けれどもさうしたのでは食べて行くことが出來ないから、少しも使はずためて置く譯には行かぬ。唯成るべく必要なものを買つて、無駄な費を省くことを心掛けるまでのことである。國が輸出したり輸入したりするのも、それと同様で輸出するものよりも、自國に取つて多く價値のある物を輸入しようとするのである。國內

で使つてしまへば、吾々の得る利益は十しかないが、それを外國へ賣つて、其の代りに物を買へば、十五の物が得られるから輸出するのである。であるから輸出ばかりして輸入を少しもしない國があつたら、其程馬鹿氣たことはない。

輸出するのは輸入したいからであつて、輸入するのは輸出したいからではない。であるから、日本で生絲を拵へて、それが外國へ出て行くことが宜いのではない。其の代りとして、生絲よりもつと吾々の役に立つ物が外國から日本に入つて來るから、それで生絲の賣れることが宜いのである。唯だ日本の生絲が外國へ出て行くだけであつたならば、非常な損である。其の事を學問の上では簡単に『國際貿易は輸入の利益の爲に行はるゝものなり』と云つて居る。即ち輸出は一の犠牲と看做す可きものである。

此點は極めて明瞭のことであるに拘はらず、どうも日本の人に能く分つて居ない、殊に外國貿易だの、外國爲替の事務に當つて居る人ほど却つて分つて居らない、反對に判斷して居る。輸入が無くなつて、輸出ばかりになつたら大變結構だと——さうまでも言はないが、さう云ふ考へで論を立て、居る人がある。輸入は出來るだけ之を阻止し、或は絶無

を期し、輸出は多々益々増加することを望むと云ふやうに言つて居る。又同じ貿易商でも、輸出商であると云ふと、大變人から歓迎せられ、輸入商だと云ふと、左程歓迎されないやうであるが、本來はさういふものではない。各種の機械、器具、鐵材、染料、其の他日本で出来ない物、出來るとしても完全でない、或は價が非常に高いと云ふやうなものを、外國から割合に安く買つて來ることになれば、それは洵に結構であるが、現今の如く日本の物はどしどし買つて行くが、日本に必要なものは何も禁止、彼も禁止で輸出を止めて居るのは、日本に取つては甚だ迷惑の話である。

戦争の始まつて以來、歐洲の諸國は必要な品物を盛に買込み、金は拂つて呉れるが（但し露國は拂つて呉れぬ、將來も拂へるか如何か甚だ怪しい）、此方で必要なものは一向賣つて呉れぬ。染料も來なくなれば、鐵類も來なくなる、綿花も來ない、鉛筆も紙も乃至は濠洲から來た羊毛までも日本には賣つて呉れない。日本人が粒々辛苦して拵へたものは、どしどし買つて行つて使つて居るが、此方には何も寄越さない、唯だ金で拂ふだけである。であるから此の状態で三年も五年も繼續すれば、成程日本の輸出をして居る人は金持に

なる、日本の在外正貨、或は國內の正貨は殖ゑるだらうけれども、品物は殖ゑない、却つて減る一方である。成程日本の正貨準備も非常に殖ゑ、在外正貨も著るしく増加し、日本全體としては金は大變に出來たが、然らば其の金といふものは何か、金と云ふものは食べ物でも飲み物でも着る物でもない。それだから如何に金銀を食つても、金銀は飢ゑた時に握飯一個の役にも立たない、渴いた時には水一杯の用をもなさない、萬金を積んでも凍えた時は布子一枚の代用をもしない。金を指輪にしたり腕輪にしたり其の他種々の裝飾に用ひては居るが、それは金の用途の極く一部分であつて全部ではない。日本が金持になつて結構だといふのは、如何なる意味かと言ふと、詰り是が又他の品物と換へることが出来るからである。今日日本の所有して居る正貨が十億近くあると云ふとであるが、其の十億に近い金は何も貴い譯ではない。それを金の延棒にして並べて置いても、それで人が偉くなる譯でもなければ、腹が膨れる譯でもない。唯だ之を以つて必要なる品物、役に立つ物品に何時でも換へることが出来るから貴いのである。だから結局金の殖ゑるのが宜いのではない、物の殖ゑるのが宜いのである。

三 金の經濟と物の經濟。輸出入と在外正貨

昔々の經濟生活は、物を殖やし物を豊にするにあるが、その物を殖やし物を豊にするの道行として、先づ金を殖やさねばならぬと云ふのが、今日の經濟生活の特色である。あの人は近頃金持になつた、十萬圓も金を拵へたさうだなどと噂をするところがある。所が其の十萬圓と云ふのは、何も十萬圓の現金が積んである譯ではなく、或は田畑であるとか、建物であるとか、品物であるとか、權利であるとか、色々の形になつて居る、それを金の價に見積ると十萬圓であると云ふのを、手取早く十萬圓拵へたさうだと言ふのである。それは金と云ふものは、如何なる品物とも換へることが出来るもので、一億圓あれば一億圓だけの品物が得られ、十億圓あれば十億圓だけの品物が得られる、それが貴いのであつて、金其ものが貴いのではない。今度日本に十億の正貨が出来て有難いと云ふのは、十億の正貨が有難いのではない、十億に當る品物と何時でも換へられる金が殖えたから有難いのである。結局は品物の殖えるのでなければいけない。であるから、外國貿易は今も戰爭中で

大變模樣が變つて居ると云ふけれども、實際に於て輸入は常に輸出より多くなければ損をして居るのである。即ち戰爭前の英吉利や獨逸のやうな有様でなければいけないのである。日本や戰前の亞米利加のやうに輸出超過を喜んで居つたやうな状態は、決して満足な發達をして居るとは言へない。

併ながら外國から金の入つて来る見込もないのに、一足飛に英吉利や獨逸のやうに輸入ばかり超過することは尙更危險である。日本の今日の經濟に於ては、まだ輸入が餘計であると云ふことは宜しくない。なぜ宜しくないかと云ふと、日本に輸入が餘計殖えること云ふことは、詰り借金が殖えると云ふことになる。拂ふべき代價物無くして、拂ふべき高が多いのであるから、詰り借になる。お母さんが拵へた牡丹餅を隣りに持つて行かずに、皆自分の家で食べてしまひ、それから米や着物は餘所から買つて来る、即ち輸入超過である、之に對して拂ふべき金が無ければ、それだけのものは借になつて居るから、何時かは返さなければならぬ。故に是は輸入超過がいけないのでなくして、借金になるからいけないのである。英吉利や獨逸の輸入超過は、外國から入つて来る可き筋道の金があつて輸

入が超過するのであるから宜いのである。自分は何をしなくとも、世界の各方面に金を貸したことになる。或は貸金の利子もあらうし元金もあらう、其の他運賃とか保険料とか色々取るべき金がある。それが現金でなく種々の品物となつて、亞米利加からも、支那からも、日本からも、濠洲からも輸入せられるのであるから、輸入が超過しても借金とはならないのである。

であるから輸入超過には極く宜いのと、極く悪いのと二種ある譯である。中途半端の輸入超過と云ふものはない。日本の如きは輸入超過は今でもいけない。英吉利や獨逸は輸入の超過するだけ宜い。と云ふものは日本で輸入超過になると、超過しただけは借になるから、何時か返さなければならぬ。所が英吉利や獨逸は返す必要がない。取り放しだから、是は無論輸入の超過した方が宜い。其反對に輸出の超過するのが宜いと云ふのは、輸出がどん／＼超過すれば借金のあつた國は借金が減るし、それが尙進むと今度、は貸方になる。さうなれば洵に結構である。今日の日本の状態は恰度それである。生絲を製し銅を掘り樟腦を取つて盛に外國に賣出す。之に對して外國から買つて來るこ

とは出來ないから金がウンと殖えた。此の金は貸付金に換へやうと思へば何時でも換へられる。今の所日本に必要な現品には換へることが出來ない。だから九億も十億も金が出來たと言つても何にもならない。砂漠の眞中ではどんなに澤山の金を持って居つても役に立たない、却つて持て居るだけ邪魔になる位のものである。

併し今日日本の持て居る金は品物にはならないが、貸付金にして置くとは出來る。そして戦争の濟んだ後には無論品物に換へることも出來やうし、貸して置けば利息も取れる。又斯う云ふ勢で今後尙進んで行つたならば、今までの借金は返してしまつて、貸金國となり、戦争前の英吉利や獨逸と同じになれるかも知れぬが、まだ輸入が超過してはならぬ。今の所では品物が益々輸出され、品物の價が益々高くなつて、成金の續々出て來る方が宜い。日本で成金と云ふと、大變卑しい者のやうに思ふが、外國との商賣に依る成金は、詰り世界の表に於てそれだけ日本の富を殖やして居るのである。金が出來た爲に、今まで借金國であつた日本が、反對に貸金國にならうとして居る。現に日本は大分借金を減らした。佛貨公債も、償還し英吉利にも金を貸付け、露西亞の大藏省證券をも引受けた。

其は政府がやつた仕事であるけれども、日本國と云ふ上から見れば、政府のした事であらうが、民間でした事であらうが同じである。だから吾々が露西亞の大藏省證券の募りに應ずれば、露國に對する日本の貸付金が殖えることになる。近頃大變に殖えたと云ふ在外正貨も、品物にはならないが貸金には換へられる。ナニ換へられるぢやない、換へなくとも既に貸金になつて居る。之を貸金にしやうと思へば其の儘にして置けば宜い。と云ふのは、日本の在外正貨と言つてもそれだけの金塊が倫敦に積んである譯ではない。在外正貨と云ふから、一寸考へると倫敦なり紐育なり巴里なりにそれだけの現金があるやうに考られる。一寸ではない篤と考へてもさうでなくてはならぬ。所が日本の在外正貨と云ふものは、それだけの正貨が積んである譯ではなく、正貨に代るべきものがある。正貨代用のものがあるのである。それに強て名を付けると在外債權とも謂ふべきである。それを日露戰爭中に在外正貨と名づけたのである。其の當時は實際無理がなかつたのであつて、日本の金貨は非常に減つて來て、日本の金貨本位は危くなつて來たのである。そこで據らなく英吉利から金を借りた、其の借りたのは現金を借りたのではなく、唯

だ權利を借りたのである。權利を借りてそれを正貨と看做して、日本銀行の兌換準備とした。だから是は無論兌換銀行券條例違反である。違反であるが今でもそれをやつて居る。日本銀行の兌換銀行券と云ふものは、一億二千萬圓までは保證準備で宜い、即ち現金を積んで置かなくとも、商業手形を積んで置きさへすれば宜い、それ以上は兌換券一圓に對して一圓二圓に對して二圓、即ち同額の金貨を日本銀行の本店なり支店なりの金庫の中に現存しなければならぬことになつて居る。所が實際はさうでない。此の頃は大部分割合が殖えたが、それでも三分の二には達しない、半分少し餘あるだけで、半分より少しだけものは日本銀行の金庫の中には入つて居らぬ。けれども正貨が無いと云ふとになると、正貨準備と云ふものが無くなるから、外國から金を借りて準備とした。所がそれは日本にあるのではないから、在外正貨と言つた。正貨と言つても、それだけの現金が積んである譯でなく、色々の形の債權になつて居るのである。と云ふものは何億圓かに當る金を、唯だ積んで置くことは馬鹿らしい、又今日は各國とも大騒ぎをして、金を集めやうとして居る所であるから、逆も實際にありはしない。そこで日本が取らうと思へば取

れる権利があると云ふことにしてある。其の大部分は英國の中央銀行即ち英蘭銀行に預金になつて居る。又或る部分はコールローンなつて居る。此のコールローンは平時の倫敦ならば呼へば無論來るに極まつて居るけれども今はそれが餘り巧く行つて居らぬやうであるから、是は餘程考へものである。兎に角コールローンにもなつて居る。併しそれが幾らあるかと云ふことは、日本銀行も政府も發表しないから分らぬ。秘密にする必要もないのであるから公表したら宜さうなものであるのに公表せぬ。ツイ此の間までは在外正貨が幾ら、在內正貨が幾らと云ふことさへも公表しなかつた。山本大藏大臣續いて武富大藏大臣の時代になつて、大分明瞭に發表するやうになつたが、それでも在外正貨の内容に就ては決して公表をしない。それは正貨でないものを正貨と言つて居るのであるから、餘り詳しいことは云へないのであらうが、其内容は出来るだけ明瞭にして置いて貰ひ度いものである。

兎に角日本の在外正貨何億圓と云ふものは、今云ふやうに英蘭銀行への預金、其外英吉利の大藏省證券も買つて居らうし、佛蘭西の公債も持て居らうし、貸付てもある。それ等

の金額も分らぬが、要するに現金は大部分英國の懷ろにあるのであつて、日本の持て居るのは證書のみである。其の中には直ぐに金貨と引換へられるものもあるが、期限が付いて居つて、直ぐに正貨に引換へることの出来ないものもある。それを政府や日本銀行の當局者は在外正貨と言つて居る。それは縦し日本の手に正貨が無くとも、日本で必要の時に正貨が得られるのならばまだ恕すべきであるが、今日の狀態では、之を正貨にして日本の用に使ふことは出来ぬ。若し日本で其全部を正貨にして回収しやうとすると、英國政府は頑として之を拒むに相違ない。強て回収しようとするれば、或は國交斷絶に至るかも知れぬ。又それを日本に持て來れば英吉利が倒れてしまふ。それは英吉利には澤山の金貨があるに相違ないけれども、其の金は一面に於ては英吉利の兌換準備になつて居る。一の金が二重に兌換準備の用をして居る。であるから若し一朝英吉利と戦争をするこゝとなれば、何億圓かの日本の在外正貨は全部押へられてしまふ。平和に復すれば解決が付くであらうが、戦争中は全く役に立たない。取れない貸金になつてしまふ。だから在外正貨の處分と云ふことは非常に六ヶしいのである。

在外正貨といふものにはさう云ふ危険がある。そこで少しでも危険の少い所に貸して置かうと云ふので、近頃大分紐育の方へ持て来たやうであるが、是も日米關係が悪くなつて、國交斷絶になつてしまへば、やはり同様の運命に陥るから、海外に在る債權は、内國に在る正貨のやうに安全ではない。安全でないからと言つて、一も外國に債權を有つて居なければ、今日の世界に立つて行くことは出来ぬ。故に是は程度の問題である。どれ位の程度ならば危険を冒しても宜いかと云ふことである。それに就ても今日日本の所有して居る正貨の中、澤山の部分を海外に置き、國內には寧ろ少額の正貨しか無いと云ふことは、程度問題としても其の當を得ないものである。

日本の富が段々殖えて、是までの借金は全部返済し、尙進んで日本が外國に對して貸金を持つやうになると、今まで吾々が生絲なり其の他の品物の形で拂つて居つたのが、拂はないで宜いやうになり、反對に外國から何等かの形に於て日本に品物が入つて来るやうになる。即ち生絲を我邦から輸出する代りに、それより吾々の要するレールなり、機械なりが餘計に入つて来るから、其の結果生産を増加せしむることが出来る。吾々が努力し

て生産の増加を來した結果は金が殖えて来るけれども、併し吾々の働くのは金を殖やす爲に働くのではない、物を殖やす爲に働くのである。吾々は金の殖える事を望むものではない、所謂拜金宗ではない。唯だ金の御利益は、之をお賽錢にすれば如何なる品物でも得られる、他の物では容易に得られないが、金ならば衣物が欲しければ衣物になり、食物が欲しければ食物になる、或は貸金にすることも出来る。而して世界に於ける金の中央市場は倫敦である。倫敦へ行けば何時でも金が得られる。他の所では得られることもあれば、得られないこともあるのである。是が世界の貨幣經濟の大利益である。

四 商品輸出國より資本輸出國に移り行く英國

以上戦争前までの世界の經濟は倫敦の金融市場を中心として動いて居る所以を説明したが、さて其の金融市場を支配して居る根本の力は何であるかと云ふと、それは資本である。倫敦の金融市場とは詰り資本市場と云ふことである。

資本は貨幣の高を以て言現はされるものであるけれども、貨幣の一定の高が資本とな

るのではない、資本となるには一の特色が要る。然らば資本とは何かと云ふと、金銭上の利益即ち利息利潤を得る爲に投下せられたる財産、それが資本である。今日資本を以て世界を支配して居る英吉利と雖も、決して昔から斯の如くに資本を以て生命とした國ではなかつた、殊に資本の力を以つて世界を左右するやうになつたのは割合に新しいことである。どうして資本を以つて生命とし、資本を以て世界を左右するやうになり得たかと云ふと、富を得たからである。資本と云ふものは皆富である、故に資本を殖やすには富が殖えなければならぬ。併し富が殖えても、必ずしも資本が殖えたと言へない。何となれば富には資本となるものと、資本とならざるものとがある。資本とは利益を産出す爲に使はれる富であつて利益を得る爲に用ゐられない富は資本ではない。故に日本に何億の富があると言つても、其中には資本となつて居るものと否らざるものとある。例へば十萬圓を投じて立派な公園を拵へたとすると、其の十萬圓は資本ではない、何となれば公園からは何の金銭上の利益をも得ることが出来ないからである。所が十萬圓を以て鐵道を敷設したとすると鐵道からは運賃の收入がある、故に是は資本である。同じ物で

あつても資本となる場合と、資本とならない場合とがある。例へば土地に就ても、資本となる土地と、資本とならざる土地とがある。公園に使つたり空地にして置く所は資本ではない。所が或る土地に營業所を設け工場を建て、鐵道を敷設すれば、其の土地は資本である。英吉利が資本を大變殖やし、資本の力に依て天下を支配して居ると云ふことは、無論富の殖えたことと云ふことを意味するのであるが、併し富が殖えたことと云ふことだけでは資本が殖えたこととはならぬ。殖えた所の富を生産に使用する、或は富は殖えなくとも従前生産的に用ひられなかつた富が生産的に用ひられるやうになれば、資本が殖えたことと云ふことになる。例へば近頃日本の富は大變殖えたが、富が殖えなくても、従前使ひ方の悪かつたのを改めて、より多く利益を生み出すやうになれば、それだけ日本の資本は殖えたことになる。英吉利の資本が殖えたことと云ふことは、無論富も殖えたのであるが、資本として其の富を使用する方法が殖えたことと云ふこともある。

資本の使ひ方には、一度限りしか使へない使ひ方もあるし、何遍も使ひ得る使ひ方もある。一度限りしか使へない使ひ方とは、固定資本と稱するもので、例へば鐵道のレールの

如きはそれである。鐵道のレールは一度敷設すれば再び外の途に使ふことが出来ぬ。それは甲の處に在つたのを乙の處へ持て行くことは出来る。今度の戦争に於て獨逸は白耳義を占領してから、軍事上餘り必要でない所の鐵道のレールはどんく外して自國に持て行き、ヴェルダンの攻撃の時に、必要の所へ敷設して軍隊輸送の用に供したと云ふやうなことはあるが、レールは依然としてレールである。或はレールを鎔かして他の機械にすると云ふことも出来ないではないが、多くの場合それは損である。何處までも初め儘で使はなければならぬ、之を固定資本と謂ふ、其の反對に始終形を變へることの出来るのを流通資本と云ふ。流通資本とは流通變轉するものである。固定資本も流通資本も共に生産的方法に使用されるのであるが、變動の多い時に固定資本が多いことは困る。反對に流通資本の多いのは大變利益である。

此の區別は誰れも知つて居ることであるが、是は唯だ學問上の慰にした區別ではないのであつて、實際上大變に違ひがある。殊に今度の戦争に於て、同じ資本であつても、流通資本と固定資本とは大變相違のあることが分つて來た。農業の盛んな國では大部分

は固定資本になつて居る。即ち土地であるとか、土地に加へた改良費とか云ふものは、固定資本であるから、戦争が始まつたからと言つて、急に其資本を取上げて戦争に使ふことは出来ない。又製造工業に於ても、固定資本が多くを占めて居れば、之を他の用途に使ふことが出来ぬ、無理に使へばそれだけ能率が減る。例へば紡績の工場や紡績の機械と云ふやうなものには巨額の資本が投下せられてある。戦争の爲に工女が無くなり、綿の輸入が止まつて機械を運轉することが出来ないから、其の資本は遊ばせて置かなければならぬ。所が今戦争の爲に一錢一厘の微と雖も、之を利用したいと云ふ場合に、其の遊んで居る所の何百萬圓、何千萬圓と云ふ資本も使ふことが出来ない。之を以て大砲を製造することも出来なければ、彈藥の製造所とすることも出来ない。之に反して商業上の資本は大部分流通資本であつて、固定資本は極く僅かしかない。故に其形を變へやうとすれば直ぐに變る。殊に最も變り易いのは有價證券である。而も商人の資本の多くの部分は各種の證券になつて居る。そこでサア戦が始まつた金が要る、今政府の手には無い借入れやうとしても、急場の間に合はぬ、租税期があるから急に徴收する譯には行かぬ、困つ

たと云ふ場合に、何が一番役に立つかと云ふと商人の資本である。商人に向つて資金の調達を頼む。今現金はありませぬ、現金は無くても證券はあるだらう、亞米利加の證券はあるだらう、それを貸して呉れと言つて、證券を借上げ、亞米利加に送つてやる。譯はない、小包郵便で送つてやれば、何百萬圓何千萬圓と云ふ資金が忽ち得られる。其金を以て軍需品を買入れ、兵器彈藥を製造して戦争することが出来る。であるから平時に於ては固定資本も流通資本も大して變らぬ、各々其の働きをして優劣はないが、一朝有事の際に於ては、流通資本の方は直ちに働きを現はし利益を最も多く生み出すことが出来るのである。

所で英吉利が金融の中央市場であると云ふことは、英吉利には資本が潤澤にあつて、而も其の資本は斷えず流れ出で又流れ込んで、其の流れが決して止まない。若し是が土地になつたり機械になつたり、建物になつたりして、動かない資本になつて居れば、如何に英吉利が形勝の地位に在ると言つても、世界の中央金融市場となつて居ることは出来ぬ。金融市場と云ふのは、詰り資本の市場である、其資本と云ふのは主として流通資本であつ

て、何時何處へでも形を變へて移すことの出来るものでなくてはならぬ。然るに土地は移すことが出来ない。英吉利には良い土地が澤山ある、而も百姓は皆戰地に行つて耕す者は居らない、所が亞米利加には百姓が澤山居つて、土地さへあれば幾らでも耕すと云ふやうな状態であつたとしても、英吉利の土地を亞米利加に輸出することは出来ない。向ふの人間が此方の土地に来るなら宜いが、此方の土地を向ふへ持つてゆくことは絶対に出来ない。家屋の如きは、取毀ちて持つて行けば移せないことはないが、非常な損失になる。又機械の如きも、或種の機械は動かすことも出来るが、或種の機械は動かすと大變能率が下る、又動かすのには大變な入費が掛ると云ふやうなこともあるので、是等は土地に次での固定資本である。

之に反して商人の持つて居る流通資本は、之を移轉しても少しも値打を減ずることなく、又運賃などは幾らも掛らぬ。其の代り動き易い物であるから、少し油斷をして居ると、直ぐに飛んで行つてしまふ。資本が澤山あるからと言つて、安心して下手な使ひ方をする、と、忽ち羽が生えて飛んで行つてしまふ。非常に敏捷な俐口な者であると共に、又頗る薄

情で主人が少し無能であると見ると直ぐに逃出す義理も人情も構つて居らぬものである。そこへ行くと土地の如きは義理堅いもので、己れの持主は無能であると思つても決して逃出さないうで忠實に勤めて居る。そこで英吉利は富も大變殖えたけれども、殊に其の富を今云ふ動き易い形の資本として使ふことが非常に殖えた所から、世界の金融の中央市場となるに至つたのである。英吉利は世界に向つて資本を輸出して居る。資本の輸出は何を輸出するより容易い。金と云ふものは他の物に比べると嵩が少くて動かし易いものである。又敏速に動くものである。けれども一億圓とか二億圓とか云ふやうな大金になると相當の場所を取る。又之を動かすのには運賃も高く取られ、保険料も高い、殊に今日の如き戦争の際には、危険の度が一層加はつて居る、資本に比べると餘程動かし難い、況んや其の他の物に於ては、動かせば動かす度に入費が掛る、故に運賃を拂ひ、保険料を拂つても、尙儲かる場合でなければ輸出しては損であるから、輕々しく輸出することが出来ぬ。資本に比べては劣るのである。

英吉利と雖も十九世紀の半過ぎまでは資本の輸出國ではなくて、商品の輸出國であつ

た。又十八世紀迄は世界第一等の商賣國でもなかつた。佛蘭西の爲に始終頭を抑へられ、富の程度も佛蘭西には及ばなかつた。佛蘭西は其頃盛に品物を輸出して居つた。併し佛蘭西の輸出して居つた品物は、絶對的の必需品ではなく、節しやうとすれば節するとの出来る品物が多かつた。奢侈品、贅澤品と云ふものゝみでもなかつたが、兎に角人間の生活には是非無なくてはならぬもの計りではなかつた。それ故に永續する事が出来なかつた。併し奢侈品に於ては今日でも佛蘭西が世界の市場を左右して居ると言つても宜い。婦人の衣裳、婦人の帽子などの流行は、巴里が本になつて居る。其の他香水だとか、白粉だとか、石鹼だとか云ふやうなものは、巴里製でなくても、巴里製だと言つて居る位であるから、さう云ふ品物は佛蘭西が大部分を輸出して居る。其の反對に英吉利は、是非無くてはならぬ物を製造して輸出して居る。即ち十九世紀の前半に於ては、主として木綿製品を輸出した。棉花は英國内には産しないが、之を紡いで絲とし、織物として輸出して居る。之が最重要の輸出品で、伊勢は津で持つと云ふことがあるが、英國はマンチエスタールで持つと云ふ有様であつた。マンチエスタールは木綿工業の中心である。又羊毛も昔

は羊毛の儘で輸出して居つたが、後には絲として賣り出し、最後には織物として賣出して居る。而して十九世紀の半頃から、第二の重要な輸出商品として鐵や鐵製品が激増した。衣物とか鐵とは云ふものは、人間の生活にどうしても無くはてならぬものであるから、斯う云ふ商賣は廢れることはない。

そこで英吉利は十九世紀になつてから世界に向つて品物を賣る所の最大國となつた。英吉利の賣出す品物は總て實用品である、而も其の品は實用的に出來て居るから盛んに賣れる、賣れるから利益が殖えた。其の殖えた利益を唯だ富として積んで置かないで、生産的に使つて資本とし、工場を擴張するなり商品を殖やすなりして、益々商賣を盛んにするから儲かる儲かるから富が増す、其の増した富を又資本として運轉するから、愈々儲かつて所謂成金になつた。若し不意の儲けが成金と云ふのならば餘り感服せぬが、英吉利の成金は歩一步と着實に進んで行つて成金に成つたのであるから、容易に元の歩に返るやうなどはない。日本の此頃の成金のやうに、戦争の爲め倥倥に儲かつたのは、戦争が濟むと又元の黙阿彌折角金に成つたのが忽ち飛車に食はれてしまふ。英吉利の商賣は極

めて着實にやつたのであるが、それでも富の増加は非常なもので、一八一五年から一八六〇年代までには面白い程殖えた。さうして今日では世界第一の商業國である、工業國である資本國であると言はれるやうになつた。

それなら英吉利は昔からの商業國工業國であつたかと云ふと、さうではなかつた。十六世紀から十七世紀に掛けては寧ろ農業國であつて、主なる輸出品は小麦、それに次では羊毛、絲にも織物にもしない所の毛を輸出したのである。さうして其の毛は白耳義だの佛蘭西に於て絲にし織物にして、又英吉利に逆輸入したものである。又小麦は主に獨逸に輸出し、獨逸人が英吉利の小麦を食つて居つた。而も十五世紀頃の英吉利の外國貿易は皆獨逸人の手に在つた。獨逸のハンザ商人が英吉利の倫敦に大きな治外法權の居留地を有つて居つて、其處で商業をやつて居つた。其の跡は今でも遺つて居る、スチールヤードと言つて、可なり廣い所に城壁を圍らし、英吉利人一步も入るべからず、英吉利の行政英吉利の法律一切を拒絶し、獨逸のハンザ商人が外國貿易の實權を握つて居つた。であるから今日英吉利が世界金融の中心だと言つて居るけれ共、之に従事して居る所の人は、

當時獨逸若くは伊太利から來た猶太人の子孫が多い。ロステアイルドを初めとして、倫敦の金融市場に勢力を占めて居る銀行業者は猶太人が多數である。日露戦争の時に、日本が頭を下げて金を借りたのも猶太人である。さう云ふ風で、十五六世紀の英吉利人は、商賣も何もしない。小麦を作り羊を飼つて、之を倫敦に居る所のハンザ商人に賣渡した。丁度近頃まで日本では外國貿易と言ひながら、其の實横濱、神戸に居る外國の商人と賣買して居つたと同様に、直接外國と取引することはしなかつた。所が十八世紀の末から十九世紀に至つては、小麦を輸出するところではない、反對に輸入するやうになり、却つて工業品を賣出し、世界に對する輸出國となり、其貿易は英國の商人自ら之を掌るやうになつたのである。

所で英吉利の商業の方針としては、世界が開放せられて自由でありさへすれば宜い。世界の人が英吉利の商品を買ふのに、何等の制限何等の束縛をも加へなければ宜しい、決して他の國を併合したり、植民地を澤山にすると云ふやうなことはしなくとも、差支ない。品物を買つて呉れるのは皆お客様であるから、誰れでもお客様になつて呉れれば宜い。

無論お客様は動かないやうに常得意になつて呉れる方が宜いけれども、得意を縛り付けて、厭やでも買はせると云ふやうなことはしない。甲なり乙なりが買つて呉れなければ、丙なり丁なりに買つて貰へば宜いと云ふ風であつた。即ち捌け口を見付けさへすれば宜いと云ふのであるから、従つて商人の政府に望む所も、販路擴張の爲に盡力して貰ふだけのことであつた。外國の政府が英吉利に原料を賣つてはならぬとか、英吉利の品物を買つてはならぬとか言はないやうにして呉れれば宜い。或は維新前の日本のやうに鎖國主義を採つて、獨立の經濟を立て、居る所に向つては、其門戸を開き、貰ふ政治上の野心などは有たない、唯だ商業の自由に出来るやうにして貰ひたいと云ふだけのことであつた。これが即ち英國の開放主義、自由主義と稱するもので、門戸開放と云ふ語も此の時から盛んに行はれ始めたのである。此時代の最重要なる輸出商品は、ランカシャー州で作る木綿絲及織物であつた、マンチエスター市が其中心市場である。従つて此の自由貿易主義の中心地も亦マンチエスターであつた。經濟學上でマンチエスター學派と云へば、自由放任を主義とする學派のことである。或人は戯れに此學派を木綿學派と名けたが

其は大いに真相を得て居る。

斯くて英國は、世界の經濟的平和のチアムピオンとなつて、愈々門戶開放主義を以て商業を進めやうといふこととなり、他の國をして門戶を開放せしむるには、先づ自國から門戶を撤しなければならぬと云ふので、自由貿易主義を採用した。當時英吉利を風靡した格言は『賣らんと欲すれば先づ買はざる可からず』と云ふのであつた。商業の利益は賣るばかりが利益ではなく、買ふ事も亦利益になる。故に買ふ事も成るべく多く、賣る事も成べく多くし、而して賣つたものも儲け買つたものも儲ける。又先方に買ふだけの力が無い國であると、先づ此方から買ふ。買へば従つて先方に購買力が出來て、此方の品物を買ふやうになるから結局自分の國の利益になる。それが即ち自由貿易の學說の根據である。此の自由貿易主義は一八四六年以來今日まで變らなかつた。

然るに斯く自分が卒先して自由貿易政策を採り、他の國も之に倣はんことを希望したが、何處でも眞似しないのみならず、英吉利から分れた所の亞米利加では、却つて反對の保護主義を採用し、英吉利の領地である加奈陀や濠洲に於てさへ自由貿易主義を採用しない。

唯だ此間に於て自由貿易政策を採らうとしたのは佛蘭西のナポレオン三世である。ナポレオン三世は大ナポレオンの遺志を繼いで、歐羅巴の統一をしやうと考へた。併し此の統一は那破翁のやうに、唯だ武力のみで覺束ないから、先づ經濟上の統一をしやう、經濟上の統一をするには、自由貿易で進んで行くが宜からうと考へて居る所へ、普魯西は獨逸關稅同盟の成立に就て佛蘭西に助力を求めて來た。其結果獨逸の關稅同盟は易々と出來上つた。故に獨逸關稅同盟は主義としてナポレオン三世の提唱した自由貿易主義を標榜した、是れが爲めに、獨逸は此同盟に加はらなかつたのである。獨逸帝國の成立當初も此方針を守つて、ビスマルクは着々自由貿易主義を實現せんとしつゝあつたのである。然るに千八百七十九年に至つて、之を一擲して保護政策を採るやうになつたのである。其は主として獨逸製鐵業の利益の爲めに起つた變化であるが、又た他面帝國の財政上の必要にも促がされたのである。即ち英國の木綿學派の主張は獨逸の製鐵業の爲めに打破せられたのである。而して此變化は獨逸の商業政策の上にのみ止まらない、世界經濟の根本問題に觸れて來るのである。而して英國自ら亦た其自由貿易主義に大なる變化を

被むるようになったのである。其は何であるかと云ふと、一面には英國の富が段々殖え、従つて資本が有り餘るようになった。従來の商品輸出國たる外に、更らに英國は大なる資本輸出國となつた爲に、單に商品の輸出さへすれば宜しいと云ふ自由貿易主義を一貫することが出来なくなつた故である。他面には其輸出商品も單にマンチエスターを中心とする木綿糸及織物のみでなく、製鐵業の製品を澤山輸出するようになり、従つてマンチエスターと相並んでバーミンガムが重要な中心となり、其バーミンガムはマンチエスターの自由貿易主義に反対し始め、彼の有名な帝國主義の大使徒チアムパーレーンを代表者として英國經濟政策の根本的變化を絶叫するようになったのである。次の二節に於て此變化を少し説明して見よう。

五 偉大なる資本の増殖

英吉利が自由貿易主義に依つて、自國の商業の發展を圖つた時に出來た諺に、『貿易は國旗に従ふ』と云ふのがある。と云ふのは海軍の勢力の及ぶ所に其の國の商業が行は

れるのであるから英國の海軍は單に國防と云ふことばかりでなしに英國の商品の販路擴張の爲にも進んで行かなければならぬ。外交と云ふものも何の爲めに外國との交際を圓滿にして行くのかと云ふと、畢竟貿易を援くるが爲めである。世界が平和に治まり文明が發展すれば色々の物の需要が殖える、需要が殖えれば賣る品物も買ふ品物も多くなる。殊に英吉利の商品は、佛蘭西の商品のやうに使はずに居れば居れると云ふものはなく、文明の生活には是非必要の物ばかりであるから、英吉利の商賣の利益は世界の平和と一致すると云ふのである。従つて外交の方針も勢ひ世界的平和主義、世界同胞主義と云ふことにならざるを得ない。

そこで英吉利が海外の貿易を發展して行くのには、自由貿易主義、門戸開放主義が最も都合が好いので、此の主義を弘める爲には先づ魄より始めなければならぬと云ふので、國內に於ける政治上のことに就ても着々自由主義を採るやうになつた。殊に政府が人民の生活に干渉することは自由の精神に反する、それも巧く行つた時には宜いが、下手に行つた日には色々の面倒な問題が起つて國內の政治上の困難の爲に外國に對する貿易に

支障を生じてはならぬ。殊に國が富んで居ると何等の問題も起らぬが、所謂貧すれば鈍するで國が貧しくなると財政が困難になるから、政府と人民との間に争も起り、増税案を否決するとか、豫算案を削るとか云ふことになる。富が殖えつゝある状態にあると、財政上の問題などは直ぐ解決し、又同じ争ふにしても、其の争が下劣でなくなる。英吉利は富んで来た状態にあるから、財政上困つたことがないとも言へないが大體に於て順調であつて、無理なことをする必要もなかつた。それが爲に國內の政治に於ても經濟に於ても自由主義放任主義不干渉主義が行はれて来たのである。

所で英吉利と言へば、多くの世の中の人は、自由主義の本来本山だと云ふやうに考へて居るけれども昔からの自由主義の國ではなかつた。十九世紀の中葉自由貿易主義を採用するまでの英吉利は寧ろ保護主義であつて殊に十七世紀の頃まで否十八世紀に入つても色々煩瑣なる法律を設けて、農業にも商業にも工業にも干渉を加へて居つた。然るに英吉利の生産殊に木綿製品が段々外國に賣れて、富が増して来た結果自由主義が行はれるやうになり、政治も二の政黨が對立して、一方が朝に立てば一方は野に下り、さうして

在野黨は政府を監督し、又問題が起れば政府を鞭撻し、若し時の政府が輿望を失へば是れまでの在野黨が代つて政權を執る。大體に於て國內の事は人民の自由活動に任せ、政府の爲す事は至つて少くなつて居るから、保守黨が内閣を取らうが自由黨が多數にならうが、國の政治は少しも阻害せらるゝことなく圓滑に行はれた。是は英吉利であるからかう行へたのであつて英吉利の如き状態でない所の國が、幾ら英吉利の政黨政治の眞似をしやうとしても巧く行く筈はない。例へば日本の如くに何でも彼でも政府が引受けてやつて居る國では、政府が代る度に色々なことが變るので、吾々の生活にまで影響を及ぼして来る。多少は不都合であつても、一貫の方針でやつて呉れれば宜いものでも、政府が更ると、前の方針を棄て、新しい方針を採る、其の度に國民は損害を受ける。所が政府のすることの少い國では、さう云ふ事がないから、何れの政黨が政府に立つても國民は迷惑を感じない。是が英吉利の自由主義の利益とした所で、又今日の富を致した所以である。所が英吉利が商品の世界に賣出して富を得、其の富を又資本にして生産し、其の品物を賣出して儲けるから、富を資本として使ひ切れなくなつた。富は使ふから資本になるの

で使はなければ資本にならない。けれども亦使ふには使ひ途があるから使ふのであつて用途がなければ使ふことが出来ない。所が英吉利は工業が盛であり、商業が盛であり、海運業が盛であり、有らゆる事業が盛であつて、資本を要することも多いが、其の要するよりも入つて来る方が尙多い爲に資本が餘つて使ひ切れない。それなら餘つて使へない位なら資本を作ること止めたら宜からうに、止めることも出来ない。多年の習慣で色々の事業をやつて居るから、増さうと努めずとも富は殖える。けれども其の殖えた富を資本として利用する途が段々少くなつた。

そこで第一に起つた問題は、資本の價が下落したことである。經濟上の理法に従つて物が殖えれば安くなる。資本も少い時には高いが多くなると安くなる。資本が安くなると云ふことは、詰り金利が安くなると云ふことである。利子と云ふのは資本使用の代價である。資本の價と言つても、資本其れ自身に價のあるものではなく利息が即ち價である。であるから文明國程利子が安く、未開の國程利子が高い。國が開けて來れば來る程金利は下つて來る。是は世界各國を通じて誤りなき所の理法である。其の反對に土地

と云ふものは文明が進めば進む程國が富めば富む程、人口が殖えれば殖える程高くなる。何となれば資本は幾らでも殖やし得るものであるが、土地は殖やすことの出来ないのが特色である。海を埋立てるとか、不毛の地を開墾すると云ふことに依つて、幾らかは殖やすことが出来るけれども、地球の面積には限りがあるから、それ以上には殖えない。又國の領土と云ふものも、戦争に依つて新に獲得するとか、併合等に依つて擴張すると云ふやうなことはあるが、其の外には殖えて來ない。然るに土地を使ふ人口は段々に殖えて來る。人口が殖えれば穀物を餘計要する、従つて耕作面積を殖やさなければならぬ。けれども土地の面積を殖やすことは出来ないから、一定の土地に資本を多く掛けて土地を改良する、或は耕地整理をやるとか、肥料を多く施すとか、或は灌漑の便を開くと云ふことで、一段歩の收穫を多くする、其の結果土地の價が高くなる。土地の價が高くなると云ふのは、詰り地代が高くなると云ふことである。だから文明の度が進んだ國程地代は高い。尤も稀に例外が無いでもない。例へば今まで繁華であつた地方の町が鐵道が出来て停車場が其の町から離れた所に出来た爲に、其の町の地價が著るしく下つたと云ふや

うなことはあるが大體から言つて、土地の價は文明の進むと共に上つて行く傾向を有つて居るものであると斷言して差支ない。

そこで英吉利に於ては近年土地の價が高くなつて、資本の價は大變安くなつて來た。即ち金利が下落して來た。現に戰爭の始まる前の英蘭銀行の公定利率は二分と云ふ所を動かさなかつた。戰爭の始まつた後は五分とか六分とか僅かの間ではあるが一割にまでも引上げた。それは開戦の當時金が出て行く一方であつたから、それを引止める爲に政府の命令で一時に一割に迄引上げた。けれども英蘭銀行の公定相場が一番低い。それより安い利子は、他に全く例が無いと云ふでもないが、先づ一番安い。故に英蘭銀行の利率が一割になると、民間の銀行の利率は一割二分或は一割二分五厘と云ふ位になる。所で戰爭前に於ける公定率が二分と云ふ非常な低率になつて來た結果、内外に於て二つの作用が起つて來たのである。

資本の安くなつた爲に、國內にはどう云ふことが起つたかと云ふと、資本以外に資本と一緒になつて生産に従事する者の所得が殖えたことと云ふことになるのである。生産には、

土地資本労働企業此の四つのものがなければならぬ。土地を所有する者を地主と謂ひ土地の價を地代と云ふ。資本を有つて居る者は之を資本主又は資本家と謂ひ其の得る所のものを利子と云ふ。労働は労働者が之を爲すのであつて、其の得る所のものを労働又は賃銀と名づける。企業は企業者或は企業主と稱する者がするのであつて、其の得る所のものを利潤と名づける。利潤と利子とは似たやうなものであるが、其性質は全く違つて居る。例へば茲に一萬圓の總収益があつたとする。總収益は學者によつては國民所得とも云ふ。此の總収益はどう分たれるかと云ふと、地主は地代として貰ひ資本主は利子、労働者は賃銀として貰ひ、一番最後に残つたものが企業者の利潤となるのである。所で此の中の利子が安くなつた結果は、英吉利に於ては國民の大多數を占める所の労働者の所得、即ち賃銀が大變に殖えて來た。是は場合に依ては賃銀は餘り殖えないで、利潤ばかり殖える事もあり、或は餘り地價が騰貴すれば地代が一番上ることもある。英吉利は十九世紀の後半には地代も上り利潤も殖えたけれども、利子の下つた恩澤が一番餘計に誰れが受けたかと云ふと労働者である。労働者の得る賃銀が全體としては勿論、一人

當りの平均額も殖えたのである。この賃銀と云ふものは、大體に就て云ふと殖えれば殖える程労働の能率が高まるものである。労働者と云ふものは、多くは一ぱいの生活をして居るのだから、少しでも所得が殖えれば其の生活の改良が行はれる。自分の身體も強健になれば、健全なる子孫を生むことにもなり、労働の能率が高まる。即ち英吉利に於ては資本の安くなつた結果、直接生産の上に於て能率が高まり、其の結果は又利潤として得るものも殖えて來た。例へば一萬圓の總收入の中から地代を百圓、利子を五百圓拂つたとすると九千四百圓残る。其内賃銀として八千圓拂ふと利潤千四百圓となる。所が利子が下落して二百圓で済むこととなり、其れだけのものを賃銀の方に増す事になると利潤は變らないが労働者の所得は八千三百圓となる。然るに其結果労働の能率が高まつて一萬五百圓だけの収益を得ることが出來たとすれば結局利潤は千九百圓となり労働者も利すれば企業者も利する、更に大きく言へば國全體が利すると云ふことになる。であるから企業者は増し得る程度までは賃銀を増してやるが宜い。増してやる餘裕があるに拘はらず、増してやらないからストライキなどが起るのである。英吉利には労働者

の利益を保護する爲に労働組合が發達して來た。労働組合と云ふ團體を組織して労働者の地位の改良を圖つて居る。利子が安くなつて賃銀を上げて呉れと言へば、上げて呉れ得るだけの餘裕がある。畢竟英吉利で労働者の賃銀が高くなつたのは、富が殖えて資本の利子として拂ふものが少くなつたからである。

資本が多くなつて利子の下ると云ふことは、企業家や國家が利するばかりでなく、資本には直接に權利を有つて居ない所の労働者まで利することになる。それ故に労働者は勢ひ資本の殖えることを望むやうになるから、自然に資本と労働との調和が出來て來るのである。唯資本家と労働者の調和を圖らうなどと言つても出來るものではない。殊に日本のやうに唯道德的の說法をして労働と資本との調和を圖らうなどと言つても、到底行はれるものではない。道德的の教も實行の出來るやうにして說法すれば、それに服し効能もあるのである。實行の出來ないやうな状態では、幾ら小言を言つても、そんな小言は頭の上を飛越して些とも効がない。成程資本主と労働者とは、利害の一致しない所が幾らもあるけれども、大體に於て資本の増加は労働者の利益となることは動かす可

ざる事實である。獨り勞働者の利益に止まらず資本の利子の安くなると云ふ事は、事業の上から言つても、又は利益を得ることを目的とせざる公共事業若くは宗教、學問、慈善事業、社會政策の事業等にまでも影響を及ぼすのである。資金の無い爲に若くは利子の高かつた爲に起らなかつた事業も、利子が安くなり、容易に資金が得られるやうになると起つて来る。例へば金を借りて學校を立てやうと云ふ場合には、利子が五分も六分もの時には、到底維持の見込が付かなかつたが、二分で借りられれば、授業料の収入で支辨して行かれると云ふので、學校が出来る。或は學術上の會合にしても、其の通りである。或は資本が殖え富の力が強くなるのは、國が拜金宗になつていけないと言つて、之を攻撃する人は英吉利にもある。例へばラスキンとかカーライルなどは大に資本の殖えることを呪つた。如何にも資本には悪い半面が確にある、けれども拜金宗になることのみが資本の特色ではない。否、資本は其の他の方面に於て非常に靈顯顯著なる神様である。資本を得た爲に、其の利益に浴する人もあれば、資本が多くなつて利子が安くなつた爲に利益を受ける人は一層多い。何となれば、資本は使ふから資本であつて、使はなければ資本でない。

い、故に資本を貰つただけでは後の利息を拂はなければならぬ。一時資本を貰つたと云ふことよりも、利子の安いと云ふことの方が遙に有難い。人類文明の理想は、一は資本の利子を安くすることにあり。若し與ふべくんば無利息にもなりたい、併し全然無利息と云ふ譯には行かないから、殆ど無利息同様に資本を使へることが文明進歩の理想である。而して英吉利の如きは餘程それに近い。反對に日本の如きは、資本に對する需要は甚だ多いが、供給がそれに伴はないから、資本は高い、即ち利息が高い。利息が高いから餘程儲かる事業でなければ、資本を借りて始めることが出来ない。又折角事業を始めても、利子が高いために、利子を拂ひ地代を拂ひ賃銀を拂つてしまふと、企業者の利潤、即ち儲けが無くなる。儲けがないから、勢ひ無理もやる、不正のことも出て来る。商業道德の低いと云ふことの原因は、一は資本の足らないと云ふ所にもあらうと思ふ。故に唯商業道德を高めろ、工業道德を高めろと言つても、是亦無理な註文である。高い利息を拂つて居る者が、安い資本を使つて居る者と競争することになるから、ツイ儲けに石を入れることにもならうし、齒車の缺けた時計を輸出することにもなる。それは如何にも不都合千萬の話

に違ひないから、商業道德の説法も必要であるが、資本の供給を潤澤にすれば、自然それらの弊は改まるものである。英吉利の商業道德の高いのは、確に資本の供給が潤澤であるからである。

此資本の高い安いと云ふことは、經濟上の關係ばかりでなく、一般の國民道德の上にも大なる影響を及ぼす。資本の高い國に於ては、利子として引去られる國民所得の割合が多い。さうして其代りに誰が頭を叩かれるかと云ふと、地主は取だけ取らなければ承知しない、企業者は相當の利潤がなければ天から仕事をしない、さうすると残る所は一番弱い労働者である。國の財政でもさうである、財政の裕な時には宜いが、財政が逼迫して來ると、各省の豫定經費を集めて大藏省で査定する時に、どう云ふ所が叩かれるかと云ふと、別に査定の方針がある譯ぢやないから、一番勢力の無い所から査定する。先づ文部省等は何時でも眞先きに叩かれる。例へば日清戦争の後で出來た教育基金等は、何より一番先きに使はれてしまつた。何でも抵抗力の少い所が叩かれる。そこで生産の上にて一番抵抗力の少いのは労働者である。彼等は數に於ては多いが、一人々々の力は洵に微弱

である。資本主に對しても、企業主に對しても、對等に當つて行くことが出來ないから、資本の高い國に於ては労働者の得る賃銀が少い。賃銀が少いから其の生計が苦しい。生計が苦しいから労働能率が低い、即ち生産力が其だけ鈍い。生産力が鈍いばかりでなく、子供を生んでも、それを育てることが十分でなく、親の體質が弱いから、従つて死亡率が多い。一家の中でも、嫁ぐ人は食べる丈は食べなければならぬから、やはり一番抵抗の弱い人が犠牲となる。其は女である、女の營養を悪くする。婦人の體力が衰へて居るから、自然生れる子供も弱い、生れてから直に死ぬ者が多い。最近の歐羅巴の人口増加の割合と比べて見ると、日本の出生の率は割合に殖て居るが、死亡率も中々高い。歐羅巴に於ては、出生率も減つて居るが、死亡率が大に減つて來たので、差引人口増加の割合は、少しは減つて來たが大體に於て變らない。之に反して我邦は死亡率が非常に高く、而も其の死亡率の内容を吟味して見ると、子供の死亡率も高いが、特に青年期壯年期即ち十五歳から五十歳までの死亡率が最も高い。其の内又男と女とに分けて何方が高いかと云ふと、女の方が大變高い。其の高い原因を調べて見ると、女子には出産と云ふことがあるから、この婦

人特有の原因から死ぬ者が多いかと云ふと、是は外國と比べて左程多いのではない。だから女子は出産の爲めに多く死ぬのでなく、他の病氣で死ぬ。其の病氣の内容に就て、内閣統計局の二階堂君が調べた結果に依ると、結核性の病氣で死ぬ者の割合が最も多い。是は男に於ても同様であるが、二十五歳までの青年期に於て、結核性疾患の爲に死亡する割合は英吉利や獨逸に比べると非常に多い。同じ日本の中でも都會と地方とでは何方が多いかと云ふと都會が多く、職業別で言ふと纖維工業に従事する者に多い。即ち營々として國の爲に富の増殖をなすつゝある日本の纖維工業即ち紡績業、製絲業、織物業等に従事する所の婦人の數の多いと云ふことは大に寒心すべきことである。死ぬ者が多い位だから死に至らずして病牀に苦しんで居る者も少くなからう。此の年若き第二の國民を造る所の婦人の死亡率が斯くも多いと云ふことは、日本の將來に取つて大に寒心すべきことである。露西亞と比べれば、日本の方が宜いか知れぬが、他の聯合國と比べると我邦が一番悪い。嘗て工場に働く婦人ばかりでなく、下層社會に於ける婦人の營養が甚だ悪い。結核性疾患は傳染病ではあるが、唯れにでも感染すると云ふものではなく、之に犯

され易い體質がある、それは營養不良と云ふことが主なる原因になる。日本の婦人は僅かな物を食つて男子に壓迫されて働いて居る。其の柔順は如何にも敬服の至りであるが、敬服して居る間に段々國民の體質が悪くなつて来る。此頃の新聞に郵便配達に女を使つたらどうかと云ふやうなことが見えたが、郵便配達に女を使はなければならぬ程日本は困つて居りはせぬ。女は賃錢が安いからと云ふが、安い賃錢の者を使はねばならぬと云ふのは、他にも原因があらうが、資本が高いと云ふことも大なる原因である。英吉利は國內に資本が澤山ある爲に賃銀が高くなつて、労働者の健康状態、道徳状態が良くなつた。英吉利の貸付利子は、戦争前までは二分とか二分五厘、高くも三分であつた。斯様に利子が安いと云ふことは、國內に資本が有り餘つて居るからばかりでなく、最早や企業の餘地もなくなつたからである。尤も英吉利も十九世紀の半ば頃までは資本が足らない爲に起した事業も起せなかつた位であるが、今日では起すべき事業も無い爲に、一層資本が餘つて来た。そこで最早此上國內では資本を使ふ餘地がないから、勢ひ外國に向つて輸出するやうになつた。これ即ち英吉利の國情が最近に至つて一變した所以である。

六 資本輸出國としての英國々情の變化

十九世紀の半ばに於て完成した自由貿易主義に依つて英吉利は世界最大の商品輸出國たるを國是として、政治も行はれ外交も行はれ海軍も其の方針を以て計劃せられて居つた。其であるから『英吉利人は商賣人國民である』(Nation of shopkeepers)とさへ呼ばれた位である。所が今日ではさうでない、商賣もして居るが、商賣一方ではなくなつた。商品も輸出するが、商品の外に今まで國內で使つて居つた所の資本を盛に外國に輸出する様になつた。現に大藏大臣ロイド・デョーヂが議會に於て報告した所に依ると、一九一五年に於ける英吉利の外國に對する投資額は約四十億磅(我が約四百億圓)に上つて居ると云ふことである。日本は戦争以來大變儲かつた正貨が九億圓に激増したなどと言つて喜んで居るが、英吉利では外國に對する貸金が四百億圓もある、又其の利子として年々二億磅即ち二十億圓程の品物なり金なりは何をしないでも入つて来る。一品も海外へ賣出さないでも、それだけの品物なり金なりは年々英吉利へ入つて来ることになつて居るのである。

更に英吉利全體の一箇年の國民所得即ち英吉利人全體が國內に於て一箇年にどれ程の富を作出して居るか云ふと、概算ではあるが二十四億磅(約二百四十億圓)と云ふことになつて居る。故に海外投資の収益は其の十二分の一に當つて居るのである。所で商品は一度賣つて其の代價を取ればそれ切りであるが、資本はさうではない。資本は一度輸出すると、それが逆輸入して来るまで、即ち償還を受くるまでは利息となつて年々入つて来る。それは砂糖になり、茶になり、肉になり、小麥になり、様々の品物につて来る。日本の借金の全體は近頃では大分減つたが戦争前までは約二十億圓程であつた。之が返済に就てはどうしたら宜いかと言つて大騒ぎをして居たのだが、英吉利にはそれだけの金が、何もしないで唯だ借用證文を懐中に入れて居るだけで毎年々々入つて来る。是は資本を輸出して居る賜である。

そこで英吉利は資本が益々増加して仕様がなから、どうかして其の捌口を求めやう、骨を折つて商品を揃へて輸出するより資本を一たび輸出すれば、後は年々利子として入

つて来る、これ位楽なことはないと云ふので、どしどし資本の輸出を始め、國內で使へば使へる分までも輸出するやうになつた。國內に於て使へば三分か三分五厘にしか廻らないものが、之を外國に輸出すれば五分にも六分にも一割にもなるから、争つて海外に放資しやうとする。それは如何にも結構のことである、結構ではあるが、餘り結構過ぎて結構ならざることが起る。と云ふものは、國內の産業に昔のやうに緊張した氣分が漂はなくなつてしまつた。それが即ち英吉利が獨逸より弱くなつて來た所以である。獨逸は一八七〇年に帝國となつて以來、非常の勢を以て發展し、總ての事に於て英吉利に對抗して來たが、其最も發達したのは第一に製鐵業である、是は英吉利に於ては木綿工業に次ぐ重要な工業であつて、他國が競争を企てゝも及ぶものでないと威張つて居つたが、戦争の始まる前頃には、獨逸の製鐵工業は英吉利の製鐵業の壘を摩するに至つた。化學工業などに至ると、壘を摩するどころではなく、獨逸は既に英吉利の及ぶことの出來ない程度にまで進んで居つた。例へば化學染料の如きは、元は英吉利で發明して之を獨逸に傳へたのである。然るに獨逸人は更に進んで學問的に研究し、逆まに英吉利に供給して居つた

から、戦争が始まるや否や、染料缺乏の爲に英吉利は非常に困つたのである。獨逸が斯様に發展して來たのは、無論一面には非常に奮勵努力したのであるが、一面には英吉利の進歩が以前の如くでないことと云ふこともある。其の結果、獨逸の國力は驟々として進み、從來非常に懸隔のあつたものが、餘り著しい相違がないやうになつた。是は獨逸が進んで來たばかりでなく、英吉利の進歩が以前の如くでなくなつた爲である。

と言つて英吉利人其者が劣つて來たと云ふ譯ではない。英吉利人は昔と少しも變つて居らぬ。又産業の發達を沮害するやうな政治上の原因もない。否、英吉利は次第に文明に向つて進みつゝある。體質に於ても心理上に於ても、以前と比べて墮落した所がある譯ではないが、唯だ經濟上の努力が衰へたのである。それは何う云ふ事かと云ふと、以前は商賣を第一として、何でも良い品を安く拵へて、自分の國の品物を成るべく多く賣らうと云ふことに全力を注いで居つた爲に、國の富が非常に殖え、資本が豊富になり、利子が安くなつた。利子が安くなつても、それを國內で使つて事業をやつて行けば、益々産業が發達するのであるが、資本を外國に輸出すると云ふ、巧い抜け道が出來た。外國へ資本を

輸出すると利息が入つて来るから結構のやうであるが、今度は利息の関係で、国内で要る所の資本迄も外國に出て行くから、自然産業の進歩が衰へるやうになつた。それは品物を拵へて外國に賣らないでも、利子としてそれだけのものが入つて来るのだから、同じではないかと言ふかも知れないが、決して同じではない。個人にしてもさうである。骨を折つて働かなくとも、自分には資金があるから、其の利子で遊んで食つて居ると云ふ人は、一番不幸の人である。又國から言へば一番厄介な人である。成程今日の社會の定めから言へば、利息を取るだけで少しも働かず贅澤の仕放題をし、自働車を飛ばし、酒食に耽つた所で、刑法に觸れる譯でもなければ、社會上何等の制裁がある譯でもない。併ながら經濟上の眼から見れば、是れ位不埒なことはない。而も彼れ自身が千辛萬苦して作り上げた財産で、其利息を以て道樂するのならば、まだしもであるが、親の身代を相続して自分は少しも働かず、社會にも何等の貢獻する所がなく、唯だ利息があるからと云ふだけで、多數の生産者が粒々辛苦して作つたものを消費すると云ふことは、社會の大なる公敵である。若し斯う云ふ者が國內に殖えたならば、最早や其の國は進歩の見込がないと言つ

て宜し。

所が英吉利は段々さう云ふ風になつて來たから、差當つての生活が樂になると共に、色々の遊戯が行はれるやうになつて來た。テニスが流行るポートルレースが流行る、やれ競馬だ、マラソン競争だ、オリムピックゲームだと云ふやうなことで、非常な金を使つて様々の運動をやつて居る。それは働かなくなつたから腹ごなしの爲めである。働いて居れば、殊更に運動などはしなくとも、身體が丈夫になる。マラソン競争などをやる代りに、肥桶でも擔ぐなり、車を牽くなりして働いて居れば、運動にもなり同時に社會の爲にもなる。其であるにも拘はらず、近來日本にも大分斯う云ふ遊び事が流行つて來た。何も遊戯が悪い運動がいけないと云ふ譯ではない、時には遊戯をやるも宜いが、日本のやうな借金國、是れから益々奮勵しなければならぬ國民が有り餘つて居る英吉利などの眞似をして、學校までも休んで、ワ〜言つて彌次ツたり騒いだりして居るのは、實に馬鹿々々しい話である。英吉利にスポーツが流行ると云ふことは、好い所が少しも無いとは言はないが、悪い所が甚だ多い。所謂高等遊民の多いと云ふことは、決して國の利益でない。又英吉

利の政治が巧く行つて居る、政黨政治が巧く行はれて居ると云ふが英吉利の議員は大抵金持で、遊んで居る代りに政治をやる、議會に出るのは腹ごなしの積りで出て居る。政治を職業のやうにすることも怪しからぬ次第であるが、政治を道樂にされることも甚だ困る。一方に職業を有つて實際に働いて居る人が、議會に出て國の政治を議するから眞面目の議論が出る、道樂にやつて居る者が多いと、騒ぎや彌次が主になる、其の他種々の弊害も生ずるのである。

英吉利は資本の輸出國となつて大變結構であつたが、餘り結構過ぎて魔が差して來た。勿論英吉利人自身には、魔が差したことは分らなかつたが、其の魔の影は獨逸と云ふ鏡に映つた。獨逸の進歩と云ふものは即ち英吉利のダレたと云ふことを半面に現はしたものである。英吉利人は獨逸が色々なことをして、自分の勢力範圍を脅かし、自分の邪魔ばかりして怪しからぬ、カイゼルが悪い獨逸が不埒だと言つて居る。それは獨逸の悪い點もあるけれども半分は英吉利に悪い所がある。それが獨逸の發達と云ふ鏡に映つて來た。それも戦争前までは氣が付かなかつたが、さて戦争をして見ると、一採に採潰せるだ

らうと思つた獨逸が、三年掛つても容易に採潰せさうにもない。是は獨逸が強いと云ふばかりでなく、英吉利が弱いのである。そこで英吉利人も自分の弱いと云ふことを染々覺つた、さうして何故弱くなつたかと云ふ原因を色々研究して見ると、小さな點は除いて、大きな所だけに就て見るに、大體に於て獨逸よりも英吉利の方が優つて居る道徳に於て、政治に於て、其他色々の點に於て優れて居るが、唯だ一つ經濟上の原因に於て劣つて居る。其の事は最近有識者は自覺して來たやうであるが、一般の人はまだ自覺して居らない。總ての英吉利人が之を自覺するやうになれば占めたものである。

そこで之れを自覺した人々は、大いに之れを憂慮して、頻りに大騒ぎをし、國民勤儉野戰(National economic campaign) 杯と言つて大に一般の民心を警めて居る。其が爲め先頃總理大臣アスキスのお嬢さんの結婚の式に、三鞭を抜いて客に饗應したのは贅澤だとか、バルフォアにグラスゴー市の名譽市民の免狀を贈つた其の免狀を金の函に入れて贈つたのは勤儉の主旨に反して居るとか言つて問題になつたことさへある。如何に戦時とは言へ僅か一箇の金の函、幾毫かの三鞭を、英國としてそれ程大問題にするにも及ばな

いことであるがさう云ふことを眞面目に唱へて、國民の自覺を喚起しやうとして居るのである。

話は再び元に戻るが、英吉利が資本輸出の國是を採つたのは左程古いことではなく、先づ三四十年以來のことである。さてさうなると英吉利の外交、英吉利の海軍、其他一切の政治が、今までは商品の輸出を主として居つたものが、資本の輸出を本位として働くやうに變つて來た。即ち『貿易は國旗に従ふ』でなく、『資本は國旗に従ふ』と云ふ事になつて來た。商品の輸出を主としてやつて居つた時代には、英吉利の品物を買つて呉れさへすれば宜いので、お得意を作つてお客様を購買心を唆るやうに仕向け、それに對して外國が妨害を加へれば、夫は戦争をしても仕方がないが、さうでない限りは先方の自由にして置く。例へば支那に對して阿片を賣付ける、支那から言へば甚だ迷惑の話であるが英吉利から言へば何でも賣付けて利益を得やうと云ふのであるから、之を妨害しやうとすると忽ち戦端を開いて香港を占領してしまつた。兎に角商賣が主であるから、商賣が出來て居れば、決して他の國を侵略するとか占領するとか云ふことはしない。英吉利は現に植

民地を澤山有つて居るけれども、大體に於て其の植民地は、商品輸出時代に出來たものではなく、其の以前に出來たのである。商品輸出時代は、自由貿易、世界平等主義であつたから、領土の擴張は餘りしなかつた。又植民政策と云ふことをも積極的にはしなかつた。加奈陀に對しても、濠洲に對しても、本國は餘り干渉しなかつた。唯だ、印度だけは政治上、人種上から嚴重にする必要があるが、其の他に於ては成べく自由を許すと云ふ方針を採つて來た。是は世界各國に取つて洵に好い事であつて、若し英吉利が當時侵略主義併呑主義を標榜して働いた日には、今日と違つてもつと澤山の國が英吉利に併呑せられたに違ひない。所が英吉利が少くとも世界的には侵略主義を採らなかつたら、其が世界全體に及んだ。何となれば、英吉利を除けて他の國が侵略主義を採らうと思つても、英吉利が承知しない限りは行ふことが出來ない。亞米利加にせよ、佛蘭西にせよ、獨逸にせよ、其國力が英吉利より何れも遙か下に在つたから、英吉利の承知しない侵略主義は何れの國も採ることが出來ない。それが爲め十九世紀の半ば過ぎ頃までは、侵略主義は世界の表面から影を隠して、平和主義が世界を支配して居た。

所が茲に自から變化を惹き起さずして已む能はざる事情が起つて來た。其はマンチエスター中心の木綿工業に代るに、バーミンガム中心の鐵工業が起つて來た事である。鐵製品の輸出が段々重要を得るに従つて、商品輸出の國是が段々資本輸出主義に變じて來た。木綿製品は比較的廉價なもので、其代金を直ちに回收することが出来るが、鐵製品は機械なりレールなり、何れも多くは高價のもので、その代金を右から左へ取るわけに行かぬ、又木綿製品は直接の消費品であるが、鐵製品は原料品又は生産要具である。即ち其性質は資本となるを要するもので、而して賣捌代金を掛けにする必要があるから、英國の商人から云へば、單なる商賣でなくなつて、資本の貸付けの形を取るようになり、買ふ方は、品物の買入れと云ふよりも、寧ろ資本の借入れと云ふ姿になる。此れ鐵製品輸出時代は、資本輸出時代に移り行く根本的の理由である。而して段々資本貸付の純粹の形に移つて行く品物を輸出するには、唯買つて呉れさへすれば宜い。さうして一度得意にしたと言つても、若し其得意に面倒が起れば、他へ行つて賣りさへすれば宜い。トコロが資本の貸付の形となるとさうは行かない。一度輸出した資本に對しては利息を取らなければ

ばならぬ、又何年かの後には元金も返して貰はなければならぬと云ふやうに、關係が永續的になつて來るから、支那に賣れなくなれば印度に賣る、印度に賣れなくなれば日本に賣ると云ふやうな工合に行かない。そこで成るべく先方の自由を尊重して、唯だ品物を買つて呉れ、ば宜いとばかりは言つて居られぬ。一度資本を貸付けた上は、其國を屬國にしないまでも、自分の勢力範圍の下に置き、其處で起る政治上なり經濟上の事件はどうなつても、貸付けた資本が害を被らないだけには、絶えず注意をして居らなくてはならぬ。レールを掛で賣れば、鐵道敷設の面倒を見るは、勿論其鐵道が収益を擧げるやうに、絶えず監視するを要する。其の結果自由貿易主義では行かない。自由貿易主義が悪いのではない、英吉利の國情が自由貿易主義では行かなくなつたのである。品物賣渡の貿易の時代には、相手の國が買つて呉れ、ば宜い、先方で出来る品物は、此方は買つても買はないでも、世界中を通じて勘定が立てば宜いと云ふのであつたが、資本を貸付けた鐵製品を掛けて賣つた上は、萬一の場合には、其國の品物を自分が背負ひ込まなければならぬから、成るべく自分の使へるやうな品物を作らせなければならぬ。だから生産にも關係するや

うになる、或は自國と利害の衝突する國に其の生産品を送られては困るから、先方の品物を此方に取り、又此方の品物は成るべく買はせるやうにしなければならぬ。従つて是れまでのやうなお客扱ひでなく、もつと深い關係に立たなければならぬやうになる。又品物を賣る時代には、利益の種類が賣の利益と買の利益との二種だけであつて、又一度限りの關係であつた。所が資本の輸出になると其資本は金でなく品物で行く。英吉利が資本を輸出する時には英吉利で出來た機械なり、レールなり、色々な品物になつて出て行く。それも直接に其國に行く斗りではなく、例へば英吉利が日本に賣つた金を支那に貸すと云ふことになる。英吉利が造つた品物は支那に行くのでなく日本に來る、さうして日本で出來たもつと粗末な品が支那に行く、其の代は英吉利から借て拂ふと云ふことになる。であるから、資本の輸出と云ふのは、直接に金が出るのでなく品物が出る。従つてその賣つた利益と、日本に代金を拂つた金の利息と、最後には其元金とが英吉利に入つて來るのである。而して其利益も、利息も、元金も、金が入つて來るのでなく、品物で入つて來るのであるし、又買の方の利益もある。それから今一つ外國の事業の資金として投下してある

ものもある。是は利息ばかりでなく、事業から生ずる利潤も取る。例へば日本で水力電氣を起す爲に、英吉利の共同出資を求めたとすると其水力電氣の年々の配當を取る。配當は利子の外に利潤が加はつて居るから利益が殖える。利子ならば五分か六分のもものが、九分とか一割とか、若くはそれ以上の収益を得ることになるのである。

そこで英吉利の外交は、國外に於ける投資の保護を大方針とするやうに段々變つて來た。英吉利の大使公使は表面は英吉利の名譽を護り、英吉利國全體の利益を代表すると云ふのであるが、實際は英吉利の資本家が外國に向つて投下したる資本を擁護すること、が主たる任務となつて居る。殊に領事の如きは、明かにそれが任務である。以前のやうに商品の販路を擴張することを主とせずして、外國が英國の資本を借りるやうに仕向け、又貸した上は何處までもそれを擁護するのである。商品の輸出時代には、英吉利の品物の賣れるやうに、例へば英吉利の石鹼の効能を知らない人に向つては、之を使つて御覽なさい、安くて徳用で、工合が好いと言つて盛に廣告し、販路を擴張してお客を自分の方に引付け様とした。單にお客を引付けるばかりでなく、お客を拵へる。文明の商賣は客の來

るを待つばかりでなく、客を作るのである。商品の製造をすると共に一面にはお客の製造もする。例へば三越などでは美しいカタログを配つて、三越の物をお買ひなさい、三越の物を買はなければ文明人でないなどと言つて人の購買心を唆る。そこで買はうと思つて居なかつたものでも、ツイ買ふやうになる、買つて使つて見ると成程工合が好いと云ふやうなことから、お客様になる。是は宜いこともあるが又大なる弊害も伴ふ。大英百科辭典を倫敦タイムズ新聞社で賣り出した時の如きは全國の新聞に一頁大の廣告を出して、特價で提供する、倫敦で賣る値段の半分だ、金は月賦で宜い、五圓拂込めば直ぐ立派な本を送る、期限何時まで、二度と斯う云ふ機會は來ないから大急ぎで申込み、アト三日になつた、二日になつた、遠方の者は電報で申込みなどと、盛んに廣告するものだから、左程必要もない人までが、そんなに安いものなら一つ買つて見やう、五圓送れば二百圓の本が來るのだからと云ふので申込みるのである。申込み以上は否應なしに月々月賦を拂はなければならぬ。さうして其の買つた本が實際役に立つかと云ふと役に立てる人もあらうが立たない人の方が多い。折角買つた本は左程自分の役に立たず、月賦の拂込は苦し

いと云ふやうなことから、非常な損をして古本屋に賣飛ばしてしまふと云ふやうなことになる。日本中に何れ位無用の大英百科辭典が轉がつて居るか知れない誠に勿體ない無駄であつた。

さういふやうに、要らない物を賣付けられて損をすることもあるが、一面には買はせられた爲に大變に調法し、それが爲に生活上幸福を得ることもある。然し品物は實際要らないものを賣付けられても、多少の損をすれば止さうと思へば何時でも止せる、けれども金を借りた場合はさうは行かぬ。而も借りの金は容易に返せるものでない。骨を折つて自分が働いた結果で返すか、左もなくば他から又借りして返すかより途はない。だから一たび借りると退引ならぬ永久的の關係が出來て仕舞ふ。

さう云ふやうに英吉利の資本を借りた國は、どうしても英吉利の支配の下に立たなければならぬ。今の大英百科辭典の例で言つても、縦し要らないものを買つても、損をして賣つてしまへばそれだけであるが、資本を借りれば、唯だ利息を拂ふ義務ばかりでなく、英吉利の品物を買はなければならぬ。品物を買ふばかりでなく、色々の無理をも聽かなけ

ればならぬと云ふやうに段々深みに陥つて行く。其も資本が本當に役立つて事業が起り其の事業の収益で利息が拂へ、何年かの後には元金の償還も出来るやうならば宜いが、實際に収益の無い場合は元金が返せない返せないから利息は長い間取られる。營々として稼いだものは皆利息として持て行かれることになる。歐羅巴の諸國では左程英吉利から資本を借りて居らぬが併し葡萄牙の如きは英吉利の資本が殆ど國中に行渡つて居るから、今度の戦争に於ても英吉利に厭でも應でも盲従せねばならぬやうになつた。其れに次では希臘である。希臘の王様は獨逸と親戚の關係がある爲に英吉利から資本を借りては居るが英吉利の言ふ通りにならない。そこで英吉利は腹を立て、終に天子様を廢してしまつた、詰り獨立國の王様までが借金關係で廢立せられるやうなこともなるから怖いと言へば是れ程怖い事はない。獨逸が白耳義の中立を侵したのは怪しからぬと言つて居るがそれは獨逸のみではない。成程獨逸は軍隊を以て攻入つたのであるが希臘の亡びたのも大して變らぬ。英吉利は少しは軍艦を持て行つた、少しは兵隊を持て行つたが大體は金縛りに縛り上げて、而も王様を追出してしまつた。希臘と云ふ

國は表面は亡びて居ないやうであるが、王様は廢せられ今までの大臣は皆國外に追放せられた。そして人民は居るが、國政は英佛殊に英吉利が主にやつて居るのである。それからもつと靚面なのは埃及である。埃及は全く金の爲に縛られて、何うも斯うも出来なくなつて英國に併呑せられて仕舞つたのである。

そこで英吉利では此の變つた状態が國是の上にも現はれて、所謂帝國主義と云ふものになつて來た。帝國主義と云ふのは是はチアムバーレーンが主張し出した説である。チアムバーレーンはバーミンガム選出の代議士で、其バーミンガムは前云つた通り英國製鐵業の中心である。チアムバーレーンの帝國主義は木綿工業本位のマンチェスターの自由貿易主義に對抗するものである。如何にチアムバーレーンが有力なる政治家でも英吉利の事情が之を必要とする時代にあらざれば、斯かる議論が勢力を占めるやうにはならないのである。英吉利が資本輸出國になつて見ると、どうしても今までの自由貿易主義では安心が出来ない。是に於て英吉利の植民地、屬領勢力範圍の國を英吉利の権力の下に引締めやう、さうして帝國の束縛を堅固に築かうと云ふことになつた。所が此

の帝國主義を實現せしめやうとするに、邪魔になるのは獨逸、亞米利加、露西亞其の中でも殊に目前の邪魔になるのは獨逸であつた。

此の如くにして戦争の始まる間際まで、資本の輸出を以て國を立て、居つた所の英吉利が世界に旗を振つて居つた。他の國は英吉利に就て資本を融通して貰ふ、或は借り或は貸し、或は品物の代金の決済をし、一切合財やつて居つたのであるが、英國が資本の輸出を主とするやうになつてからは、商品の輸出を専らとして居つた時代とは、世界の中央市場と云ふ意味が大分違つて來た。

倫敦のロムバード街は金の自由市場として、如何なる時でも、又如何に多くとも賣買が出來た。貨幣の本位である金が自由に賣買出來るから従つて一切の債權債務の決済が出來た。それで皆倫敦に行くから、倫敦には溜つ居る金が殆ど無い、始終流れ出たり流れ込んだりして一刻も斷絶しない、けれども堰止めればウンと溜ると云ふ市場であつた。所が資本を輸出するやうになつてから後は、倫敦に集つて來た所のもの、皆輸出に充てゝしまふ。自國に出來た資本を輸出するばかりでなく、他國から來て居る資本まで輸出

して居る。詰り英吉利に入つて來た所のものは、悉く資本に化し、資本として輸出して居る。日本が有つて居る債權でも、英吉利國內に在るものは、英吉利は之を自分の資本として輸出して居る。亞米利加が倫敦へ行つて品物を賣つた代を取つて、其の代金を暫く預けて置く、其の金は英吉利の資本となつて輸出される。而し其輸出先は何處と限らない。競争の相手國たる日本にでも何でも貸付けて、どしどし競争させる。それが見す見す分つて居るが、どうすることも出來ない。即ち英吉利の絶大なる金融の力は、總てのものを資本に化して輸出し、而して其の利益は英吉利が取る。英吉利に對する債權者には、英吉利國內に於ける利子二分かそこらを拂つて置いて、自分が外國に貸した利子は八分にも九分にもなる。即ち之を亞弗利加なり、南米なり、印度なり、濠洲なりと云ふやうな未開の國に高い利子で貸して、其の利益は皆自分が取つてしまふ。どうしてさう云ふことが出來るか、と云ふと、今まで世界の金は皆倫敦に集まる、倫敦に行かなければ貸さうと思つても貸せられないし、借りたいと思つても借りられない、倫敦ならば何日でも貸すことも借りることも出來る。それは英吉利の金融市場が危険の無いやうに、或は危険を最も

小にするやうに色々、聯帯責任の組織が出来て居るからである。例へば日本が支那に金を貸す、經濟借款とか何とか云ふことで金を貸さうと云ふ場合でも、日本が單獨で貸したのでは危険で堪らない。仕方がないから英吉利の手を通して貸して貰ふ。さうすると英吉利は八分なり一割なりの利息を取りながら、日本には英吉利の相場で二分位の利息しか拂はない。殊に英蘭銀行では當座預金には利子を拂はない。さう云ふ無利子の金でも、やはり資本として使つて居る。さう云ふのは丸儲けになる。

そこで英吉利以外の各國では、どうかして此様な組織は打壊したいと思つて居るが、中々打壊せない。と云ふものは、今までの様な便利を受けて来たからである。英吉利に行きさへすれば、何時でも金を買ふことも賣ることも、貸すことも借りることも出来たが、其の代り甘い汁は皆英吉利に吸はれて、各國は箱しか嘗められない。けれども長い間やり來つて、總ての機關が井然と出来て居るから、如何ともすることが出来ない。唯、米國だけは、紐育のウォールストリートを以て倫敦のロムバード街に對抗しやうとして努力して居たが、戦争前まではそれも出来なかつた。戦争が始まつて以後、大分金融の實力が紐育

に移つて行つたが、まだロムバード街に取つて代はることは出来ない。恐らく將來と雖も容易にそれは出来なからうと思ふ。それならなぜ倫敦のロムバード街がさう云ふ地位を占るに至つたかと云ふと、詰り信用機關が非常に發達して居るからである。到底他の國の企て及ばざる所である。そこで是は爲替の説明にも、資本運用の説明にもなるから、此の場合簡單にロムバード街の模様を説明して見よう。

七 金融中心國としての英國

先づ手形の事に就て云ふと、例へば横濱のAなる商人が亞米利加のBと云ふ人から品物を買つた。買ひは買つたが資本の手薄な人で、直ぐに右から左に代金を拂ふことが出来ぬ。けれども二月なり三月なり待つて貰へば、今三千圓で買つたものが、四千圓に賣れる見込があると云ふ所から、Bと相談の上金を送る代りに、金三千圓何月何日何々銀行に於て代金相渡可申候也と云ふ手形をAからBに向つて送る。それを約束手形と云ふ。Bは三千圓の約束手形を受取つて、其の取引は済ませたが、Bも亦二月先きまで其の約束

手形を持って居ることが出来ぬ、一日も早く之を現金に換へて運轉しなければならぬ、六十日なら六十日の間の利息は差引かれても、之を金に換へた方が利益であると云ふ場合には、倫敦に居る所のCに依頼する。紐育などの銀行へ持て行つても、Aは果して信用すべき人かどうかと云ふことが分らないから割引をして呉れない。所が倫敦のCは世界中に色々な關係を有つて居るので、日本の事情も分つて居る、横濱のAと云ふ人には此の位の金を支拂ふことが出来ると云ふことを知つて居る、其約束から手形引受をしてやる。即ち期日が来て若しAが拂はなければ私が拂ひますと言つて裏書をする。併しBは多くは引受をするだけで、自分が割引をしてやるのではない、引受料を取つて裏書をしてやるだけである。所がCは倫敦に於ては大變信用のある者であるから、BはCの引受けた約束手形を以てDの所へ行くと割引をして呉れる。DはAをば知らないが、Cは能く知つて居る。そこでCが裏書をすれば間違はないと云ふので、Aの出した手形を割引してBに金を渡す。此の引受を商賣として居る者を稱して引受屋(アクセプトチング・ハウス)と云ひ、割引を商賣として居る者を割引屋(ディスカウンチング・ハウス)と名づける。割引

屋は銀行ではない、預金などは扱はないで、手形の割引のみを專業として居る、是が倫敦には澤山居る、引受屋は割引をしない、唯世界中の商人の信用調査をして、世界中から集つて来る手形の引受をして居る。さう云ふのが倫敦には澤山にある。

所で此の割引屋は、一口に言へば、金を貸して利息を取るのが商賣であるから、金が非常に忙がしい。そこで割引屋は、其の割引した手形を銀行へ持つて行つて又割引して貰ふ、之を再割引と云ふ。資本と云ふものは、成るべく多く廻轉させた方が利益である、出来るならば同じ金を一日に何遍も廻はした方が利益であるから、割引屋は直ぐに其の手形を銀行に送つて再割引をして貰ふ。銀行は預金も扱つて資金も潤澤であるから、是が再割引をしてやる。若し銀行でも其を其の儘寝かせて置くことの出来ない場合には、更に英蘭銀行へ持つて行つて再々割引をして貰ふ。

さう云ふやうな組織になつて居つた所が、今度の戦争が始まるや、市中の銀行が警戒を加へて手形の割引をしない。資金が無い譯ではないが、戦争の前途の見込が立たないから手控へる。併し其の場合でも、速に英蘭銀行は偉い、市中の銀行が手控をして居るやう

な場合でも、英蘭銀行は手形の性質さへ良ければ決して割引を拒まない。即ち第一流の引受屋の引受けた手形ならば幾らでも割引に應ずる。此處が倫敦の中央金融市場たる所以である。なぜ其が出来るか云ふと、英蘭銀行は割引をする金を無限に有つて居る。他の銀行は預金を運轉して居るだけだから、預金の在高しか使へない、又預金の中には何時取付けられるか分ぬのもあるから、幾らでも割引して金を貸出すと云ふことは出来ない。所が英蘭銀行は預金もあるけれども、預金にあらずして、而も何時取付けられても拂ふことの出来る金を以て居る。それは何かと云ふと兌換券である。英蘭銀行は兌換券を發行する権利を有つて居るから、兌換券を印刷する時間さへあれば幾らでも金が出来。是は他の銀行では出来ないことで、英蘭銀行だけが出来るのである。英蘭銀行で發行した兌換券は直ちに貨幣と同様に流通するから、そこで幾らでも割引の請求に應ずることが出来る。

斯う云ふと、それなら我邦の日本銀行だつて同じではないか、印刷局で兌換券を印刷して持つて来れば幾らでも出来るだらう、それに日本銀行は英蘭銀行の眞似をして拵へた

のだから同じに行くだらうと思ふ人があるかも知れぬが、それは日本銀行には出来ない。なぜかと云ふと、英蘭銀行には何時でもそれを金に引換へるだけの力がある。兌換券を出すことは印刷機でゴロ／＼刷つて出せば宜いのであるから極めて容易いやうであるが、其の代り兌換券は金に引換へなければならぬ。故に餘り多くの兌換券を出すと、日本銀行などでは金の引換に來られた時に、終には金が無くなつて、兌換停止をしなければならぬやうになるから、無制限に兌換券を出す譯に行かない。所が英吉利は前にも云ふ通り、金の自由市場であるから、金が寸時も絶間なく流れ出たり又流れ込んだりする。恰度此の前を流れて居る天龍川の水のやうに、水の深さは左程でないが溜つて居る水でなく、流れて居る河の水と同様だから、兌換券と金とを引換へても、後から後から入つて來て盡きることはない。水車がグル／＼廻つて居るやうであるから、英蘭銀行だけは幾らでも手形の引換に應ずることが出来るのである。

英吉利は大抵金曜日土曜日が支拂日で、此の日に諸拂をするから、銀行に割引を求めて來る者が多い。そこで此の兩日は英蘭銀行の兌換券發行高が非常に殖える。又それを

金貨に引換に來る者も頗る多い。所が日曜一日明けて月曜日になると、今度は預金する者が大變に多くなる。と云ふものは勞働者は賃銀として英蘭銀行の兌換券を受取ると、直ぐに之を拂に當てる、肉屋に拂ふ、酒屋に拂ふと云ふやうに色々の拂ひに當てる。之を受取つた商人は、自分の懐に入れて置かないで直ぐに銀行に預入れると云ふ習慣になつて居るから、金曜日土曜日に出した兌換券は、二三日すると大部分又英蘭銀行に戻つて來る。唯だ外國へ支拂はなければならぬ分だけは直ぐに戻つて來ぬが、一方に出て行くと共に、他方には入つて來るから巧く循環して居るのである。

それから英蘭銀行でも、市中の銀行に於ても、手形の割引をするに、成べく満期になる日を順に揃へると云ふことをする。それ故今日八月三日なら八月三日ばかりの手形を有つて居つて、後の四日五日六日の支拂の手形は無いと云ふやうなことはしない。八月二日に十萬圓、三日にも十萬圓、四日にも十萬圓と云ふやうな風に、手形の期限の日を揃へて置く。是は英蘭銀行でもやるけれども特に引受銀行で揃へて置く。夫故に満期の日が一緒になつて、一時非常な澤山な、何千萬圓と云ふやうな需要があつて、其次の日には少し

も要らないと云ふやうなことの無いやう、何時も平均して圓滑に轉々流通して行くやうになつて居る。それ等の仕組と云ふものは、ロムバード街に於ては最も完全に出來て居る。他の國でも手形の日附を揃へると云ふ事は無論やつて居るが、どうも倫敦のやうに巧く行かぬ。英吉利には世界の手形が集つて來て、其の類も多いからどうにでも思ふやうに調節することが出来るが、他の國では出と入とが巧く出合はない、どうしても偏るか、非常に巨額の金を準備して置けば兎も角、さうでなければ圓滑に運轉して行くことが出来ない。倫敦のみはそれが工合好く行はれるやうになつて居る。

以上國際間の商業上の取引は、倫敦に於ける引受屋、割引屋、市中銀行、英蘭銀行と云ふ様な機關で決濟するのであると云ふことを、約束手形を一例として簡単に説明したが、實際には約束手形を以つてするのでなく、多くは爲替手形を使つて居るのである。而して倫敦に於て或は爲替と言ひ、或は手形といへば、必ず爲替手形のことを意味するのである。

爲替手形とはどう云ふ形式のものかと云ふと、約束手形に於てはAがBに對して、何月何日に金何圓を支拂ひますと云ふ約束をするので、Bがそれを早く金にしたい時には、C

に引受けて貰つて、Dの所で割引して貰ふと云ふことになつて居る。然るに爲替手形に於ては、Aが約束手形をBに送る代りに代金を受取る可きBの方から發動して手形を振出すのである。即ちBからA宛にして、此手形一覽後或は何月何日に、金何程をC殿へ御仕拂ひ下さる可く候といふ形式の手形を出すのである。約束手形はAがBに對して、五千圓なら五千圓を何月何日に拂ひますと云ふ手形を出すのだが爲替手形は反對にBがAに對して、五千圓を何月何日にC殿へ御拂ひ下さいと云ふのである。CはAから五千圓を受ける権利はないのであるが、其の手形を持つて行けば、Aから五千圓を拂つて貰へると云ふことを知つて居るから、CはBから手形を買ふ買ふに就ては五千圓に對して割引をする所がCは引受をするのが商賣で、割引が商賣でないからCは金を拂はない。唯だ引受だけをし、更に之を割引屋へ持つて行つて此處で割引いて貰ふ。詰りAの拂ふべき金に對して、Cが引受をし、其の手形をDの所へ持つて行つて割引をする。若しCが直ぐに金を拂へば、引受屋と割引屋とを兼ねるとになるのだが、それでは危険が多いから、危険を全部負擔して困ると云ふ時には、引受屋は引受だけの責任を負ひ、割引は割引屋がする。割

引屋は割引をした手形は、又それを自分の所に溜めて置かないで、其中の或る部分は直ぐに銀行で再割引をして貰ふ。或は英蘭銀行へ持つて行つて再割引をして貰ふのである。此の手形を受取つた銀行は、期日が來れば又Aから金を取らなければならぬ。五千圓をAから受取るのであるが、倫敦の銀行にはAやBの手形だけではない、XなりYなりZなり、世界中から澤山の手形が集つて來て居るので、其の手形をAが拂ふ期日、若しくはXやYが拂ふ期日まで待つて居ない。之を引當てにして爲替を賣る。それも其爲替を賣るのでなく、他の爲替を賣るのである。例へば倫敦に於て紐育に對して二億萬磅の債權があるとする、二億萬磅だけの爲替が賣れる。どう云ふ人が買ふのかと云ふと、亞米利加から品物を買つて、其の代金を亞米利加へ拂はなければならぬ義務のある人が買ふのである。金を拂はなければならぬ義務のある人が、金を亞米利加へ送る代りに銀行へ行つて亞米利加宛の爲替を買ふ。亞米利加の銀行で金の取れる爲替を買ふ。爲替は、此手形一覽後直ちに若くは何十日後、或は何ヶ月後に幾ら／＼の金をお拂ひ下さいと云ふやうに色々の種類がある。一覽後直ちに御拂ひ下さいと云ふのを參着爲替と云ふ。普通

爲替相場と云ふ時には參着爲替の相場を取つて言ふ。參着相場が何時でも土臺になつて居る。參着相場よりも下にあるのがT T相場即ち電信爲替相場(Telegraphic transfers)である。是は電報料が掛るのと期限が短い。故に其の電報料と利子とを差引いたものが相場になるので爲替の立相場は常に參着爲替である。

所で其の爲替には受取る方と拂ふ方とある。それが丁度同じ位であれば相場が平準點(Par)に近くなる。平準點と云ふのは、英吉利の磅に對する亞米利加の弗獨逸の馬克佛蘭西の法、或は日本の圓との金の値打ちの比較である。日本の一圓が二志〇片八分の三であると云ふのは英吉利の二志〇片八分の三の金と日本の一圓と丁度同じである。其を平準點といふのである。それで爲替の賣と買とが略々同じ額ならば平準點に極く近くなる、勿論キツチリ平準點に歸すると云ふことはない。何となれば爲替を送る間の日數があるから其の間の利息がある。其から若し金を送るとすれば運賃が要る保険料が掛る。だから金を送るよりも爲替で送つた方が何時でも幾らか安く上る。所が爲替相場が高くなると金を送つた方が却つて安く付くやうになる、運賃も掛け保険料も掛けて、

金を英吉利から亞米利加へ送る。或は亞米利加から英吉利へ送つた方が割合が安くなることがある、減多にさう云ふことは起らぬが偶にはさう云ふことがある。其の現金を輸送するも爲替で送るも同じである、と云ふ點を現金輸送點と云ふ。現金輸送點よりも爲替相場が上れば金を送つた方が安く付く。併し金點も決して確定不動のものではない。何となれば運賃は上つたり下つたりする、保険料も上つたり下つたりする。運賃が安くなれば金點は割合に低くなり、運賃が高くなり、保険料が高くなれば、金點も高くなる。故に餘程爲替相場に相違がなければ、金を送つては引合はないから、自ら金を送らないやうになる。

けれども亦人爲的に金點を高める事もある。金が國外に出て困ると云ふ場合には、金點を高くして金を送れないやうにすることもある。それは何處で誰がするかと云ふと中央銀行でやる。即ち英蘭銀行でやる。どうしてやるかと云ふと、英蘭銀行の公定利率高をめる。二分であつたものを五分にし八分にし一割にする。さうすると金利が高くなる。金利が高くなれば英吉利から亞米利加に輸送するには少くとも一週間は掛るか

ら、利息が高くなると従つて金點が高くなる。中央銀行の利率と云ふものは、其の國內の資本の需要供給の關係も見て居るが、同時に外國に對する金の輸出入と云ふことにも注意し、これで調節をして行く。さうして其の以外に、爲替相場に手加減を加へることはいけないことになつて居る。中央銀行の公定利率の高低に依つて、爲替相場の調節をする。と云ふことは極めて健全なることであつて、又しなければならぬことになつて居る。所が今世界中でその出來て居る國は一箇國もない。日本などは戦争前も出來なかつたが、今も尙出來ない。唯倫敦だけは金の自由市場であるから、中央銀行の利率の上げ下げに依つて、爲替相場を調節することが完全に行はれて居つた。此れが世界金融中心市場たる英國の戦前の状態の一斑である。

然るに今度の戦争が始まつた爲めに、此英國の金融市場に大變化が起つた。今まで圓滑に運轉して居つた機關が、開戦と共にピツタリと止まつた。と云ふのは、非常に巧妙に出來て居るから、故障がなければ巧く動いて居るが、髪の毛一筋程の故障でもあると、全體の活動が忽ち止まつてしまふ。日本の金融界の様な粗雑な仕組なら、假令齒車一枚位缺

けて居ても、ガタピンシ乍らも動いて居るが、英國の金融市場は其仕組が餘り巧妙に出來て居た爲に、今度の戦争が起るや否や、忽ち其の運轉が止まつてしまつた。扨然らば其の故障の爲に英吉利の金融界にどういふ變化が起つたか、以下之を説明して見やう。

八 英國金融市場の變調

歐洲大戰の開始は、世界經濟の中心たる英國の金融市場に大變調を齎らした。何故であるかと云ふと、戦争が始まれば今までのやうな金の自由市場といふものがなくなつてしまふ。倫敦に行けば必ず金が取れもするし、拂ひも出來、總ての債權債務の決済が出來る。總ての爲替は倫敦に集中すれば宜いと云ふことが出來なくなるから、出來るだけ金を持つて行かう、それも爲替で送つたのでは危険であるからと云ふので、争つて英蘭銀行に向つて金を取りに來た。是は色々の形に於て取りに來た。預金を引出しに來るものもある。手形を英蘭銀行へ持つて來て買つて呉れと言ふ者も殖えて來た。手形で持つて居つては危険だと云ふので、現金に換へて貰つて自分が持つて居る。それから英蘭銀行の發

行した兌換券も平生は外國へ送る必要もなければ兌換を請求に來ないのが兌換券で持つて居ると危険だからと云ふので兌換に來る。それらが一日に非常な高に上つた。今迄は金に換へないで唯紙と紙とが形を變へてグル／＼廻つて居つた。それで巧く金融機關が動いて居つたのが悉く金にしなればならぬことになつた。即ち段々説明した極めて巧妙に出來て居つた機械に、タツタ一つ狂ひが出來た金の出入が自由でなくなつた。金の自由市場は全くは無くなつたのではないが、無くなりにはせぬかといふ懸念が起つた爲に、全體の機關がピツタリ止まつてしまつた。英吉利の金の自由市場といふのは、自分の所に金が澤山あると云ふ譯ではない。國內に金を持つて居る額から言へば佛蘭西でも露西亞でも英吉利より多い。多いが金の自由市場ではないと云ふのは金が溜つて居るだけで流出さない。流出しても其の流が誠に細い。細い流れで入つて細い流れで出て行くのである。所が英吉利は寸時も停滯して居ない、斷えずドシ／＼流出し又斷えずドシ／＼流れ込んで居る。だから其の水を汲もうと思へば何時でも入用だけ汲むことが出来る。さう云ふ働きが出來て居つたのが戦争の起つた爲に出て行くものは出

て行くが、入つて來るものは殆んど止つた。獨逸も佛蘭西も露西亞も平生から金の自由市場ではないのが戦争が始まつた爲めに金の出ることを急にピツタリ止めてしまひ、さうして一面には兌換を停止したから、今迄此等の國から英吉利へ入つて來たものが入つて來なくなつた、目に見えて一番澤山流れて來る所の川が止まつてしまひさうになつた。まだスツカリ止まり切りにはならぬが止まりさうになつた。そこで愚圖々々して居ると、金の自由なる供給が得られなくなるから、今の中に金を取つてしまふ方が宜い、本當に得られなくなつたら兌換の請求に行つても駄目だから、今の中に取つて置かうと云ふので、中央銀行に對する金の要求が非常に殖えて來た。

さてさうなると、之を唯だ自然に放任して置いて、利率の引上げで抑へると云ふだけでは力が足りない、非常手段に出なければならぬ。其非常手段として、何をやつたかと云ふと、歐羅巴大陸の獨佛露國等では兌換を停止した。兌換券を今日限り引換へないぞと言つた。英吉利では兌換停止はしない、今迄の歐羅巴の戦争の經驗では、戦が始まると直に兌換を停止したと云ふ例は滅多にない。何となれば兌換を停止すると云ふことは、非常

な不名譽である。又非常に市場を攪亂する。故に出来るならばそんなことはしたくない。兌換停止は或る意味から言へば、國の身代限りと同じである。云ふ者が、深く歐羅巴人の頭にあるから、出来るだけは避けたのである。併し今度の戦争ではそれを避けないで、皆即時に兌換停止をやつた。流石の英吉利でさへ英佛戦争即ちナポレオン戦争の時には兌換を停止した。コレは拂へるだけは拂つて、愈々拂へなくなつたら支拂を停止したのである。其の時はもう餘程金が減つてしまつて居た。所が今度獨逸や、佛蘭西や、露西亞が兌換を停止したのは、金が無くなつたからではない。金は少しも減らない。まだ開戦したばかりだから少しも減りはしない。寧ろ金の出ることを手心したから少しは殖えた。そこへ兌換停止をしたから金はある。即ち拂へば拂へるのに兌換停止をしたのである。之を個人に例へると、金が無くなつて拂へなくなつたから、どうぞ拂ひを待つて呉れと云ふのが一般普通であるのに、今度の獨佛露のやり方は左様でない、金はある、拂はうと思へば拂ふ金はあるのに、拂はないで待つて呉れと言ふのである。是は甚だ怪しからん、拂へるものを拂はないのは怪しからん、如何に非常な時と雖も、拂ひ得るものを拂

はないで、兌換停止をしたのは怪しからんと言へば言へるのだが、今日になつて見ると、獨逸佛蘭西露西亞等が開戦の初めに當つて兌換停止をしたことは、大變機宜に當つて居る。若し此の時にやらなかつたならば、戦争以外に餘程の苦痛を被らなければならなかつたと云ふことが今では明瞭に分つた。

是れは主として獨逸の智慧である。獨逸は開戦の場合には直ぐに兌換停止をする準備をし、之れに要する一切の法律規定までもチャント拵へて居つたから、開戦と同時に直ぐそれを實行して、バク／＼と門を閉ぢてしまつた。戦争前までは學者も政治家も、金と云ふものは入用の時には何どきでも得られるものである、だから兌換に必要以外の金を持つて居る必要はないと言つて居つた。所が獨逸では實際の施設として、此の學者の説學問上の定論とは全く矛盾したことをやつて居つた。即ち普佛戦争で佛蘭西から取つた償金の中、十二億萬馬克即ち六千萬圓程に當るだけの金を、伯林の直ぐ近所のスペインダウのユリウス塔と云ふ所に仕舞つ居つた。其の塔の中に嚴重の金庫を拵へて入れて置いて、一中隊の兵隊に番をさせて居つた。之を見た世界の財政家經濟學者の大部分は噴

づて居つた。馬鹿なことをするものだ、六千萬圓の金を寝かして置いて、少しも利用しない。運用すればそれだけ利息が付く、一八七〇年代から今日迄には非常な利息が溜つてゐる、馬鹿なことをすると言つて嗤つて居つたが、今度の戦争になつて、四十年餘も六千萬圓の金を唯だ寝かせて置いた効能が分つた。即ち直ぐ之を帝國銀行の所有に移し、尙色々な方法で、民間から金をどしどし吸収した。と云ふのは戦争中は金が要る、非常に要るけれども、それは使つてしまふのではなく、持つて居ると云ふことが必要である。何故持つて居ることが必要かと云ふと、戦争中に使ふのではなく、戦争が済んで愈々常態に歸ると云ふ時に、ウンと金を積んで居ると云ふことが必要である。どうせ戦争中は色々非常手段を執つて、金が出るのが出来ないうやうになつて居る。英吉利のやうに兌換停止をしない國でも、金が出ることは事實上殆ど出来ないやうにして居る。唯だ兌換停止をすると云ふことは、體裁が悪いと云ふだけである。體裁が少し宜いと云ふことの爲に、どんな兌換の請求に應じて金を出せば、戦争中も心細く、又常態に歸つたときに土臺となるべき金が無い。さうなると戦争が済んでも、何時迄も民間に流通して居る銀行券は兌換

が出来ないで不換券になる。不換券は勿論いけない。戦争中非常の時には我慢もするが、常態に復してもまだ不換券を有つて居ると云ふことは、是は經濟界を攪亂する。戦争が済んで平時の状態に歸る時、成べく早く兌換を恢復するには、金をウンと持つてゐなければならぬ、其を獨逸は今やつて居る。それから佛蘭西でも露西亞でも、兌換の維持が出来らばならぬ、それに越したことはないが、どうもそれは覺束ないから、それよりまだ拂へば拂へるが、今は待つて呉れ、其の代り決して倒しはしない、惣じて今拂つて、他日若し誰れかの債權を踏倒すやうなことになるつては、國民一般の迷惑になるから、さうならぬ爲にやつたのである。之に反し英吉利は今日迄ズツト兌換を維持して來て居るが、是れは英吉利にして始めて出来ることであつて、獨逸や佛蘭西や露西亞では逆も出来ない、三年も續かぬ。否一年續くことも出来ない、と云ふことが分つて居つた。そこでどうせ兌換を停止しなければならぬならば、行き詰つてからするよりも、今まだ餘裕のある中に停止する方が害が少ないと云ふので停止したのである。

英吉利は戦争前と同じに兌換制度を維持して居るが、英吉利と雖も無制限にやつて居

つてはやはり金が無くなつて、結局は兌換停止をしなければならぬことになる。そこで兌換停止をしないと云ふ名目を何處迄も立てる爲に、一方に於て非常に制限した。其の制限とは何かと言ふと、外國爲替の作用を利用したのである。即ち英吉利では兌換停止はしなかつたけれども、開戦と同時に銀行の休日を臨時に延長した。政府の命令を以て英吉利中の有らゆる銀行を強制的に三日間休ませた。恰度其の日は日曜日に當つたから木曜日になつて店を開けさせた。事實四日間休ませたのである。木曜日になつて開店したが十分に營業させないで、數日後になつて初めて本當に營業の出来るやうにした。これは甚だ姑息の遣り方であるけれども、當時の急に處する手段としては已むを得なかつた。何故タツタ三日や四日休んだゞけで都合が付いたかと云ふと、戦争が始まると共に英蘭銀行に對して金の引換を求むる者が非常に殖えた。又平生は金の引換に來なかつた割引屋或は市中銀行が自分の持つて居る手形で英蘭銀行に買つて貰へるものは皆買つて貰ひに來た。又今迄小切手で仕拂つて居つたのが、小切手で受取るのを拒み、正貨で拂つて呉と云ふ者が多くなつた。又市中銀行に預金をして居つた者も預金を引出す、

所が市中銀行にもさう十分に金のある譯はないから、市中銀行は英蘭銀行に求める。併し英蘭銀行にても無限に金の準備がしてあるのでないから、兌換券を非常に増發した。丁度金曜日と土曜日、此の二日は非常に兌換券を増發したのである。増發すると英吉利の兌換券は五磅(約五十圓)が一番小さいのだから、大きな仕拂には差支ないけれども、小さな仕拂には困る。如何に英吉利と雖も、五十圓の紙幣ばかりでは仕拂が出來ない。殊に之れを受取つた小賣商人、労働者、薄給者などは非常に不自由である。だから之れを直ぐに金貨に引換へる。金貨は十志と一磅、即ち五圓及び十圓であるから、是れならば大抵間に合ふ。後は補助貨でお釣を取れば宜い。さう云ふ風で外國貿易のためでも何でもなく、國內で使ふために金の需要が非常に殖えた。そこで金曜日から土曜日に掛けて英蘭銀行から出た兌換券が、工場主なり商店なりから、労働者雇人などの手に渡つた時は土曜日で、土曜日の午後は休みだから兌換が出來ない。日曜日は當然休みだが、月曜日に店を開けば、一時に引換の要求があると云ふことは分つて居る。兌換券の出た後の市中の形勢が不穩である。そこへ一時に來られては溜らぬから銀行の休日を延長した、是れが

爲め金は受取つたが何處へ行つても兩替が出来ない。強いて兩替すれば損が行くから成べく使はずに持つて居る。所がもとゞ要る爲めに引出したものは寧ろ少數で、戦争になつたから萬一の場合を想像して、遽て引出した者が多かつた。一時不安の念に驅られて取付けたのだから、二三日経つて段々落着いてから考へて見ると、馬鹿氣たことをした、要りもしない預金を引出して利息が、フイになつたと云ふやうなことで、又其金を元の銀行へ持つて行つて預ける。預ければ預けただけ英蘭銀行に返る。三日間休日を延長して、木曜日に店を開けると果して預金が大變殖えて來た。さう云ふのが一の働きである。

今一つは、さて其の曉に、やはり金を要求して來る者がある。是は本當に金が要る人で、さう云ふのは二日や三日休んだのでは心變りをしてしない。本當に金の要る人は、多くは外國に金を送る人である。外國に金を送る人は誰れかと云ふと、商人などは送らない、幾ら爲替相場が高くなつて現金輸送點になつても、現金輸送の事實は商人自身がやるのではない、銀行がやる、或ひは割引屋がやる、或ひは引受屋がやる。詰り金の貸借を以つて商賣

にして居るもの、即ち爲替關係者である。此等の人は何の爲めに金が要るかと云ふと、平生は爲替の運用で、唯だ帳尻の差額を現金で遣り取りして居つたので、それは誠に僅かなものであつた。然るに開戦となるや、英吉利の金融市場に對して疑懼の念を懷くものが多くなつたので、倫敦の金融業者に向つて現金を送つて呉れると云ふ要求が増して來た。さうすると是れはどうしても送らなければならぬ。そこで引受屋、割引屋も好んでするのではないが、債務を決済しなければならぬから、これは兌換券を持つて來て金と引換へて行く。であるから市中銀行、割引屋、引受屋等は、外國に拂はなければならぬものが無くなれば、英蘭銀行に金の引換へに來なくなる。來るなと言はなくても來なくなる。所がそれは黙つて居つては出來ない。そこで政府の力で堰を設けて之れを制限した。英吉利は世界の各國に對して多くの債權を有つて居るが、一方には債務をも有つて居る。所で英吉利から金を借りて居る方は戦争が起つても黙つて居る。アナタの方で要りさうだから返しませうと言つて來る者は一人も無ない。之れに反して貸して居る方は、サア返して呉れと言つて取り立てる。債權と債務とが一緒になつて來れば巧く決済が出來

るが債務者の方は黙つて居て債権者だけが取立てる。それでは如何に英吉利と雖もやり切れるものでないから、之を防ぐ爲に引受屋割引屋銀行業者其の他一般の人民に對して、外國の債務は一時支拂を停止するやうに命じた。それが即ちモラトリウムである。モラトリウムと云ふのは延ばすとか延滞とか云ふ意味で、借金を倒すのではない、唯引延すだけである。併し戦争になつたからと言ふて、急に借金の支拂を延ばす必要がある譯ではないが、當時の英吉利の事情としては是亦已を得ざる手段であつた。素より好ましい方法ではないから、英吉利では間もなく廢してしまつたし、英吉利の眞似をしてモラトリウムをやつた他の國でも事實は皆廢してしまつた。日本は必要がなかつたのでやらなかつたが戦争に少しも關係のない國迄も之を好い機會にしてやつた。あの偉い金持の英國でさへ、拂ふべきものを一時待つて呉れと言ふのだから、吾々貧乏人がやつても支ないと云ふので、南米邊の小さな國までも眞似をしてモラトリウムをやつた。是非常人權蹂躪と言へば言へるが併し其の人權蹂躪は、主として外國に對する人權蹂躪である。借金を拂ふのに平時の様に品物で拂ふならば宜いが、現金で拂はなければならぬ

だから其は困ると云ので仕拂を延期させた。是は個人々々が今戦争が始まつたから仕拂はないと言へば甚だ信用を害し、又法律問題を惹起すが國家の命令を以て、英吉利の總ての引受屋割引屋銀行業者は暫く仕拂をしないで宜い、色々の條件を設けたが、其の條件に従つて拂はないでも宜いと云ふとになつた。外國に拂ふ必要が無くなれば、兌換券を英蘭銀行に持つて行つて金に引換へて貰ふ必要が無い。そこで前に出した兌換券は、又英蘭銀行に戻つて預金になつた。是に於て前に出した兌換券は、色々な形で間もなく回收されてしまつた。英蘭銀行では一度出した兌換券が再び歸つて來ると、それを二度と出さない直に焼いてしまふ。日本の日本銀行兌換券は出て行つたり戻つて來たり幾度もするから、ポロ／＼になつたり穢くなる。英吉利の兌換券は皆綺麗で、ポロ／＼になつたのはない。世界で一番ポロ／＼の紙幣は、希臘、亞米利加、佛蘭西、獨逸などである。吾々は紙幣と云ふとお官があつたり肖像があつたりして美しく印刷されたものゝやうに思ふが、英吉利のはさうでなく、眞白の紙に唯黒く印刷してあるだけで、札とは思へない。さう云ふ風で一旦出したものが歸つて來ると直ぐに焼いてしまふ。更に出す必要があ

れば、又新にゴロ／＼刷つて出す。それで四五日の間兌換券の發行高が非常に多くなつたと云ふだけで、又舊に返つてしまつた。

この銀行休日の延長、モラトリウムの實行と云ふやうなものは、あの場合に於ける臨機の處置として寔に已むを得ないことであつたが、之に依つて英吉利が世界金融の中央市場であると云ふ顔は潰れてしまつた。英吉利に外に偉い所がある譯ではない。英吉利に行けば、如何なる借金でも直ぐに出来るし、又返さうと思へば返せもする。それから金の自由市場であると云ふことが偉いのである。所が金が自由ではない、兌換は停止しないけれども、モラトリウムと云ふやうな非常手段を採つた。斯うなると英吉利と雖も必ずしも安全ではない。倫敦なら大丈夫だと言つて安心して置くことが出来ぬ。或はモラトリウムの範圍をもつと擴張して、結局英吉利にある外國の債權を踏み倒すやうになるかも知れない。嘗に金の貸借ばかりではなく、品物の遣り取りも保険も運賃も、何も彼も倫敦を土臺としてやつて來たのが、土臺が壊れてしまつたので皆困つてしまつた。成程獨逸や佛蘭西や露西亞のやうに、兌換停止をしなかつたことは結構であるが、元來獨逸や

佛蘭西や露西亞は世界の金融中心市場でも何でも無い。唯だ自國だけの事をして居つたのであるから、兌換を停止した所が、困るものは自國民だけである。外國に拂ふ必要があるから金が要るのだが、外國に拂ふ必要がなくなれば金が要りはしない。日本のやうに少しも金を使はないで差支ない。所が英吉利の英吉利たる所以の、世界金融の中央市場であると云ふ事實が無くなつてしまつたから、入つて來るものも入らないし取れるものも取れない。自分の方で拂はないから相手の方も拂はなくなつた。

その結果は何に現はれて來たかと云ふと色々のことにて現はれたが、一番初めに現はれて來たのは亞米利加との爲替相場である。戦争の始まる直ぐ前英吉利の爲替相場は、大體斯う云ふ風であつた。

巴里	英貨一磅に對し	二十五法一六
瑞西	同	二十五法一七
白耳義	同	二十五法二三
和蘭	同	十二ギルダ一五

露西亜 同
紐育 同
伯林 同

九留七二
四弗九三
二十馬克五三五

此處で爲替相場の立方を一寸云へば、英吉利の爲替相場の立方と、他の國の爲替の立方とは大抵反對になつて居る。それは英吉利の相手國の方が發動して爲替を取組むから、相手の國の相場を其の儘英國自らの相場にして居るのである。但し日本のは違ふ。日本のは英吉利の一磅に對して何圓と云ふのではなく、一圓に對して英貨二志〇片八分の三と云ふ風に立てゝ居る。所で戦争の始まる前の相場は此の表のやうであつたが戦争が始まると間もなく變動が起り、殊に一九一四年八月から十二月までの五ヶ月間に非常に變つて來た。紐育だけに就て見ると、一番安い時には四弗九十三仙、一番高い時には六弗五十仙尤も是はホンの一日、それも丸一日ではなく、僅か半日ばかりであつたが、兎に角六弗五十仙と云ふ非常な變動を來した。是は全く英吉利が世界の金融中央市場たる實を無くした最も著しい證據である。四弗九十三仙位の見當であつたのが急に六弗五十

仙商品ならば物に依ては其の位の變動のあることは幾らもあらうが爲替相場に斯様な變動の起つたのは甚だ稀なことである。亞米利加の人が英吉利に金を送らうとするのに戦争前には英吉利に一磅の金を送るに四弗九十三仙であつた。言換へると、一磅の爲替が四弗九十三仙で買へたものが、戦争が始まると間もなく、六弗五十仙拂はなければ一磅の爲替が買へなくなつたから、亞米利加人は非常に損をした。非常な損だから金を拂はない。即ち英吉利の方で借金を返さないから亞米利加でも借金を返さない。併し亞米利加はモラトリウムで返さないのではなく、爲替相場の爲に返さないのである。爲替が高いから馬鹿らしくなつて、誰れも英吉利に爲替を送る者がなくなつた。どうでも斯うでも返さなければならぬ者は金で送る。現金で一磅に當るだけ送らうとすれば、以前の四弗九十三仙に運賃と保険料を加へれば宜いのである。だから、金を送つた方が得である。尤も六弗五十仙といふのはホンの僅かの間であつたが、五弗や五弗少し餘になつたことはあつたから、英吉利と亞米利加との間の爲替は止つてしまつた。是が爲に日本も大に影響を被つた。と云ふのは、日本から亞米利加へ金を送るのに、今迄は直接亞米利加へ爲替

を組んで居つたのが英米爲替がこんなに變つて來たから、亞米利加へ送るのに、亞米利加へ直接送らないで英吉利に送つた。日本と英吉利との爲替相場はやはり二志〇片八分の三、フラクシオンに幾らか變動がある位のことで大した變りは無かつた。であるから例へば日本から二志〇片八分の三の割合で千磅送ると、其の千磅が英吉利を通つて、亞米利加に行くと六千五百弗になる。戦争前は四千九百三十弗にしかならなかつたのが六千五百弗となる。コレハ極端であるが五千弗とか五千二百弗には度々なつた。故に直接に亞米利加に爲替を送るより英吉利を通じて紐育宛の爲替を買つた方が、同じ一弗拂ふにも前より少ない金で済む。だから日本の爲替にも影響を及ぼして大變それが行はれた。是は獨り日本との關係ばかりでなく、何處の國でも同様であるから、亞米利加に金を送らうと云ふ時には、先づ英吉利に金を送る。そこで英吉利へ英吉利へと金を送つた、即ち英吉利は大變金が要る場合に、大陸諸國から全く來なくなつたが、斯く爲替相場の關係で、大陸以外の他の國から出來るだけ金を吸収した。金のかき集めを爲替相場場でやつたのである。

又亞米利加から英吉利へ送る金も、爲替で送れば損が行くから現金で送る。是は爲替相場が大變高いから、商賣が出來なくなつたり、或は拂ふものを拂はなくなつたから、戦争前程の取引はなくなつたが、やはり送らなければならぬ金がある、それは爲替に依るよりは現金で送る。そこで英吉利が金を吸収しやうと云ふ目的が達せられた。例へば日本が英吉利を通せば大變利益だと云ふことになる、ドン／＼英吉利に爲替を送る。さうすると片爲替になる。片爲替と云ふのは、日本から英吉利に送る爲替が多くなつて、向ふから此方へ來るのが少いことを謂ふのである。取る方が少くて送る方が多いから、兎に角日本の勘定に於ては、世界の何處かにある金を英吉利に送らなければならぬ。印度、支那、濠洲等、英吉利宛の爲替を組めば皆金が英吉利に行く。そこで金が大きに英吉利に入つた。是は即ち戦争前に英吉利が有つて居つた中央金融市場と云ふことの御蔭である。開戦後中央市場たることの値打は減つたが、併し其の作用を利用して、兎に角英吉利が目前の急に充つる爲に外國爲替を利用したのである。所で亞米利加の爲替がなぜ一番飛上つたか、他の國の爲替も變つたが、なぜ亞米利加の爲替相場が飛上つたかと云ふと、戦争

が始まつて、英吉利が資金を吸収しようとするのに、歐羅巴大陸諸國はもう駄目だ、皆自國に吸収する必要があるから英吉利に送れない。それなら世界の國々の中、何處に澤山資金があるか、吸収するとの出来る國は何處かと云ふと、日本でもなければ支那でもない、印度でもなく、亞非利加でもない、唯だ亞米利加一國しかない。故に亞米利加から一時の助けを藉りるより仕方がない。然るに恰かも此の亞米利加の助けを藉りやうと云ふのに、英吉利は又大變便利なものをも有つて居る。と云ふのは、英吉利は澤山の資本を亞米利加に投下してある。亞米利加に金が貸してある。だから態々亞米利加へ行つて借金を起さなくとも、従來亞米利加に貸してある貸金を取付けて、之を英吉利に持つて來れば金を吸収する目的が大分達せられる。併し貸してある金は遊んで居る譯ではない、總て夫れ々事業に使つてあるから、サア今返せといつても急に間に合はない。又株式會社の株券になつて居るものは、會社に資本の償還を求むることは出来ない。出来ないが、其處が金融市場の働きである。紐育は倫敦のやうな世界の中央金融市場ではないが、倫敦を除けば世界で一番發達した金融市場、ウォール街と云ふものを有つて居る。是は世界的で

ない、亞米利加的であるが、兎に角亞米利加の有價證券は皆紐育のウォールストリートに集つて、此處で賣買されて居る。紐育に行けば亞米利加の證券は何時でも賣買が出来る。倫敦ならばブラジルの公債であらうが、日本の公債であらうが、支那の株券であらうが、何處の國のものでも賣買が出来る。紐育の市場では他國のものも出来ないが、亞米利加の有價證券ならば殆ど倫敦と同じ位に自由自在に賣買が出来る。そこまでは發達して居る。其亞米利加の有價證券を英吉利は澤山有つて居る。英吉利の政府が有つて居る譯ではないが、民間に澤山ある。銀行の手にあり、資産家の手にある。それらの有價證券をウォール街に持つて行つて賣れば宜い、持つて行くにも及ばぬ書留郵便で送れば宜い。それも直ぐに送る必要はない、電報一本打てば事済む。何々會社の株をどれだけ賣ると云ふことの電報を一本打てば證券は後から送つて宜い。是も亞米利加でなくては出来ない。他の國例へば支那の證券などは駄目である。サア戦争が始まつた、直ぐに資金が欲しいと言つても、支那には證券が自由に賣れる市場が無い。日本は支那より幾らか優つて居るけれども、日本へ持つて來て英吉利人が日本の公債社債を賣らうと言つて電

報を打つても、少しは賣れるだらうが、さうなると忽ち相場が暴落して市場を攪亂する。市場が小さいから少し大きな賣買があると減茶々々になる。亞米利加のウォール街は可なり大きいから、左程市場を攪亂しないで賣ることが出来る。従つて英吉利の目的が達せられる。英吉利に取つては亞米利加があつたから非常に有難い。同じく資本を輸出した中にも、亞米利加に輸出して、亞米利加の事業に資金を投下してあつたと云ふことが、大變英吉利に取つて強味であつた。ソコで英人の持つて居る米國の有價證券をドシ／＼ウォールストリートで賣つた。此れが即ち英米爲替相場が突飛に飛上つた一の原因である。

けれども此證券を悉く賣つてしまつて、今まで貸してあつた貸金は取付けてしまつた後の英吉利は、戦後に於ては甚だ心細い。亞米利加以外の國の事業に資金を投下することとは、亞米利加より危険が多い。イザと云ふ場合に一向間に合はない。日本に貸したつて支那に貸したつて、亞米利加のやうに行かない。又戦争前に返つて亞米利加の事業が英吉利の資金を求めるやうになれば宜い、が是は六ヶしい。即ち戦争の爲に英吉利は一

時的に國際金融市場としての實を失つたのみならず、恐らくは戦後永久的に、少くも亞米利加に對する英吉利の勢力は無くなるであらう。紐育が倫敦に代つて、世界の金融中央市場になると云ふことは、是は出來ないことであるが、今まで倫敦に依頼して居つた亞米利加の金融市場は、少くとも亞米利加だけは離れてしまつて、今まで亞米利加の事業から得て居つた英吉利の利益は、皆亞米利加が自ら之を收めるやうになるであらうと思ふ。之が歐洲大戰の爲めに起つた英國金融市場の大變調である。

九 戦費の負擔と國民經濟改造の機運

此一節は大正七年一月『第三帝國』に掲載せり

以上説明した英國金融市場の大變調は、纏て來る可き世界經濟改造の序幕である。而して他方に於ては、戦費の負擔の爲めに各交戰國の國民經濟に大變調が起りつゝある。此事を少し詳しく話して本講演を終らうと思ふ。

今回の戦争の始まるまでの各國の經濟は、生産を本位として居つた。生産に依つて富が作られ、其作られた富が流通して個々の人の手に歸し、其を消費する。即ち生産——流

通——消費と云ふ順で従つて經濟學に於いても生産論、流通論、消費論と分ち、流通論も更に交換、分配に分つて、經濟學を四つの部門に分つた。其中でも生産を出發點とし、生産が十分でありさへすれば、其の他の事は自ら之に準じて行く。故に國家としても民間の生産を奨励し、生産を保護してやれば、流通も自ら圓滿に行はれ、消費も自ら十分になるから、流通に對しては餘り干渉せず、唯妨害となる可きものを除去してやれば宜いと云ふことになつて居つた。商品輸出を以て立國の基礎として居た頃の英吉利に於ては、政府は唯販路を開くと云ふことをするだけで宜い、販路さへ開ければ後は賣ることも代金を取立てることも、それは商人がするから政府の力を藉りるに及ばぬ。又金融市場の如きものに就ては、政府は直接には殆ど何等の干渉もしない、唯英蘭銀行を経て利子の上げ下げで調節をするだけである。又通貨の如きも自ら増減するに任せて、人爲的に何等の手加減をも加へないのである。英吉利の金貨本位と云ふものは、政府が少しも手を加へずして圓滿に流通が行はれるから一番良い方法と認めて採用したのであつて、他の國は英吉利と商賈をする關係上金貨本位にするが宜いさうして置けば國內の事情はそれに相應し

て行く。少しも金貨本位に疵が付いてはいけなすが、疵が付かない限りは政府では少しも手を付けないとしてある。尤も昔はさうでなかつた。日本に就ても徳川時代、又西洋に於ても昔は通貨の事に就ては國家が非常に干渉した。其干渉は主に自分の利益の爲にしたのであるから、或は不換紙幣を發行するとか、實際に價の無い貨幣を無理に流通せしめるとか、悪貨を流通せしめて其のカスリを儲ける。即ち金貨銀貨の目方を減らしたり、或は純分を少くしたり、或は中へ混ぜ物を入れたりして、一分のものを一分二朱に使はせると云ふやうなことをしたのである。

所が金貨本位となつては、さう云ふことをしたくも出来ない。若し強てすれば金貨本位でなくなる。金貨本位を維持するには、兌換制を完全に維持して置けば宜い。兌換制を完全に維持すると云ふことは、中央銀行の營業所に、營業時間内に兌換券を提出して金貨と引換を求めたならば、躊躇なく其の額に相當するだけの金を渡してやる、又金を持つて來て請求したならば、何人が幾ら持つて來ても、必ず其を金貨に鑄造してやる、それを名づけて自由鑄造と云ふ。此の兌換と云ふこと、自由鑄造と云ふことを固く守りさへす

れば宜いのである。所が昔はさうでなかつた。如何なる時に如何なる貨幣を何程拵へるか云ふことは、全く政府の都合次第で、人民は少しも知ることが出来なかつた。けれども今日金貨本位國で、自由鑄造を認めて居る國に於いては、國內に幾ら貨幣があるべきかと云ふことは人民が極めると言つて宜い。尤も誰が幾らと言つて極める譯ではないが例へば金の塊を有つて居る、或は金の指輪を持つて居る、其を金貨にして貰はうと思へば、日本銀行に持つて行つて鑄造を請求する、さうすると日本銀行では純分を量つて、それに相當するだけの金貨に拵へて呉れる、即ち我が貨幣法第十四條に『金地金ヲ輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ』と云ふことがある。若し五圓の金貨を一つ十圓の金貨を一つ殖やさうと思へば、それだけの金を持つて行きさへすれば宜い。民間に金を持つて居る者が多くなれば、金貨は幾らでも殖えるのであるから、兌換制と自由鑄造を守つて行けば後は干渉してはならない。干渉しなくとも國內に必要なだけは金貨が出来、必要が減すれば減るので自ら調節される。

兌換券は何時でも金貨と引換へらる可きものであるから、兌換券だけで流通して居る

間は其の儘に置き、引換に來た者には何時でも引換へてやるのであるから、兌換券が多過ぎると、自然日本銀行に持つて來て金貨と引換へる者が多くなる。さうなると準備金が少くなるから兌換券の出方が減る。又國內で餘計に通貨が要ることになれば、日本銀行に對して割引貸付の要求が多くなるから兌換券が殖える。干渉しなくても自然に巧く行くやうになつて居る。

消費に就ても同様である。是は衛生上或は取締の上から、或る制限を設くる必要のあることも無論あるが大體に於て誰が何を食はうと、どんな家に住はうと、どんな衣物を着やうと、如何なる生活をしやうと、國の風俗を破り秩序を紊さない限りは全く自由である。自分の得た月給を皆使つてしまはうが、半分貯蓄して置かうが、四分の一貯蓄しやうが、それは全く其人の自由であつて、公の安寧秩序を害さない限りは少しも干渉しない。専ら生産を奨める、生産を奨めると言つて一々命令をするのではなく、人民の知らない事を教へてやるだけである。直接に保護金を與へるとか手を引いて教へてやるのでなく、詰り儲かるやうにしてやるだけである。若し外國から安い物が澤山入つて來て、其の物の値

が安くなれば、其事業は起らうとしても起ることが出来ない。さう云ふ場合には消費者に取つては氣の毒であるが、輸入税を課して其品物の價を高くする、高くすれば國內で作つたものが引合ふから其の事業が起つて来る。或は米に輸入税を課すると米が高くなる、さうすると日本の農夫が作つた米が高く賣れるから、米の生産が多くなる。是れが所謂保護政策である。然るに英國は此政策を取らないで自由貿易政策によつて民間の活動を成る可く自由にさせる方針を取つて居たのである。

所が戦争が始まつてから後の經濟、即ち現在に於ける戦時經濟は、之と正反對に各交戦國は皆消費本位となつた。戦争は大なる消費であつて、儉約は出来ない。何でも彼でも敵に勝たなければならぬ、敵に勝つにはそれだけの物を使はなければならぬ。そこで消費を本位にして、生産及び流通は消費に順應して行かなくてはならぬと云ふ状態に變つて來た。それは誰がすると云ふのではなく自然の大勢である。我が日本の如きは、交戦國の一員ではあるけれども戦争しては居らぬ。青島を攻略した後は英國海軍と共同戦位のこと、大した戦争をして居らぬから之が爲に國費が著しく膨脹して居るのではな

い。亞米利加は此の頃大兵を歐羅巴に送ると言つて居るから、さうなれば歐羅巴諸國の仲間入をするけれども、それまでは亞米利加も同様である。其の他の歐羅巴の交戦國は皆消費本位になつて居るのであるから、此の間に立つて生産本位の國が儲かるのは當り前である。先方は盛んに消費して居る、消費一方であるのに、此方は作る一方で使はないから、富んで行くのは當然である。所で戦争の爲に失ふ所のもは、決して獨り經濟上の入費ばかりでなく、人を澤山使はなければならぬ。經濟上の損失は寧ろ小なるものである。人の損失は金錢に見積ることが出来ない、極めて貴重なるものである。經濟上の入費は、金額に積つて言現はすことが出来る。今戦時状態の調査に於て最大の權威として知られて居る、丁抹コーペンハーゲンの戦時事情調査局の最近の調査を掲げて見よう（米國『アナリスト』より取る）。

交戦諸國戰費一覽表

(單位百萬米弗)

自一九一四年 至十八(五箇月)	一九一五年 (一ヶ年)	一九一六年 (一ヶ年)	自一九一七年 至十七(七ヶ月)	自一九一七年 八月至一九一八年七月(見 積高)(一ヶ年)	自開戦時 四 個年間總計
--------------------	----------------	----------------	--------------------	------------------------------------	--------------------

英 國	佛 國	露 國	伊 國	白、セ、ル、葡	聯合國合計	獨逸	埃、匈、土、プ	合 計	總 計
九〇〇	一、六〇〇	一、三〇〇	...	六〇〇	四、四〇〇	二、二〇〇	一、三〇〇	三、五〇〇	七、八〇〇
五、二五〇	四、六〇〇	四、四〇〇	六五〇	一、五〇〇	一六、四〇〇	五、四〇〇	四、四〇〇	九、八〇〇	二六、二〇〇
七、六〇〇	六、六〇〇	五、六〇〇	二、三〇〇	一、六五〇	二二、七五〇	六、八〇〇	五、一〇〇	一一、九〇〇	三五、六五〇
七、〇〇〇	三、八〇〇	三、七〇〇	一、七〇〇	一、〇〇〇	一九、四〇〇	五、二〇〇	三、一〇〇	八、三〇〇	二七、七〇〇
一三、二五〇	七、二〇〇	六、五〇〇	二、八五〇	一、八五〇	四二、四五〇	九、九〇〇	五、八〇〇	一五、七〇〇	五八、一五〇
三四、〇〇〇	二二、八〇〇	二一、五〇〇	七、五〇〇	六、六〇〇	一〇六、四〇〇	二九、五〇〇	一九、七〇〇	四九、二〇〇	一五五、六〇〇

即ち大正七年七月までに、總計無慮千五百五十六億弗、即ち三千億圓計りかゝる勘定である。

英國に就て見るに、英國一ヶ年の國民總所得高は二十四億磅、日本の二百四十億圓程であると云ふ。英國の富の總額はどれ位かと云ふと、是は國民所得、即ち國民が年々稼ぎ出す所の富の三倍乃至四倍に當ると云ふ計算が妥當なりと認められて居る。これは英吉利だけでなく、獨逸でも佛蘭西でも大體同じである。其であるから國の富を悉く消費し盡しても、三年なり四年の間、元だけの所得を使はずに全部積んで置くことにすれば、又富の恢復が出来る。若し其の積む所の額を以前の所得の倍にすれば、一年半若くは二年で元の通りになる勘定である。

所が英吉利の失ふ所は上に掲げた政府支出の軍事費のみに止まらず、其の以外にも色々な損失がある。例へば平生は生産に従事して居た人が、生産から離れて戦争に従事して居る、それらの人の稼ぎ高も無くなつて居る、或は生産の爲に設けられた工場なり製造所なりが、軍需品を作る爲めに使用せられて居る、此等のものも損失の中に加ふべきであると唱へて居る者があるが、それは誤りである。なぜかと言ふと、生産に従事して居た人が生産を止めて戦争の爲に働いて居ると言つても、此等の人に對してはやはり報酬を拂つて居る、其報酬は主に英吉利の政府が拂つて居るのである。而して此等の報酬なり、其他の品物の買入代なりが積り積つて右の額になつたのである。だから右金額の外に、生産に従事する人間が戦争に従事して居る爲に生産が出来ない、それも損失であると言

つて計算するのは誤りである。

そこで此の軍事費として使はれて居る金高の内容を別けて見ると、凡そ六つになる。其の第一は出征兵士の入費、其總人員數は別表の通りである。

出征兵數	
英國	七百五十萬人
佛國	六百萬人
伊國	二百五十萬人
聯合側合計	三千三百萬人
獨逸	一千五十萬人
ブルガリア國	五十萬人
獨逸側合計	二千萬人
總計	五千三百萬人
而して死傷數左の如し	
死亡數	
英國	三十萬七千五百人
佛國	百二十八萬二千五百人
米國	二百萬人
露國	一千四百萬人
白耳義、セルビア及葡萄牙	百萬人
埃匈國	七百萬
土耳其	二百萬人
伊國	十五萬七千五百人
セルビア	十六萬五千人
埃匈國	百七萬七千人
ブルガリア	三萬七千五百人
佛國	九十五萬一千人
伊國	十一萬人
セルビア	六萬三千人
埃匈國	七十九萬九千人
ブルガリア	二萬七千人

露國	二百二十五萬人
白耳義	七萬五千人
ルーマニア	十萬人
聯合側合計	四百三十三萬七千五百人
獨逸	百三十二萬七千五百人
土耳其	二十二萬五千人
獨逸側合計	二百六十六萬七千人
總計	七百萬四千五百人
負傷兵數	
英國	二十三萬一千人
露國	百七十一萬九千人
白耳義	四萬九千人
ルーマニア	六萬人
聯合側合計	三百十八萬三千人
獨逸	九十五萬三千人
土耳其	十五萬七千人

獨逸側合計百九十三萬六千人

合計 五百一十一萬九千人

死者の總計が七百萬人、負傷兵數總計が五百十二萬人、合せて千二百十二萬人が人命に係る損害の總計である。

第二は軍需品の製造に従事して居る者の入費、是は軍需品の製造に従事しなければ、それだけは生産の方に働くから、それだけの損失になる。第三は戦争に使はれた所の鐵道、船舶、自動車、馬軍、馬匹の働き、此等のものは戦争の爲に使はれなければ、生産の方に使はれる所がそれが生産に使はれずして戦争の方に取去られたから、是亦一種の戦争の爲めの損失である。第四は戦争の爲に死亡し、或は負傷したりした人に關する人及物の働き、即ち死んだ人を埋葬するとか、負傷者を治療する爲に醫師看護婦、或は事務員等も相當に要する。此等の人も戦争がなければ、何れも皆生産の方に働くことが出来た、其が戦争の爲に生産に従事することが出来なくなつたのである（死傷兵數は別表を見よ）。第五は生活費の騰貴戦争に行つたつて食べられるだけしか食べない。それは平生遊んで居る時

よりは食物の量が多く要するか知れぬがさう餘分に食べるものではない。唯だ國內で食べる代りに、何百萬と云ふ兵隊が國外に出て居るから、其戦地へ送る運賃や、其の他の費用が高くなる。被服でもさうである。併し被服費とか食費とか云ふのが全部損になるのではない、若し全部損と云ふ勘定にすると間違ふ。戦争が無くとも食べもすれば着もする、故に平生より高くなつたゞけが損になつて居るのである。第六は其の他の戦争の爲めに特に新たに起つた所の費え、即ち材料の費えである。平時ならばレールを拵へる鐵で軍艦を造り、平時ならば工業に使ふ原料で彈藥を拵へる。是も全然損になるのである。さて是れだけの入費は誰れがどうして負擔するかと云ふと、各國の政府には之れを負擔するだけの力がない。政府は人民から其の所得の或る部分を、租税なり其の他種々の形で取つて使ふのであるから、詰り國民が負擔するのである。英國の戦費は英國國民が負擔し、獨逸の戦費は獨逸國民が負擔し、佛蘭西の戦費は佛蘭西國民が負擔するのである。所が同じく戦費を負擔するのに、其の負擔の課し方が色々ある。其の課し方の如何に依

つて經濟上重大なる差異を生じて來る。先づ國民が負擔するには、國民が現に有つて居る所の富を政府に納めるのが一つの方法である。それから戰爭中、戰爭に従事して居ない國民が、致々營々として働いて作り出した富の一部分を政府に納めることも負擔の方法である。此の二つは現在其處に在る所のもので、戦費の負擔をする方法である。個人にしても、例へば旅行をする、其旅費は旅行を始める前に自分の持て居た貯金を以て支辨するか、或は其の月に受くる俸給の一部分を以て之に充てるかと云ふやうなものであつて、共に現在の富を以て支辨する方法である。其の外に、現に今其處に在る富でもなく、又現に作り出しつゝある富でもない、將來出來る所の富を、目當として負擔すると云ふやり方がある。國民から見ると、以上二種の方法があるのである。

政府の方から言ふと、此の負擔の分け方に三つある。其の一は戦争前にあつた税よりも多くの税を課し、其の増收を以つて戦費を支辨するのである。其の二は借金をするのである。即ち公債を募集する、或は一時借入金をして、それを借換へ借換して行く是れである。借金にも二つある。一は償還期限の長い公債であつて、他は短期の一時借入金である。

ある。短期の借入金は屢々行はれて居る、例へば露西亞が日本から軍需品を買つて、其代金が拂へないから露西亞の大藏省證券を日本に賣出した、是は詰り一時の借入金である。英吉利でも大藏省證券を賣出して居るけれども、戦時中は逆も返せないから、新規に又大藏省證券を賣出して其の金で返すと云ふやうなやり方を取る。其三は増税でもなければ借金でもなく、物價騰貴を以て支辨する方法である。物價騰貴と云ふのは、一面からと言つた言葉であつて、他面から言へば通貨の膨脹と云ふことである。

即ち政府の方から言へば、此の三つの方法があるが、國全體として言へば現在の富、現在の稼ぎ高を以て支辨するか、若くは將來の稼ぎ高を以て支辨するかの二つだけしか途はないのである。所が此に就て間違つた解釋をして居る者が多い。政府の方から言つた所の増税を以て戦費を支辨する方法とは、國民から言ふと、現在の稼ぎ高なり、現在の富なりを以て支辨する方法と同じことである。それから將來を目當にして戦費を支辨すると云ふことは、公債なり一時借入金なりを以て政府が支辨するのと同じであると、斯う云ふ風に考へて居る人が少くない、それは違つて居る。さう云ふ風に解釋することは覺え

易くて洵に結構である。又一應の説明ならそれで宜い、大體はそれに相違ない。借金は今此處に在るものではなく、將來に於て拂はなければならぬ、又増税は今此處にある金でなければ、納税することが出来ないから、大體に於てそれに相違ない。而も普通の場合に就て言へば其の通りであるが此の度の戦争に於いてはさうでないことが澤山ある。殊に此の點に於ては英吉利と獨逸とでは其真相が大變違つて居る。

現在の財源を以て戦費を支辨する第一の方法は、今此處に在る富を削つて戦争に使ふ。現在此處に在る鐵を以て軍艦を造り大砲を拵へて戰場に運ぶ、或は今處に在る所の材料を以て兵隊の服を作り、或は彈藥を作つて戦争に使ふと云ふのである。所が現在の富と云ふものは英吉利にしても獨逸にしても佛蘭西にしても、さう多いものではない。前に云ふ通り年々の稼ぎ高の三倍若くは四倍しかない。だから少し大袈裟に使へば此の財源は直ぐに盡きてしまふものである。けれども英吉利は國內に在る富の外に、國外に於て大變富を有つて居る。過去に於て輸出した所の資本が澤山ある。約四百億圓の富が外國に放資してあると云ふ、日本などとは大變に譯が違ふ。英吉利には國內の富の外に

國外にも澤山の富があるから、それも使ふことが出来る。それで先づ第一に其の國外に在る富の回收の出来るものは回收して戦費の資源に充てる。それが即ち亞米利加の證券の賣出し所謂證券の動員である。兵員を徵發して動員する如くに、證券を動員して戦争の用に充てたのである。生産的に投下した所の資本を呼戻して之を戦争の費用に充てた。併しながら是は英吉利に取つて甚だ危険な方法であることは前に説明した通りである。英吉利の英吉利たる所以は、外國に澤山の資本を投下して其の力を以て世界を抑へて居つたことにある。然るに戦争の爲めと言へ、之を回收して使つてしまふことになると、今度は新に貸付け様としても思ふやうに貸付けられない。現に亞米利加の如きは將來は英國から借りるまいから、他に適當な借手を求めなければならぬ。又其の貸付ける富も新規に作らなければならぬ。恰も蛸が自分の足を食つて生きて居るやうなものである。國外に少しも富の無い國より、國外に富があるから、之に手を付けやうと思へば付けられる、それが爲め大變優る所があると共に劣る所もある。其の劣る所以は、英吉利が商品輸出國から資本輸出國に變つた點に在る。資本輸出國になつたのは結構である。

が結構過ぎて魔が差し始めたと言ふのと同様に、戦争に當つて非常に入費が掛る。此の入費はどうしても國民が負擔しなければならぬ。幸ひ英吉利は平素富を作つて外國に貸してあるから直ぐに自分の身を掴らないでも外國に貸してある金で戦争が出来る。と言ふのであるから、一面から言へば寔に結構なことであるが、他面から言ふと、さう云ふ當てがあるから自然國民の努力が足らない。非常な消費をして居るのだから餘程一生懸命になつて消費を補填する爲に努力を要する時であるにも拘はらず、どうも眞面目にならぬ。是は英吉利人の愛國心が獨逸人に對して劣る譯でもなければ、非常の時に非常の覺悟が英吉利人に缺けて居ると云ふ譯でもない。英吉利人は獨逸人程臥薪嘗膽をしなくとも済む。成程外國に貸してあるのを回收すれば、將來に亘つて利息が取れなくなると云ふ不利益はあるが、脊に腹は代へられぬ。外國に貸してある金を取りさへすれば、差向きの苦痛はない。戦争に行つて居る人の代りまで働いて國民の生産能率を高め、其の餘計に稼ぎ出した富を政府に納めて、戦費に充て、貴ふと云ふ必要が少い。殊に獨逸に比べて非常に少い。であるから獨逸程眞剣にならない。如何に最眞目に見ても一生懸命

になり方が少い。戦争中でも無駄をして居る。幾ら國民勤儉野戦だとか、アスキスのお嬢さんの婚禮の祝に三鞭を抜いたのが贅澤だなどと言つて騒いでも、國民全體がまだ本當に眞面目になつてゐない。殊に上流社會は相變らず贅澤をやつてゐる。贅澤をするな、獨逸を見よ、佛蘭西を見よ、露西亞を見よなど言つて叫んだ所で、身に差迫つた必要がないから、本當に緊縮した氣分になれない。

此の點から言ふと、獨逸と英吉利とは氣分が大變違つて居る。英吉利は段々と富が増して結構であつたが、餘り結構過ぎてダレ氣味になつて居つた。其の事は近頃となつて心ある英吉利人は氣が付いて心配して居つたけれども、多數の國民は何とも思つて居なかつた。然るにさて戦争となつて見ると、獨逸人は非常の覺悟をして居るに、英吉利人は餘りに眞面目になつて居らない。是は英吉利の國民性が悪いとか何とか言ふ人があつても、それは當らない。英吉利人も獨逸人も同じ状態になれば同じ氣分が起るに違ひない。或は獨逸は知識が發達して居るとか、或は科學教育が盛んだとか言ふ、其も無關係はある。乍去之を必要とする大原因がなければ、やはり本氣になつて働き出しは

しないであるから國の進歩と云ふことは、唯だ富が増したから宜い。外國に澤山金が貸してあるからと云ふやうなことで極まるものではない。殊に英吉利の如きは餘程大なる暗黒の半面のあると云ふことを證據立てたのである。

國民が餘計の富を以て戦費を負担すると云ふことは、詰り戦争用の爲めに餘計に富を残すと云ふことである。餘計富を残すには、餘計に稼ぐと云ふことゝ使ふことを少くすることゝある。消費と云ふことは、是までは大體人民の自由に委せて政府が之に干渉しなかつた。生産の方にばかり重きを置いて、消費の方は構はなかつたのが、今日ではさう行かなくなつた。富は餘計に残さなければ戦費を拂ふことが出来ない。此の非常なる戦費に應ずるが爲には、三杯の飯は二杯に減らし、十遍食べる所は五遍に減らしても、國の富は餘計に剩して戦費に充てるやうにしなければならぬ。英吉利は國外に貸金を有つて居つたから、自分の身を非常に詰めなくとも宜かつたが、併しそれは永久にあるものではない。一度回収すればそれ切りであるから結局は生産を増加し消費を節減して之に應ずるより外はない。

獨逸に於ても外國に貸付けてある金がある。それは英吉利程多くはないが、英佛に次いで獨逸は外國に金を貸付けて置いた。であるから獨逸も之を回収して使ふことが出来るれば、無論回収して使つたに相違ない。所がそれは敵國通商禁止で聯合國に取つちめられて居るから絶対に出来ないから、獨逸では外國に貸付けてある富は勘定に入れない。今でも入れて居らない。外國に貸してある所の資本は、今日と雖も少しも手が付いて居らぬ。是は戦争の結果没收されることになれば仕方がないが、没收されない限りは依然としてある。所が英吉利の亞米利加にある債權は、大いに回収してしまつたから、四百億圓の貸金に大分手が付いた譯である（約百六十億圓と云ふ）。獨逸の對外債權は少いが少しも手が付いて居らぬ。兎に角獨逸は今や四面に敵を受け、弱い奧太利だの勃牙利を引連れて戦争をして居るのであるから潰されてしまへば夫れまでゝあるが、潰されない限りは、外國に在る債權は戦後獨逸が使はうと思へば使ふことも出来る。又戦争中取れなかつた所の利子も、戦後には一時に入つて来るのである。恰度吾々が人に金を貸してあるが、どうしても返して呉れない、今自分は金が必要から出来るなら返して貰ひ

たいが返して貰ふ見込がないので、據どころなく苦しい思ひをして遣り繰りして居るやうなものである。獨逸だとして決して自ら好んで外國にある富を使ふまいとして居る譯ではない。否、使へるならば使ひたい。けれども使へないと云ふのは、主として英吉利がさうして呉れたのである。英吉利が獨逸を苦しめる爲めにモラトリウムをやつた。最初のモラトリウムは英吉利の金を擁護する爲にやつたのであるが、其の必要は直ぐに済んでしまつた。後のモラトリウムは敵國に對する一切の支拂を停止し、敵國人との通商を禁止し、獨逸の品物は決して賣買してはならぬと云ふことにした。さうして段々其範圍を擴張して、日本までも其仲間入をして、敵國との通商を禁止することにした。一方には英吉利の絶大なる海軍を以て獨逸の海岸を封鎖し、蟻も通さないと云ふ位にまで嚴重に見張つて居るので、獨逸は外國の債權を回收しやうと思つても、どうしようとしても何事も出来ない。倫敦の市場は無論獨逸の請求には應じない、紐育も同様、巴里も、ペトログラードも皆塞がつてしまつた。それは獨逸政府のものばかりではなく、獨逸人民に對しても同様であるから、銀行の預金も渡さなければ利益の配當も渡さない。又獨逸が有つ

て居る外國の證券を賣らうと思つても賣れない。例へば英吉利の會社の株券、社債券でも其の所有者が獨逸人であると云ふ時には、何處へ行つても買つて呉れない。故に回收したくとも回收することが出来ない。世界中何處の國も皆さう云ふ風であるから、獨逸は外國に在る所の富を戰爭に使ふことは全然出来ないのである。

そこで獨逸は國內の富に手を付けた。尤も此點は英吉利も、佛蘭西も露西亞も共通である。併し國內の富の大部分と云ふものは、其の儘では戰爭に使へない。國內の富の一番多いのは土地及び土地に卸した資本である。土地を彈藥にすることは出来ない、土地を軍艦にする譯にも行かない。斯く土地を直ぐ戰爭に使ふことは出来ないが、土地に對する權利を處分すれば戰爭に使ふことが出来る。其の權利の處分は、國內だけで處分したのでは使へないから外國人に賣らなければならぬ。所が例へば英吉利の土地を亞米利加人に賣り、其代りに食糧や軍器や彈藥や色々の軍需品を賣つて、之を戰爭で使つてしまつたとすると、亞米利加から貰つた物は皆無くなつて、國內の土地は亞米利加人のものになつてしまふと云ふことになるから、是は甚だ危険である。外國に在る財産を處分する

ことさへ宜しくない、況んや國內の財産を外國人の手に移して、其の代金を彈藥にして打つてしまふと云ふとは大變な損である。損であるが、是は英吉利には少しある。佛蘭西にもある。併しながら獨逸には其も出來ない。何となれば國を嚴重に封鎖されて有價證券さへ賣れないのだから、土地の如きものは賣買が出來ない。であるから獨逸の富は少しも外國人の手に渡つて居ない、皆獨逸人のものである。唯獨逸人の間を轉々して居るだけである。同じ獨逸人の間を、AからBに行きBからCに移つて行くだけである。即ち現在の富を使ふと云ふことは、其處にあるものを使ふのではなくして、戰爭に就て現に使ふ物を、國內で新規に拵へるか、或は外國にある物を買ふか其より外に方法はない。買ふと云つても、唯だ金高が當るだけで、其處に在る物を使ふのではない。英吉利國內の鐵なり羊毛なりを直ぐに軍用に使ふこともあらうが併しそれだけでは戰爭は出來ない。新しくさう云ふ材料を作らなければならぬ。新しく作るのは、今現に在る富ではなく、是から新に作り出す富である。であるから現在の富は外國から其品物を取るより外はない。外國から取る時には代を拂はなければならぬ、或は借金をしなければならぬ。英吉

利の戰費總額五十八億磅に當る品物は、何處から來るかと云ふと、國內からも出國外からも來て、戰場で消費されてしまふのである。現在國內に在る土地なり建物なり機械なりを外國人に賣つて、其の代りに品物を外國から取るか、或は代價を拂つて外國から品物を取るか、兎に角外國から品物を取寄せなければ之を戰爭に使ふ事は來ない。それから現在の國內の財産を處分せず、代を拂はずに外國から品物を取ると云ふのには、借金をしなければならぬ。今は拂ふことが出來ないから他日拂ふと云ふ約束をして品物を輸入する、それが現在のものでなくして將來のものである。將來お返し申しますと言つて借りて置いて、それを彈丸にして打ち軍艦にして沈めてしまつたとすれば、それだけのものは必ず他日返さなければならぬ。

所が獨逸は、今回の戰爭に於てさう云ふことも出來ない。自國の富を外國人に賣ることも出來なければ、自國から代を拂つて外國の物を買ふことも出來ない。所謂敵國通商禁止で、何にも外國から獨逸へ輸入することが出來ぬ。尤も和蘭を通つたり、或は伊太利の參戰前には伊太利を經、若くは瑞西などを通つて多少漏れて這入つたが、其は少部分で、

大體に於て何も入らない。何も入らない爲に苦しいけれども其の代り國の富も外國へ出て行かない。獨逸も開戦の當初に於ては非常手段を以て金を回収し、又之を擁護することに努めたけれども、今日となつて見ると、獨逸の金貨を保護して居るのは英吉利の海軍である。獨逸は何もして居ないが、英吉利の海軍がすつかり網を張つて何も入らないやうに、又出さないやうにして居るから、金貨の流出することもない。

さう云ふ風に、獨逸は一切の物が外國から入つて來ない爲に、あれだけの大戰を苦しんでいるが、自ら自辨して居る。所が英吉利は骨を折つて色々なことをして、金貨の流出を抑へて居るけれども、どうしても出て行く。獨逸の潜航艇が暴れ出してからは、外國からの輸入が大分困難になつたけれども、それでも尙盛んに外國から色々な物を輸入して戦争に使つたり、又は國民が其を食つたり飲んだりして居る。であるから、金貨が流出する。亞米利加へ行く日本に來ると云ふ風である。

其から將來の財源、即ち借金をして外國から品物を買つて戦争に使ふと云ふ方法も、獨逸の方には全く出來ない。タツタ一遍亞米利加で借りたが、其れ以外には外國で借りた

事がない。國內では六回の公債を募つたが、それは皆獨逸國民が應じたのであつて、外國人の應じたものはない。従つて其利息も國內に拂ふだけで、國外には出て行かない。元金の償還にしても、政府が國內の人民から取立てた金を公債所有者に返すのであるから、國內を右から左にと轉々して居るだけである。之に反して、英吉利は國內でも公債を募つたが、外國からも少しは借りて居る。一面には聯合國に貸出して、もある戦争が長く續けば、續く程、外國に對する借金が殖えて、貸した方は減つて來る。さうなると、英吉利は何もしないで、利息だけでも二十億圓の品物が入つて來た爲に、輸入超過であつたが、今度は其の狀態が變つて、借金が殖えたから、輸入超過をして居た日には、國が立たなくなるかも知れない。即ち國民が生産をして稼いで、輸出を多くせなければならぬ。今まで利息を當にして居つた國が、稼がなければならぬと云ふ前とは、全然變つた立場に立つことになる。即ち英吉利の國是を變へなければならぬやうになる。富が又以前のやうになれば、宜いが、其まで暫くの間、英吉利も若返らなければならぬ、大に若返つて此戦争中から努力しなければならぬのであるが、英吉利人はまだ努力が足らない。戦争の入費を支辨する

のでさへ將來の富を當てにして、現在の稼ぎ高を以て戦費を支辨することが甚だ少いと
言つて識者は憂へて居る。戦争と云ふ重大事件を目前に控へながら、尙且つ努力の十分
でないこと云ふことは、英吉利の將來に對して洵に憂慮すべき次第である。

獨逸は外國に對して借金が増え居る譯ではない、貸金も殖えないが借金も殖えない、
其の點は戦前と少しも變りがない。併し戦費は英吉利に劣らないほど使つて居る。但
し其の支辨は皆國內限りでやつて居る。或は國內に於ける稼ぎ高の大部分を、政府が取
上げて政府が使つて居るのである。だから今は苦しいが、戦後に於て外國へ取られるや
うなものがないから大いに樂である。今の戦争中政府が取つて使つて居るものは、戦後
は要らなくなる。尤も償金でも非常に澤山取られる事になれば格別、左もない限りは全
く要らなくなるから、これを生産に使ふことが出来る。さうなると生産が大に發達して、
戦争前であつてさへ獨逸人は英吉利人に比べて勤勉力行の人間であつた、金の利息も可
なり入つたが、それだけでは安心して居なかつた。大に國內の産業を興し勤勉努力して
居つた、そこへ戦争となつて外國から何も入つて來なくなつたから、食ふ物も食はず飲む

物も飲まないで、皆戦争の方に使はれて居る、是が一朝變つて安逸の習慣が付けば兎に角、
さうならなければ戦争に使はれた力は生産に使はれ、産業を發達せしむることになる。
又戦時の覺悟が生産上の覺悟となつて、戦後も引續いて努力したならば非常な力となる
に迷ひない。是れが英吉利と獨逸との著るしい相違の點である。

さて政府から見た戦費支辨の方法は、増税をするか借金をするか物價を騰貴させるか、
此の三種であるが、増税をすると云ふことは、大體に於て現在の財源に據ることである。
即ち自己の富を税として政府に納める、或時の稼ぎ高を納めると云ふのであるから、其れ
は現在の財源であるけれども、増税は現在の財源のみであると思ふと又間違が起る。と
云ふのは税が非常に重くなつて、現に所有する所の富若くは現在の稼ぎ高では納め切れ
ない時には、仕方がないから借金しても納税の義務を果すと云ふことになる。是は愛國
心からでもあり、或は法律の制裁を受けるからでもあるが、兎に角借金をして税を納める
やうになる。是は政府から言へば増税の形であるが、國全體としてはやはり將來の財源
を當てにすると云ふことになるのである。

所が此の點に於ても獨逸と英吉利とは餘程違つた所がある。獨逸の方は同じ借金であるけれども、國民相互の間の貸借である。だから是は獨逸全體として見る時には借金が殖えたのではない、現在の富が使はれて居るだけである。例へば百圓の税を納めなければならぬに、自分の稼ぎ高は五十圓しかないから、後の五十圓は納められない。仕方がないから人から五十圓借りて納めたとする、其人は五十圓の貸主、私は五十圓の借主になつて居るが、政府には税として百圓納めたことになる。所が其の五十圓を若し税として納めなければ、或は食へてしまふかも知れぬ、或は何かに使つてしまふかも知れぬ。又借りた所の五十圓は、若し私が借りに行かなければ銀行に預けてあるかも知れぬ。さうすれば銀行では其の金を瘦かしては置かないで、何かを利用して居る。所が私が借りに行つた爲に、備になつたり、或は商業の資本になつたりして働いて居る。所が私が借りに行つた爲に、貸主は銀行から五十圓引出した。其が爲め今まで生産的に使はれて居つたものが、銀行から其人を通じて、私の手を通じて租税として政府に納めることになつたのであるが、それは國から見れば現在のもので、將來の財源ではない。生産に使はれて居つたものが、不生

産の戦費として使はれるだけであるから、將來を當てにしたものではない。獨逸國內にあつたものが、形を變へて使はれたに過ぎない。

所が英吉利のやうに、外國から借金が出来る、其状態が變つて来る。例へば前と同じ様に、私が五十圓の金を人から借りたとしても、其人が其五十圓を銀行から引出す、銀行では其の金を國內の事業から回収するのでなく、外國の債權を回収するかも知れぬ。或は外國の借金を殖やすことになるかも知れぬ。外國の金を借りて來て使ふと云ふことになる、其は將來を當てにした財源である。さうすると同じく私が百圓の税を納めたにしても、五十圓は二つの違つた借金である。獨逸の方は國內の金を甲から乙に貸借するだけであるから、是は現在の財源である。英吉利の方で言へば、外國から借りた金であれば、何時か之を返さなければならぬ。だから増税を以て戦費を支辨すると云ふことは、將來を少しも當てにしないものである、と言ふことは出來ぬ。獨逸の如きは現在の財源ばかりで、將來のものはないが、他の國に於ては大體は現在の財源であるが、將來のものが少しも無いとは言はれない。

そこで戦争に使つたものは後に残るものも幾らかあるが大部分は無くなつてしまふ。後へ残つたものも、之を生産に使ふやうに變へやうとすると大分損が行く。戦費と云ふものは全部無くなるものではないけれども、大部分は無くなる。之に就て借金が殖えたと殖えないとで、何う違ふかと云ふと、戦争中には變らぬ。戦争中は獨逸も英吉利も變りはないが戦後に於ては其の關係が大變違つて来る。

獨逸は開戦以來、此健全なる増税に依て戦費を支辨すると云ふことは少しもしてない。戦争の爲に税は少しも増して居らぬ、皆借金で戦争して居る。獨逸の戦争は借金戦争である。六回の軍事公債の上り高を以て此の戦争をやつて居る。是は無論宜いことではなく不健全なるやり方である。併し借金を依ると云ふのは悉く將來の財源を當にするのみ解釋してはならぬ。増税を以て戦争をすることが、必ずしも現在の財源を以て戦争をすると云ふことにならないと同様に借金を以て戦争をすることも、大體に於ては無論將來の財源を當にして居るのであるが、悉くさうであると云へない。獨逸が借金ばかりで戦争をして居ると云ふことは、將來の財源のみを當てにして、現在の財源には少しも

依らないと云ふのではない。此の區別は極めて大切なことである。予は我國民に向つて切に此の點を力説したいと思ふものである。

今回の戦争に於て獨逸が募集した六回の軍事公債は、今まで日本で募集した所の公債或は英吉利等で今まで募集した公債とは全く流儀が違つて居つて、獨逸新發明の公債募集の方法によつたものである。最初英吉利の學者は大に之を罵り、最近まで罵つて居つたが、近頃になつては獨逸の眞似をして、獨逸の通りのことをやつて居る。是は段々公債募集が困難になつたから背に腹は替へられない。ツイ此の間まで獨逸は潰れる、あんなことをやつて居るから財政上自滅するの外はないと言つて、非常に非難して居つた方法で、如何にも變挺なやり方であるが、其を眞似し出した。其方法は公債募集の方法として、財政學上から言へば迎も話になるやり方ではないが、何しろ外國との交通を全く斷たれて、あれだけの大戦争をやつて居るのであるから、財政學にばかり拘泥して居られぬ。財政學が重いか國が重いかと言へば、それは殆ど比較にならぬ。今までの有らゆる財政學の原理を蹴飛ばしたやり方をして、國家の急に應じなければならぬ。如何なる方法を

考へ出したかと云ふと、前後六回に亘つて非常に巨額の公債を募つたのであるから、そんなに金のある氣支はない。金は拵へれば幾らでもあるがそれは金貨ではない。金は山から掘出さなければ無いから金貨ではない、紙幣である。紙幣はゴロ／＼刷つて出せば幾らでも出来る、そこで紙幣をどし／＼刷つて出したから金はある。金はあるが金があるだけででは戦争は出来ない。能く言ふことだが、戦争するには一も金、二も金、三も金、金程入要のものはないと言ふ。けれども實は金が要るのではない。戦争に要るのは軍艦である大砲である彈藥である、又其他の軍需品は金があれば得られるから、それで金が要ると云ふのである。金があつても買ふことが出来なければ、少しも金の値打と云ふものはない。富士山に登山して雨風に閉じ込められた場合に、如何に澤山の金を持って居つても何の役にも立たない。食へるもの、役にも立たなければ着る物の役にも立たない、却つて邪魔になる位のものである。獨逸は恰度富士山頂に押込められたやうなもので、金があつても外國から買ふことが出来ぬのであるから、當り前ならば逆もあれだけの戦争は出来ない筈である、疾に降参しなければならぬ。所が不思議にも獨逸は聯合國に對抗

しつゝ富を拵へて居る。そんなに富が出来さうもないが拵へるより外には仕方がないから、どし／＼拵へて戦争の入費の支辨をして居る。即ち獨逸の公債は、將來の財源も當てにして居るが現在の財源でもやつて居る。であるから、借金を以て戦費を支辨するのは將來の財源を當にして居るものであると云ふ普通の財政學の書物に書いてある事は、今度の戦争には少しも當嵌まらぬことになつた。

獨逸政府が第一回第二回の軍事公債を募集した時には、國民は其の資力を擧げて之に應じた。所が第三回目廻りになると應募する力が無くなつて、殆ど不成立に終るべき状態であつた。應募したくも國民には金がない。それにも拘はらず不成立どころではなく、五回目も六回目も相當の應募があつた。どうして資力の無い國民をして公債に應ぜしめたかと云ふと、それは借金をさせて公債に應ぜしめたのである。政府が借金をするに就て、國民には資力が無いから借金をさせた。然らば其の貸人は誰れか、借人があれば貸人が無ければならぬ。外國からは借りられない。其貸人は誰れかと云ふと政府である、詰り貸人が借人になつて借人が又貸人になる。同じ人々の間で貸す方になつたり借

りる方になつたりして居るのである。それなら何も貸したり借りたり、餘計な手数をせずとも宜いやうであるが、さうは行かない、貸したり借りたりするからこそあれだけの戦争が出来るのである。是は誰れが考へたのか知れぬが實に妙案である。人民をして借金をせしめると云ふのは、今其處には無いけれども、戦争をしつゝある間に、一方は盛に富を増させる方法である。人民をして消費を極く少くして生産を多くし、富を多く残させる方法として、訓令を出したり、説諭をしたりする位のことでは駄目だから、一方に利益を興へて借金をさせ、楽しんで首を縊らせて居るやうなものである。お前の所の豚を寄越せ、鶏を出せ、小麦を出せと言つて無理に奪つて行くと、國民は酷いことをする無慈悲な政府だと言つて怨む。そこで同じく取つて行くのではあるけれども、只でお前の物を取つて行くのぢやない、それだけお前の財産が殖えるのだからと言つて出させるから、喜んで出す譯でもなからうが、兎に角厭な顔をしないうで出す。出すと言つても現在其處に在る譯ではないから、一生懸命に拵へて出すと云ふことにする。其の日から急に心掛をして、向ふ鉢巻で小麦を作り豚を飼ひ、自分の食べるものは極度まで節して政府に運んでやる。

政府の方でも一時に要る譯ではないから、必要だけの分量が、水の流れのやうに毎日断えず入つて來れば、其れで戦争が出来るのである。

それは何う云ふ方法でやつたかと云ふと、軍事公債を募集する時に政府は銀行の動員郵便局の動員——をして、それでもまだ足らないので、小學校の教員まで動員して公債を募集した。それはどう云ふやうにしたかと云ふと、一々の人に就て、お前は愛國心があるなら第三回軍事公債に應募しろと言ふ。人民の方では愛國心はあるから應募したいけれども、第一回第二回の公債に應じてしまつて何も無い。公債の利子も取つてなければ、貯金も無いから應募することが出来ないと言ふ。それでも何か財産があるだらう、一番宜いのは外國の證券だ、亞米利加の會社の株券でもあればそれを出せ、お前は地所を有つて居るだらう、家屋を持って居るだらうと言つて、有らゆる財産を提供させ、それも無いと尙追求する。一切の金目のものを出させて、それも無くなつたと云ふことになる、今度はそれなら第一回第二回の軍事公債を有つて居るだらう、それがあれば、其の軍事公債を抵當にして金を借りて、其の金で第三回の軍事公債に應募しろと言ふ。此の規則も戦争が

始まると直ぐに出したので、戦時貸付金庫條例と云ふものである。本部を伯林に、支部派出所出張所を各地に置いて、軍事公債を抵當に金を貸付ける。そこで例へば前に發行した軍事公債の額面千麻克のものを持つて行くと、八百麻克貸して呉れる。其も金で渡すのではなく、戦時貸付金庫證券 (Kriegsdarlehenskassenschein) と云ふもので渡す。そこで其の證券を持って公債の募集を取扱つて居る銀行に持て申込む態々持て行かないでも宜い。第一回なり第二回の軍事公債を戦時貸付金庫の支部なり出張所なりへ持て行つて、第三回の軍事公債に應ずると言ひさへすれば其の場で其の手續までもして呉れる。だから何にもなくても第三回第四回の公債に應ずることが出来る。

さて千麻克の第一回軍事公債を以て八百麻克の戦時全庫證券を借り、第三回の軍事公債八百麻克に應募したとすると、結局千八百麻克の債権を得て、八百麻克の債務を負つたと云ふことになるのであるから、自分の財産としては差引元の千馬克だけで、少しも増減はない。又政府の方から見ても同様で、第三回軍事公債が成立したと言つても、新規に金が入つた譯ではない唯形が變つたゞけである。どうせどんな工夫をしたつて第三回軍

事公債の成立しやう譯はない。其は戦時貸付金庫證券で拂込だからではない。獨逸帝國銀行の兌換券を持て來ても、或は金貨を以て拂込でも同じ事である。と云ふのは金貨を戦争に使ふのではなく品物が要るのである。必要な品物が無ければ駄目だ、物さへあれば何で拂つても借金で借金を拂つても、其物が戦争に使はれることは同じである。

それなら此の第三回軍事公債と云ふものはどう云ふ意味があるかと云ふと、第一回軍事公債も、第二回第三回軍事公債も、其の償還期限は戦争のズツと後のことで、容易に返されるものでない。利息だけは拂つて呉れる。所で一方の八百麻克の戦時貸付金庫證券に對する、利子を拂はなければならぬ。其の方の利子は公債の利子から幾らか安くなつて居る。例へば公債が四分とすると、貸付金庫證券の利子は三分六厘とする。幾分か利益がある。即ちそれだけの手数を掛けることに依て、愛國心を充すのみならず、四厘の利得がある。所が同じ取られるのであるが、無理に取上げられるのではなく、喜びつゝ取られると云ふのは此處のことである。公債の償還期限は何十年かの後であるのに、戦時金庫證券の方は直ぐに返さなければならぬ。返済期限が短くなつて居る。而もそれは濟し崩

しになつて居る。恰度日本の日済貨の眞似をしたやうなものである。それも態々給料を拂つた人を使つては大變だから皆公務の傍ら、否寧ろ公務よりも其の方に多くの時間を費して居る。自分の飲み物、食べ物、減らしてまでも其金を納める。返す方も取立てる方も一生懸命である。此の返すと云ふに就ては、今自分に物がある譯ではないから、稼ぎ出すより外はない。返す必要がなければ、在るだけのものを飲んだり食つたり樂をしてしまふ。所が是非それを返さなければならぬと云ふので無理にも稼ぎ、又節し得られるだけは節して餘りを多くする。それが積り積つて戦争が出来るのである。第四回の方も第五回の方も第六回の方も皆それを繰返したゞけである。唯だ第四回時には第三回の八百麻克になり、第五回時には第四回の四百麻克になると云ふやうに、次第に遞減して行くのであるが返してしまふまでは其の人の責任は増す一方である。八百麻克だけの時には、日に三麻克づゝ返して行けば宜かつたのが、其の次には八麻克になり、十麻克になり、十二麻克になるのであるから、中々尋常では返されない。國民は何れも非常に苦しい思ひをして居るのである。

斯うして前後六回の公債を募つて戦費に充てたが、それは現に其處に在る富を借りたのではなく、詰り國民の將來の稼ぎを借りたのである。國民が戦時貸付金庫證券を借りた其の瞬間に、是からどんな苦勞をしても、一層働いて返さなければならぬと云ふ心を起させるのが公債の應募の目的であつて、其の結果が富を生じ、其生じた富によつて戦争を続けることが出来たのである。是は外國から買ふことも出来ず、借りることも出来ない獨逸であるから出来たので、他の國では出来ない。英吉利などでは眞似をしても、巧く其の眞似が出来ない。英人は前には獨逸の此のやり方を非常に嗤つて居つたが、近頃では獨逸のやり方を賞讃するものが殖へて來た。又實際に於ても、普通の公債の募集の方法では思ふやうに行かないので、銀行を利用して、此の公債の募りに應じろ、此の公債に應募するに都合が悪ければ銀行は便利に金を貸してやる。それは前の公債を持って來い、前の公債を以て來れば八掛で貸してやる、七掛で貸してやるから、其の金を以て今度の公債の募りに應じろと言つて頻りに公債を募集して居る。所がそれでもまだ足りないと言ふので、今度は戦時貯蓄證券と云ふものを發行した。是は全く獨逸の眞似をしたものだが、

獨逸の戰時貸付金庫證券のやうには巧く行かない。又銀行で融通すると云ふ位のことでは國民から十分絞れない。公債を抵當にして金を借りる或は戰時貯蓄證券を買ふと云ふことの裏には國民が食ふ物を節し飲む物を節して成べく多く富を残して戰爭に使はうと云ふ意味があるのである。而してそれは現今の獨逸のやうに苦められて居るから出来るのであるが、英吉利人はまだそれ程緊張した氣分になつて居ないから、逆も獨逸のやうに巧く行く筈はない、成功しなからうと思ふ。成功するには、英吉利の國情が一變した後でなければならぬ。然るに此の戰爭の爲に少しも困つて居らぬどころでなく、成金がウヨ／＼出来、正貨が殖えて聊か持餘して居ると云ふ日本が、又其の眞似をして、戰時貯蓄證券法と云ふものをこの間の臨時議會に出した、直ぐに引込めたが兎に角出した。是は英吉利の直譯である。如何に翻譯政治が好いと言つても、非常特別の覺悟の時に行ふべきことを、それも直接に獨逸の方の翻譯なら翻譯として少しは恕する所があるが、英吉利に一旦翻譯したものを重譯して行はうと云ふやうなことは以ての外である。急に國民に金が儲かつたから、これを無駄に使はずに、成るべく生産の方に使はせやうと云ふ

ならば獨逸の眞似ではいけない。若し獨逸が日本ならば、決して其様な眞似はしないであらう。

現に角英吉利で眞似をしたと云ふのは、少くとも獨逸の成功を證明したものである。獨逸の成功と云ふのは、詰り形は將來の財源に依ると云ふ公債の形ではあるが、其の實はさうでない。國民をして儲けたものを貯蓄させると云ふどころでなく、殆ど無から有を生ぜしめると云ふ位にしたから成功したものである。であるから獨逸は戰爭の爲に損害を受け、弱つて居るには相違ないけれども、此の大戰爭に際して戰費の全部を國民の努力に依て支辨し、外國に對して借金を貽さず、又外國に在る貸金にも手を付けなかつたら、今後の戰爭に依て國が滅びてしまへば格別、現在の程度で平和になつたならば、戰後獨逸の活動は頗る眼覺ましいであらう。之に反して聯合軍の方中にも露西亞の如きは、現在の財源も將來の財源も使つて居る、殊に將來の財源を非常に多く使つて居る。

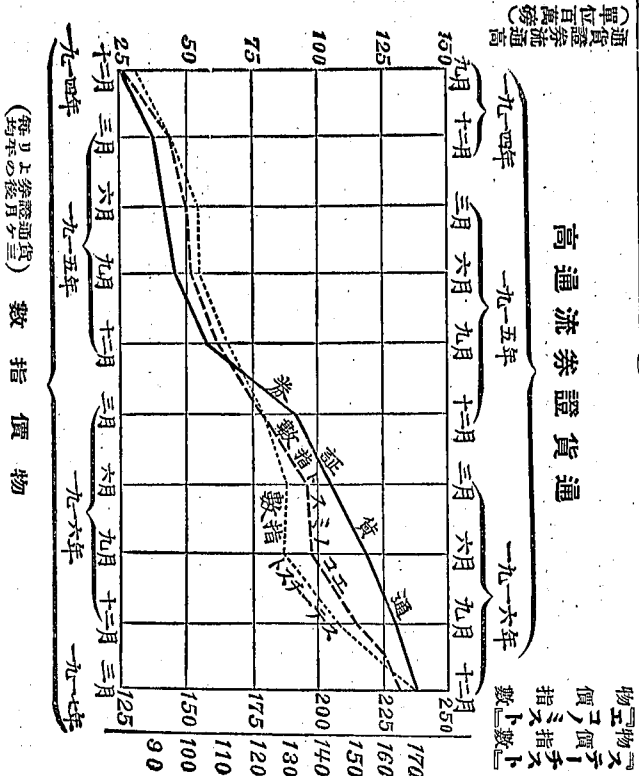
英吉利は獨逸のやうに戰爭の爲に全く増税をしないのではない、可なり増税をして居る。即ち所得税の稅率を引上げ、茶の輸入稅を高くした。此の二つは、英吉利で收入の増

加を圖る時には第一に利用する税である其他にもある。英吉利が戦争を始めてから大正六年十月二十七日までに使つた戦費の總額は五十七億九千七百九十三萬磅であつて、其の内現在の稼ぎ高で支辨したものが、即ち國家の増税で支辨したものが十三億八千五百萬磅で、残り四十四億一千二百萬磅は全部將來の財源引當即ち借金になつて居る。であるから英吉利でも心ある人は、是は政府のやり方が間違つて居る、出来るだけ現在の稼ぎ高で支辨するやうにしろ、もつと税率を高めろ、生活に必要なだけを残して、それ以上は全部取つても宜い。下層社會の所得の少い者からは取る餘裕がないから、主として所得の多い金持から取るが宜い。其の割合は一磅に付て一磅取つても構はないが事實さう云ふことも出来ないから、一磅に付て十七志、即ち二十分の十七までは取れる。無論それは平時には出来ないが、國家非常の場合に於ては餘剩のある者から多くの税を取ると云ふことは必ずしなければならぬと云つて居る。なぜ平時に於て一磅に付て十七志取ることが悪いかと云へば、金の有る人は即ち資本を作る人である。營々として物を作り出すのは國民全體であるが之を使つてしまはしないで残して置いて、生産の用に充てるか充て

ないかと云ふことを掌つて居るのは金持である。其の金持が折角残して置いたものを、平時に於て殆ど全部國家に出させることにしたならば、此等の人の貯蓄心を妨げて、富の殖え方資本の殖え方が減るから、それは宜しくない。けれども戦時は別である、それに戦争が済めば直ぐにそんな税率は廢すのである。戦争中は消費本位で、どしどし使はなければならぬから、資本として残して置いて仕方がない。即ち戦争中は貯蓄心を害する程度の高い税を取つても差支ない。どの道要るのであるから、將來のものを當てにして使ふより、今の資本が減つても富が減つても仕方がない。借金を將來に貽すよりは、今有る所の富を使かつた方が宜いと言つて居る人がある。十七志、即ち二十分の十七と云ふことは實際に出来ないかも知れぬが、十五志、即ち二十分の十五位は確に取し得る。それを取らないで唯だ借金ばかりして居ると云ふことは、將來に向つて禍根を貽すものだと云つて痛論する人もある。

戦費支辨の第三の方法は、即ち物價騰貴を以て戦費の財源に充てゝ居ると云ふことも、やはり一種の借金である。誰も之を借金だと言つて居る人はないが、結局借金である。

高通流券證貨通

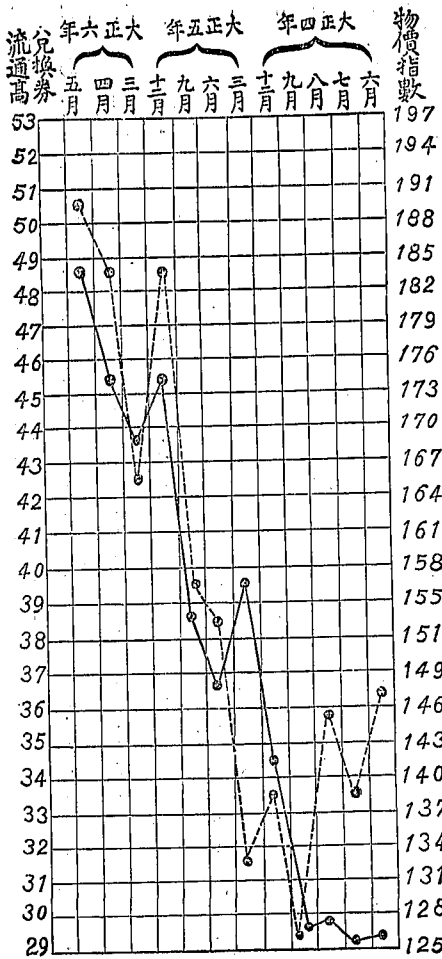


(甲表) 通貨證券の増減と物價の騰貴

是は英吉利もさうだし露西亞もさうだ。佛蘭西もさうだ。獨逸もさうだ。歐羅巴の交戦國は皆此の物價騰貴と云ふ一種の借金を以て戦費の財源の一部に充てゝ居る。さうして

(乙表)

點線 日本銀行兌換券流通高 (單位千萬圓、月末)
 黑線 日本銀行調査五十品平均物價指數 (月末)



其の飛沫を日本も受けて居る。亞米利加も受けて居る。是は受けて宜い所もあるが、又悪い所もある。歐羅巴の諸國が戦争の爲に幾ら何をして、其の爲に吾々日本人の頭の上には別に目に見えた直接の影響はない。所が第三の戦費支辨の方法たる物價騰貴と云ふことは善かれ悪かれ吾々の頭の上に影響を及ぼして來て居る。

英吉利に就てニコルソン先生の調べた表を甲表 六四 に掲げて置く（英國統計協會雜誌より取る）

日本に就ては乙表 六四 を作つて見た。

日本の物價の上り方は、平均して五割二分何厘約五割三分になつて居る。併し是はまだ輕い方で、英吉利の如きは、大正三年の七月と、大正六年の五月と比べて見ると、丁度倍になつて居る。獨逸もさう、亞米利加もさう、世界中物價は皆騰貴して居る。

此く物價が高くなつたのには、色々の原因があるに相違ない。即ち物が少くなつた爲に騰貴したのもあらう、日本の如きも外國の輸入が杜絶した爲に高くなつた物もあり、其の反對に外國に非常に行行く爲に高くなつた物もある。けれども其は今回の物價騰

貴の原因としては寧ろ小なる方で、最も大なる原因は通貨の膨脹と云ふことである。日本で言へば、日本銀行の兌換券の流通高が殖えたこと云ふことである。是は英吉利佛蘭西、露西亞獨逸、亞米利加何れも同様である。獨逸では戦時貸付金庫證券と、獨逸帝國銀行兌換券とが大變に殖えて居る。是は兌換を停止して、金貨と引換へないから幾らでも出せる。英吉利は兌換制度を維持しては居るけれども、事實は兌換に非常な制限を加へて居る。さうして一方には兌換券でない所のものを拵へた。即ち流通證券（カーレンシー・ノート）を拵へて、通貨と同様の働きをさせて居る。それが爲めに通貨が大變に殖えて來た。

金貨本位の國の通貨としては、勿論金貨でなければならぬ。所が金貨は中央金庫に入れて出さないことにし、金貨の代用をする紙だけにした。所で金と云ふものは殖やした。いだけ勝手に殖えるものではない。山から掘出すか何處からか買つて來なければならぬのだから、容易に殖えない。又要らないときには決して殖えない。餘計なものがある。と海外に出る、或は潰されてしまふ指輪になつたり、色々な細工物になつたりする。

金貨が餘り多くならないやうに自ら調節の働きをするものは、第一が内國の取付、第二が外國の取付、第三が消費取付此の三つである。其で金が多過ぎもせず、少な過ぎもせぬと云ふ働きをして居る。けれども紙は幾らでも譯なく出来る、其の代り要らないからと云つても少くならない。金ならば要らなければ外國に出る、或は指輪になつたり、色々な裝飾用にしてしまふが、紙幣では鼻紙にもならぬ。寧ろ半紙の方が役に立つ。紙幣となると、幾く澤山になつても調節の方法がない、伸縮性に極めて乏しい。だから一度膨らんだら膨らんだ切りで縮むことが困難である。紙の通貨は出せば出す程膨らむ、それを承知して居て今度の戦争では各國共に之を出して居る。其の中でも露西亞の如きは滅茶々に出して居る、戦争前の四十倍も出して居る。革命後のことは更に分らない。而もそれに對して獨逸のやうな工夫もせず、何もしないで、唯だ手當り次第に濫發し、紙で戦争をして居る。即ち各國とも紙で戦争して居ると云つて宜しい。斯くの如く紙の通貨を濫發した爲に通貨の値打が下つてしまつた。

物が殖えれば値の下ると云ふことは當然である。通貨が或る物に對して下つたのでなく、何に對しても下つたのである。戦争前は金の世の中で、通貨が一番偉いものであつた。ロムバード街を中央市場として各國が此處を取巻いて經濟を立つて居つたが、戦争が始まるや否や、金と云ふ立派なものが姿を隠して、其の代りに紙が威張り出して來た。それが非常に殖えたから、逆も以前のやうに人が尊重して呉れない。何か買はうと思つても、以前程には賣つて呉れない。米を買ふ絲を買ふと言つても、以前と同じ代價では物を賣つて呉れない。それが即ち一般の物價騰貴と云ふことである。

物價が騰貴すると、我々が物を得るに高い代を拂はなければならぬ。其の高い代を拂ふと云ふことは、取も直さず戦争の入費の一部分を脊負ふといふことである。税として取られる、或は公債の募に應ずると云ふことは、吾々が承知して戦費を負擔するのであるが、物價騰貴は取るとも言はないし、又吾々は取られるとも氣が付かない、けれども矢張り自分の飲む物、自分の食ふ物を出して戦争に使つて居ると云ふことになるのである。何となれば、今、まで十圓で買へたものが十二圓に上つた、然るに自分の給料は元の儘であつたとすれば、物價の上つただけは自分の食へ物、飲み物を減らさなければならぬ。其の減

つたものは、即ち政府が持つて行つて戦争に使つて居るか、或は成金連の暴富の一部分を形づくつて居るのである。英吉利國民が物價騰貴の爲め苦んで居る、獨逸國民が物價騰貴の爲に苦んで居ると云ふのは、戦費の一部を物價騰貴と云ふ形で取られて居るのである。税の方は是とは違ふ。税にも善い税と悪い税とあるが、兎に角民間から取立てたものは、徴税の費用を除いた以外の全部は政府の手に入る。差引かれるものが極く少い。公債は形次第ではあるが差引かれるものが税に比べると大分多い。物價騰貴は吾々國民が自分の用を節して出した高と、政府が實際に戦争に使ひ得る高とでは、其の間に非常の差がある無益の失費が多い。であるから國民所得の取上げ方としては最も不適當にして害の多い方法である。所が新に税を増し、或は公債を募ると云ふことになる、色々の故障が出る。或は少し下手にやると、國民が大騒ぎをして政府に迫つて行くが通貨を膨脹せしめて物價を高くしたのでは、國民は何とも言はない。政府から言へば寔に容易い方法であるから、英吉利のやうな極めて慎重に事をする政府であつても、之を以て戦費の一の財源として居るのである。所で此の頃日本でも米價の調節とか物價の調節とか

言つて、一部の人は騒いで居るけれども、是が日本特有の理由であるならば、それは日本だけの手段で何うにもなるであらうが、世界的の原因である以上は、やはり世界的の理法で支配されるのである。

そこで戦後是が如何になるかと云ふと、英吉利は今の三つの方法の中でも、大部分は借金を以つて戦争して居る。今の値の下つた金で借金して居るのである。所が戦後此の公債の償還をする時分には貨幣の値が上る。戦前程にはなるまいが、兎に角物價が今より下つて、貨幣の價値が上るに相違ない。其の時に償還するのであるから、今の公債の募りに應じた者は、安い金で貸して高い金で返して貰ふことになる。呼値は同じであるが一磅なら一磅に對する購買力は多くなつて居る。所が獨逸のやり方のやうに、全體の國民から無理に絞つて取つたのは、結局自分達が拂つて自分達が取る。利子の支拂も元金の償還も、政府の収入を以て政府が拂ふのであるから、それを受取る個人々々には多少の相違があるとしても、國民全體の上から見ると同じになる。然るに英吉利の如く資産を多く有つて居る者が主として公債の募りに應じ、下層の者の應募して居る割合が非常に

少いと云ふ場合には、國全體の上からは出入は同じであるが、人に依て大變遷ふことになる。戦後下層民の働いた公債を有つて居ない者の働いた高い金を取つて、利息を拂ひ元金を償還すると云ふことになるのであるから、貧乏人が骨折つて働いた金を以つて金持に返すと云ふことになる。従つて貧富の懸隔を益々大ならしめることになる。況んや英吉利は是まで資本が潤澤で、外國に貸してあつたことも非常に多かつたが、戦費として國內の富も消費し、又外國に貸付けてあつたものは回収したりしたので、資本の在りは非常に減つて居る。資本は減れば減る程金利が高くなる。金利が高くなれば、労働者の勞銀が下る。勞銀が下つた時に於て、労働者は高い税を取られ而して、其の税は金持の所へ、或は利子となり、或は元金となつて支拂はれる。即ち貧乏人から取つた金が金持の所へ行くと云ふことになるのであるから、戦後に於ては、此は餘程の變調を持來すことになるは疑を容れないことである。

貧乏人から取つた金を金持にやると云ふことになる、茲に社會主義の思想が勢力を得るやうになると云ふ懸念がある。此の點は英吉利が最も憂慮すべきであつて、佛蘭西

も略々同様であるが、英吉利程ではない。獨逸に至つても、其の憂がある。

今日の有様から考へても、戦後に於ては國民の所得の分配の割合が大變に變つて來るに相違ない。其の場合に如何に富が流通するか、流通の仕方も今までとは餘程變つて來る。良くなるか悪くなるか分らぬが、兎に角流通本位の經濟になると言つて宜い。其の時に之を巧く處理することが出來れば、戦争で受けた創痕は意外に早く恢復する。十年も二十年も掛りはしない。けれども若し其の處理が悪いと、何年経つても恢復が出來ない。さうして其の恢復した資本は、必ず生産資本になるであらうが、それに就ても、其の移り變りの時に色々面倒の事件が起るに違ひない。戦争の爲に變つた所のものが、各々其の途を得るまでは、經濟界がガタ付く。或は非常に景氣が好くなつて、事業が勃興するやうにもなるであらうし、其の勃興も健全なる土臺の上で起つたものでなければ、又バタバタと倒れる。恐らく普佛戦争後の獨逸どころではなく、餘程大きな變動が來るに相違ない。若し歐羅巴が非常な亂調子になれば、日本にも自ら影響が來らざるを得ない。現に通貨の膨脹物價騰貴の影響さへ及んで來て得る位であるから、戦後に於ける變動も必ず

日本に及んで來るに相違ない。此間に處して若し我邦がボンヤリして居つたならば殆ど挽回すべからざる苦境に陥るであらうし、處置宜しきを得れば將來益々福利を増進するであらう。此點は今から十分に考へて置かなければならぬ。此れが即ち戦後に於ける經濟生活改造の機運を語るものである。然らば其改造は如何なるものたる可きか、其は自ら別の機會を待つて論じたいと思ふ。

|| 大正六年五月稿同八月信州伊那教育會講演速記 ||

二 金の經濟と物の經濟

一 英國經濟政策の破綻

英國最近の經濟状態を見るに、全く從來の政策施設を抛棄して、今や事々物々獨逸の執

り來れる經濟政策を模倣するに至つたのである。例へば其の食料政策の如きも獨逸と同様の施設をなし、食料長官なるものを置き、食料の分配代價等を調節制限する方法を採るに至つた。從來獨逸の政策施設を罵倒嘲笑して居た英吉利が、今や其の罵倒し嘲笑した所の政策施設を、其の儘模倣するの已むなきに至つたのは實に天下の奇觀ではないか。實に英吉利は開戦以來、總ての方面に於て、從來誇りやかに執り來つた其の政策を變更して、之れを獨逸化せしめねばならぬ必要に迫られたのである。此の英吉利の獨逸化の新しい一例として、予は英吉利近時の軍事公債の募集方法が、全然獨逸式に依つて行はれて居ることを見出し得ぬのである。即ち最近に至る迄、罵嘲して居た獨逸の公債政策を自ら模倣せざるを得ぬ場合となつたのである。此れ等の事實、即ち英吉利の獨逸化と云ふことは、實に英吉利の經濟政策の破綻を物語るものである。

斯くの如く自國の採れる政策制度が、最も進歩したるものであり、最も健全なるものであり、以て他國に範とせしむるに足ると自負して居た英吉利の政策制度は、今や大革命新を施さねばならぬ時機となつたのである。現今に至る迄、英吉利の貨幣は、ポンド、シリリング、

ペンスと云ふが如き十進法に依らざる非文明的方法を以てして居る。然るに此頃に於て英國の實業家政治家學者等は此の貨幣制度の弊害に晚くも氣付いて、之れをポンド、プロリン、ミル即ちポンドの十分の一はプロリン、千分の一はミルとする十進法に變更せよと力説して居る者がある。或は又亞米利加のドルを採用せよと唱へ、而して其は度量衡にメートル式を採用する前提たらしむ可しと言つて居る。斯くの如く從來は國自慢であつた政策制度を、今や改革しなければならなくなつた英吉利の最近の事情に因るも、時勢の變を知るべきではないか。然るに我邦に於ける英吉利心醉者は、今猶ほ舊き英吉利の政策制度を以て、此の上もない最高最上のもので考へて居るのは、寔に迂遠千萬と謂はねばならぬ。殿様の言動が絶對性を持つて居た舊幕時代に於て、殿様の爲す事云ふ事は何事でも善良であると考へて、殿様が跋を引けば臣下の者共も跋を引いて歩くこと、を、此上もない自慢と心得るやうなもので、其の愚や憐殺すべきである。英吉利が世界に横行闊歩して居た時代ならば、或は英吉利本位で遣つて行かねば不都合の場合もあつたが、今次の戦争に因つて英吉利は少くとも其の世界的中心たる地位を減縮せられたのは疑

ふべくもない。此の時機に方つて猶も英吉利の眞似をして行かうとするは、愚昧の至りである。我邦の英吉利化は實に甚だしい。我邦從來の制度を以てした方が餘程便利である場合にも、態々煩瑣な英吉利式を採用して居る。例へば鐵道の如きも、メートル式か又は日本尺を採用した方が簡易であるに拘らず、マイル、チェイン、リンクを用ひて居る。英吉利が此れ等の制度の煩瑣にして不便なるを感じ、今や之を改良せんと志して居るのは英吉利が其れだけ賢明になつた證據で、英吉利の爲めに慶賀すべきことである。而して公債募集方法の改良の如きは、賢明になつたもの、中に於て著しいもの、一である。

二 英國の『貸付金庫』の利用

蓋し獨逸に於ては開戦以來、五回の軍事公債の募集を行つた、想ふに今頃は第六回の募集に着手せんとして居る事であらう。而して第四回迄の公債應募の状況を見るに、回を重ねる毎に其の應募人員に於ても、其の應募金額に於ても、増加するの結果を示し、而して割合に少額の應募者が増加するの傾向を呈して居るのである。第五回目に至つて其の

應募成績は稍々不良の徴候を示した。是れ疑ひもなく獨逸の疲弊困憊せる事を表明するものであるが併し小口應募即ち二百マーク以下の應募者は依然として多數を占めて居る。斯る好成績を齎す所以は獨逸の巧妙なる政策に基くのであつて即ち『デーリー・ス・カツセ』貸付金庫を利用するのである。英國は獨逸の此のやり方を嘲つて、右の手で奪つたものを左の手で與へるやうなものであると云つて居た。實際獨逸の此の政策は所謂伊勢詣りのひぢきのやうなやり方であることは吾輩の屢々公言した所である。されば英國の經濟學に養成せられた人々は此の獨逸式のやり口を極めて排斥してゐたのである。貸付金庫を利用すると云ふのは例へば何億圓かの公債を募集して得た金を、次ぎの公債募集に利用するのである。即ち人民に資金を貸付て應募せしむるのである。第一回の時にAなる人間が五百マークの公債を引受けたとして、其のAと云ふ人間は第二回の募集の際には百マークだけしか募集に應ずるの力がない、是以上の餘裕がないとすれば、五百マークの第一回の公債を抵當にして、六掛けか七掛け位で金を貸してやる、五百マークの七掛けであるから三百五十マークを貸す。此の借りた金に百マークを丸へ

て四百五十マークの應募をなし得ることになる。第三回目には四百五十マークの公債を抵當に取つて應募の資金に充てしめる。第四回も是れと同じ方法を採用して、人爲的に人民の應募力を作つて應募せしめるのである。蓋し此のやり方は永久に持續せらるべき可能性を有つて居ない。故に斯る公債の募集方法は大いに戒慎すべきであることは云ふ迄もない。されば英吉利では獨逸の此やり方を罵嘲して居たのであつたが今や英國の銀行家政治家經濟家乃至は新聞雜誌は、此獨逸式の方法を唱道するに至つた。ロンドン・エコノミストやステート・テストの如きも力を極めて之を推奨して居る。或る論者は獨逸式の此の方法に反對して、人民に金を貸して、其れに依つて公債に應募せしむるが如きは二重の手數が要る。それよりも銀行の預金を直接政府へ廻して、銀行と政府との間に貸借關係を成立せしめたならば可いではないかと云ふものがある。之れに對して今日の英吉利の金融經濟學者等は、銀行から直ちに政府に貸さないで、人民の手を潜ると云ふことに意義がある、新らしい富は其所に生ずるのであると言つて居る。思ふに人民に借金をさせることは、人民をして何彼につけて儉約せしめる事になるのである、公債の償

還は概して長期であつて其間は政府より人民へは金を還さぬ。所が銀行は人民へ貸付た金の返済を迫る、無理をして貸付けられた金であるから、人民はおいそれと金を銀行へは返済が出来ない、どうしても冗費を省き、身を儉素に守つて行き、以て借金を返済する方法を講じなければならなくなつて来る。即ち結局國民に強制的儉約を行はせる事となるのである。獨逸の公債の募集の方法は斯る手段を以て講ぜられて居る。これ實に國民節約野戦を間接に行ふものである。英吉利國民は贅澤な生活に馴れて居るので、戦争に當つても中々其の贅澤が止まぬ。自分の金で自分が贅澤をするのに何んの悪いことがあるものかと云ふやうな氣持で居る。之れには英吉利の爲政家は閉口する、そこで何うしても獨逸の眞似をして強制的に國民を質素に生活せしめるやうな方法を講じなければならぬと考へた結果、公債の募集方法を貸付金庫に因つて行ふことにしたのである。之れも英吉利の獨逸化の著るしい事實である。

三 『金の經濟』より『物の經濟』へ

英吉利は今次の戦争の勃發するや、異口同音に獨逸の軍國主義は、世界の平和を攪亂するものである、人道の敵は實に獨逸である、されば獨逸の軍國主義を破壊して、平和擾亂の種子を根絶せしめねばならぬと教團いたのであるが、獨逸を破るところか實際は其の反對に英吉利が獨逸の政策制度施設に征服されて了つた形である、即ち英吉利は日一日プロイセン化して軍國主義を濃厚にして行くばかりである。所謂ミイラ取りがミイラになつたのであつて、英吉利當初の云ひ分を思ひ浮べると滑稽の至りである。故に英吉利人の中には、縱令戦争には負けても構はないから、英吉利は何所迄も英吉利の特色を發揮して、プロイセン化せぬやうにせねばならぬと憤慨して居る者もある。そして英吉利人は今回の戦争は全く義戦である、人道の爲めの戦ひである、平和の爲めの戦ひである、白耳義が中立を犯され悲惨な運命に陥つた、ために戦つて居るのであると稱して居るが、これは殆んど荒唐無稽の空言であることは智者を俟つて後に知るを要せぬ。今や英吉利人の中にさへ、前言の空言であることを告白して居る者さへあるではないか、經濟學大家のエヂワオールスなども公言して居るのである。之れで幾ら外國人を瞞着しやうと思つ

ても駄目である。然るに我邦の識者の中には、今尙眞面目に英吉利の戦ひは正義の爲め人道の爲め平和の爲めなどと思つて居る英吉利に化かされて居るにも程があると云はねばならぬ。斯くの如くにして英吉利の表面上の戦争の理由即ち平和人道の爲めと云ふ理由は立たなくなつて了つた故に表面から云へば英吉利は其の戦争の意義を失つたのである。之れは英吉利として残念千萬の事であらうが、我々から見れば結構な事である。其だけ英吉利は國家として賢明になつたものだと謂へるではないか。元來英吉利人は個人主義功利主義の國民であるから、公に奉ずると云ふ精神に乏しい、此の點に於て獨逸人は數等優つて居る、此の私を捨てること云ふ精神の旺盛なことは實に獨逸の強味であること云はねばならぬ。英吉利が後ればせに變則的に獨逸の眞似をするに至つたのは英吉利が覺醒し改革の機に入つたものであつて、之れを喜びこそすれ、決して悔むには及ばない。

以上は英吉利のプロイセン化の一例に過ぎぬのであるが、總ての政策制度に於て、英吉利は従來自慢にして居た自國の政策制度を抛棄するか、若しくは改革しなければならなくなつたのである。之れを經濟上から見れば英吉利本來の『金の經濟』が意義を失つて、『物の經濟』にならねばならぬと云ふことになつたと云ひ得るのである。即ち英吉利の『金の經濟』主義は國家の存立を全うして行く上に於て完全なるものでないと云ふことが暴露された、『金の經濟』主義は覆滅崩壊したのである。之れに代るに獨逸流の『物の經濟』主義を以てするの氣運に赴いて來たのである。

四 『金の經濟』の組織缺陷

『金の經濟』は總てのものを金に替へて見る金を中心として總ての仕事仕組が行はれる。故に『金の經濟』に於ては、金に現はれた需要のある物は生産される眞に需要があつても金の利益の少いものは生産されない。富者の贅澤品の如き物は利益が多いから盛んに生産されるが、貧者の生活の必需品は利益が少いから、比較的閑却されると云ふ傾向になる。此の事に就ては河上肇博士が其の近著『貧乏物語』に於て甚だ趣味深く説明して居られる。勿論『金の經濟』には長所のあることは否まれぬが、然も其の弊害に堪へざ

る事が夥しいのである。予が近著『國民經濟講話』本全集に於ても詳説して置いた通り、國民經濟なるものには主體がない故に統一的に意思を定め、一定の秩序や計劃を立て、やると云ふことがない。之れが爲めに河上博士の云つて居る通り、生産と云ふことが甘く調節され按配されない、金持の贅澤の爲めに貧乏人に取つての必需品の生産力が減殺される様な傾向を呈する。されば富者は或る程度以上は其の贅澤を止める丈けの自制心があつて欲しい。併しながら之れは望んで實行し得らるゝ事は先づ以て困難である。今日の經濟組織に於ける缺陷は實に富者の満足を充たして貧乏人の満足を充たすに缺くるの憾みある事である。今日では生産はデスポーニブルキアピタルが左右して居る。富者が生産品の種類なり數量を決めて居るのである。英吉利流の『金の經濟』組織は此の弊害を甚だしく發揮して居る。

五 資本侵略戦の時代

今次の大戦の原因を世間では種々の方面に求めてゐる。勿論戦争を惹起せしめた原

因又要素としては政治上のこともある經濟上のこともある。併しながら、それ等のことを以て主要原因と見るは淺薄である。其の主要なる原因は英國のキアピタル・マグネート即ち資本閥が其の最高の利益を獲得せんが爲に反目確執した事に存して居るのである。即ち新興の獨逸の資本閥が現状を打破して、世界に覇を唱へんと欲する意志と英國の資本閥が現状を維持して依然として世界の金權を自己の獨占たらしめんと欲する意志との衝突である。資本閥の争覇戦——之れが今次の大戦の真相である、少くとも其の主要素で英獨間の感情上の反目が之れに伴つたのである。

惟ふにトレードプロフィットの時代は去つた。今日迄は自國生産の商品を外國へ輸出して、以て利益を得んとして争つたのであつたが、今や貿易に因つて利益を獲得せんとする時代は去つて代りに資本を投下して資本利益を收めんとするの時代となつた。従來は商品の賣買に因つて利益を擧げたのだが、今は資本投下によつて利益を收める時代となつた。従來は販路の争奪即ちトレードウオーアであつたが、今やキアピタルウオーアの時代に推移したのである。『金の經濟』を以て唯一の最上のものと考へ、且つ之れに

依つて世界の金權を倫敦に集めて居る英吉利が、今次の戦争に因つて財政困難を感ずるに至つた。於是乎、英吉利は證券動員を行はなければならなくなつた。證券動員とは、英吉利の資金が外國の事業に投じてあつたものを本國に引上げる事である。即ち外國に投資せる金を英國に回収するのである。英吉利の金網は世界の到る所に張られて居る、其の張られて居る金網を引上げたのである。惟ふに戦後は此の金網を恢復し、又は新たに張るに付て激甚なる競争が惹き起るに相違ない、英吉利は從來の如く、其の金網を張つて行かう、撤去した所は之れを回復しやうと努める、獨逸は自國が取つて代つて此の金網を張り、其の經濟的勢力を伸張して世界の金權を自國に集中せしめんと努めるであらう。慾と慾との衝突資本と資本の侵略戦となるであらう。

六 新局に處するの道

併しながら戦争前途の英吉利の經濟政策は、決して完璧なるものでない、大なる缺陷があると云はねばならぬ。先づ自國の内部を強固にした上で、海外發展をなさねばならぬ。

英吉利の政策は此の點に於て、非常なる缺陷があつた、大なる過誤を有つて居た。獨逸には此の缺陷が少なかつた。之れ獨逸が四方に敵を受けながらも、能く其の困難苦痛に堪へて居るのみでなく、今日までは進んで攻勢的態度に出で戦局の上に於て有利なる地位を獲得せる所以である。之れに反し、英吉利に於ては、『物の經濟』が『金の經濟』になつて居た、食料品も兵器も悉く『金の經濟』になつて居た、世界の到る處に植民地を有し、日没なき大國として誇つて居た國が戦争以來は食料品の缺乏に困却するに至つた。是れ實に『金の經濟』の弊所短所を暴露した者である。勿論金の經濟なくして、『物の經濟』のみで行かうとするは、今日の文明生活から推して一のユートピアであるが、『物の經濟』を無視した『金の經濟』は確かに畸形物である。今次の戦争に因つて英吉利が其の誤れることを痛切に感知し、『物の經濟』に注意を拂ふやうになつたことは、英吉利の國家存立の上から見て悦ぶべきことであつて、決して悔ゆるには及ばないのである。且つ一般の國家人類も、今迄は是が非でも英吉利の政策が絶對無上のものであるかの如くに考へて居たのが、今次の戦争に依つて大なる教訓を得、其の經濟の立て方に就て深く考慮を拂ふやうに

なつたのは賀すべきことであると云はねばならぬ。されば我々は此の教訓——眼前に開展され提供された活事實を研究し之れを利用して國家存立の上に適切なる政策を施さねばならぬ。今日迄我邦は無闇に英吉利の文物制度に心酔し、一にも英吉利、二にも英吉利英吉利の眞似さへして居れば國家の興隆は疑ひなしと思つて居たのが、今度の戦争に依つて其の誤れる事が分つて來た之れは我邦に取つては寔に喜ぶ可き事である。我々は進んで此の經驗を利用せねばならぬ時期に到達したのである。然るに我邦の現状を見るに成金が出来たとか在外正貨が増加したと云つて夢中になつて恐悅して居る。今日は其んな事に有頂天になつて居る秋ではない、國民經濟の大本を確定し、内には國力を充實せねばならぬ秋である。

『金の經濟』は自然の勢であるが、今日迄は其の當否を考へなかつたのである。社會主義の主張する所は、今日では一種の空想である出來ない相談である。しかしながら、此の戰の爲めに『物の經濟』の重要なことが分つた。『金の經濟』を固執して居た英吉利も、『物の經濟』に降伏せざるを得なくなつて獨逸化するに至つた。従來は空想として斥け

られて居た問題が、近き將來の問題として考へらるゝに至つた。是れ實に重大なる問題ではないか。立憲だの非立憲だの政黨だの官僚だのと云つて、空なる騒ぎをやつて居る時代ではない。政黨も官僚も政府も國民も、力を合せて此の新らしく打開せられた局面に處して行くの方法を講ずるのが當面の急務だと思ふ。其れには獨逸が減んでも日本は少しの得もしない如く、英國が減んだとて日本には別に損はないと云ふことを、先づ頭に置いて一切萬事を新らしい目を以て能く考へることを要する。

|| 大正六年五月『日本評論』掲載 ||

三 戰時經濟の一福音

茲に戰時經濟と名附くるは、主として交戦中にある國の國民經濟の事をいふのである。更らに適切に言へば、軍國經濟と呼ぶべきであらう、英語でエコノミックス・オブ・ウォー

(Economics of war) 獨逸語でクリーグスヴイルトシヤフト (Kriegswirtschaft) である。我邦の如きは假令聯合國の一であるとはいへ、戦時經濟を營み居るとは言へない、無論戰爭により影響を受けて居るけれども、現に交戦しつゝある國とは趣を異にして居る。亞米利加の如きも亦同様で、支那も愈々戰爭に参加することゝなつても、是亦適切なる戦時經濟に入るのではない。何となれば、英佛獨逸露伊の如く現に交戦中にある國の經濟状態は中立國と異なるは勿論、日米支の如き國とも亦違つて居る。即ち今世界の表には三種の國民經濟が存して居るのである。第一は純然たる平時の國民經濟であるが、之れは殆んど無いと言つても宜しい、第二は戰爭により大なり小なり影響を受けて居る經濟状態である、第三は茲に言ふ戦時經濟である。

戦時經濟は特に著しき特色を帯び、單に戰爭により影響を受けて居るといふが如きものにあらずして、殆んど歴史上未曾有の變化を來したものと云ふ事が出来る。今より百年前の英佛戰爭に於ても、戦時經濟状態は現はれたけれども、當時は規模小なるが爲め其の經濟上に及ぼす影響も今回に比すべくもなかつた。二十世紀に於ける經濟界の發達

は歴史上殆ど其の比を見ない位である。今其の特色を説明すれば、先づ經濟には平時戰時を通じて異なる特色を帯べる二種ある事を明かにせねばならぬ、即ち『物の經濟』と『金の經濟』である。吾々の日常生活は『物』に於てすると同時に、『金』に於ても經濟を立てゝ行かねばならぬ。一個人でも町村でも府縣でも、大にしては國の經濟でも、植民地の經濟でも、常に物と金の兩方面を備へて居るのである。其の一方が具はつたからとて萬全なりと言ふ事は出来ない。兩方面とも充實しなければ圓満なる經濟は成立しないのである。例へば我邦に於て五千萬石の米を生産するとして、此の五千萬石を如何に分配し貯藏するか、何處へ何程を輸出するかといふことは、一面物の經濟であるが、又同時に金の經濟を呼起すのである。米價一石四十圓とすれば五千萬石は二十億圓、五十圓とすれば二十五億圓である、其の二十億なり二十五億なりの金高が如何にして定まるかといへば、第一米の價格の高下に依るのであるが、價格は大體に言へば需要供給の關係に基くけれども、仔細に觀察すれば社會各種の原因が綜合して居ることが判る。今日に於ては米を澤山作りたりとて、必ずしも其の人が富めりと言へず、又經濟安全なりとも言ひ得ない。

國に於ても亦同様に五千萬石が六千萬石になれりとて、之れを以て直に富力増進したりと言ふ事は出来ない。即ち物の經濟に於て成功したればとて、價格が之れに伴はなかつたならば富力を増したとは言はれない。適切なる例を言へば英國昨年の貿易高は金高に於ては一昨年に比し増加して居るけれども、物の數量に於ては却つて減じて居る。之れは戰爭により物價が著しく騰貴した爲めである。此事は戰時經濟に取りては最も重要な點である。此一事で略々明瞭なりと信するが、戰時經濟の特色は金の經濟が重要を減じ、物の經濟が重要を加へた事是れである。二十世紀の經濟状態は此の戰時經濟と全然反對に進みつゝあつた。殊に英國の如き萬事金の經濟の支配する處であつた。單り英國のみならず、何れの國も金の經濟が大勢力を持ち大發達をなして居つたのである。獨逸如何に強しと雖ども、英國の富力は優に之れに對抗して餘りあるを得べしとは英國の金の經濟を以て獨逸の物の經濟に對抗し得るの意味であつた。英國人は餘程先見の明ある人にて、金の經濟が今日の實際狀況を呈し、様とは考へなかつた。英國の金の經濟に養はれて居つた頭では無理もないことではある。併しながら之は非常な失策であ

つた金の力の案外小にして物の力の非常に大なることは、流石の英人にも明瞭になつて來た。之れを以て獨逸思想にかぶれたと言はれても辭する事は出来ない。今日英國に於て計劃されて居る各種の事柄は殆んど獨逸の跡を逐うて居るのである。獨逸は戰前は勿論其後も常に一歩づつ前きに物の經濟の處理を進めて行つた。英國は絶大を誇る富力あれど、之れは物の力にあらずして金の力である。金が萬事を支配する時代に於ては可なるも、今日となりては其の所謂富力は極めて薄弱となつて來た。金が如何にあつても、其れのみでは甚だ不足を感じざるを得ないことになつて來た。ロイド・ヂョーヂは「獨逸の砲彈に酬るにはチェツク（小切手）を以てすべし」と云へるが、之が英國の弱みである。平素ならば直に肉に代へ彈丸に替へらるゝも、今の戰時經濟に於てはそれは出来ない。斯の如くにして英國は平素の國是として固守せることを片つ端から棄てなければならぬ事となつた。自由貿易主義を放擲し遂に國民節儉野戰或は戰時節儉運動といふものを初めて國民に向つて極端に物の節儉を勸説して居る。殊に外國輸入品の使用を極端に制限すべきことを唱へて居る。普通節儉と云ふは金の儉約である

が、今の英國のは金を使ふなといふにあらずして、物を使ふなといふのである。アスキスの令嬢が盛大なる結婚式を挙げたことに對して、有識者は之れ即ち國民節儉野戰を無効に終らしむるものであると論じて非難して居る。

又英國が軍事公債を募る場合には、成るべく之れを銀行に仰がずして、國民の微細なる資金を集むる方針を取つて居る。之れ必ずしも銀行に資金乏しきが爲めではない。各階級に亙りて公債を募るときは、自然國民全般の節儉が行はれるからである。最近六百萬人が公債に應じたるに對して、非常に喜んで居るのは此の意味である。之れに反して獨逸は物の經濟には出來得る丈けのことは疾くに遣つて居る。四面敵を受けながら今日尙ほ滅亡せざるは物の經濟に力をそゝいで居るからである。無論無い袖は振られぬ。いから永久に續くことは出來ない。現に尠なからず疲弊して居ることは争はれぬ。獨逸にては敵兵の死骸を絞りにて油を作つて居るといふ倫敦電報があつたが、之れは眉唾ものである。如何に獨逸人が非人道的なりとて之れは容易に信じ難い。恐らく馬匹より油を取つて居る位の事を誇張した報道であらう。道德上の是非善惡は別として、如何

に獨逸が物の經濟に最善の努力を盡して居るかを想像することが出来る。要するに戰時經濟に於ては、平時に於て重要視される金の力が案外役に立たず、之れと反對に物の力が如何に重要なかを痛切に感ぜしめて居る。

扨て此の戰時經濟は戰後には果して如何になるであらうか。講和成立後は直に元の金の經濟に其儘復舊するであらうか。斯く苦しき教訓を受けた實物教育が痕跡も遺さず、戰前に於ける金力萬能の經濟に戻らうとは信じられぬ。金の經濟は誠に心細いものである。金の經濟の頼み難きことは、其の本家本元たる英國人自ら最も著しく學んだのである。今日迄進歩した經濟總ては金を本位として立て、來たのである。生産も流通も總て金が本位であつた。之れを司るものも、金力即ち之れ權力であつた。自由競争の時代に於ては全く金權萬能であつた、之れには非常に善き點もあれど亦惡しき點もある。之れを救済せんとて識者間には研究もされたのであるが、何分にも金權強く如何とも爲し能はなかつたのである。金の經濟には一方に於て非常な無駄が行はれて居つた。金の有る者は人生に何等必要もなき贅澤品に巨費を投じて、何等の非難も受けず、之れ

と反對に日常の生活にすら苦しむ者は非常に多數である。國の經濟の立て方でも金本位なりし爲め心ならずも無駄をして居ることが幾らもある。斯くの如くにして止まらなかつたならば社會の將來は實に慘澹たる時代が來るであらう。

戦争は一大慘禍なると共に一大幸福を齎したとも云ひ得る。何となれば物の經濟が如何に重要なかの實物教育を示したからである。之れを善用せば人類社會を益すること決して尠少ではない。殊に下層社會は著しく緩和されることが出来る。貴族が身を下して職工となることは英佛等に於て聞く處なるが、而も彼等は實用に適せず、平素厄介視されて居る下層社會勞働者階級が如何に重要であるか、證據立てられた。此の實物教訓によりて金權萬能の勢を著しく殺ぐことが出来ると思ふ。而して講和後英國が全然金本位の經濟に復舊せず戦争によりて得たる尊い教訓を利用して物の經濟に亦重きを措くに至るのであらうと思はれる。然らば我邦は如何であるか我邦は云ふ迄もなく戦争状態ではなく、従つて物の經濟の重要なことを痛切に感ずる事がない。否所謂戦争成金なる者出で來り、益々金權萬能の勢を長じ來つたことは誠に憂ふべきである。

英佛は戦争には苦しめるも將來幸福を齎すべき貴重なる實物教訓を受けた。我邦が戦争の爲め遺憾なく其の弱點を暴露せる金の經濟に益々深入りする事は危険千萬である。我々は深く反省するを要する。

大正六年六月十五日『臺灣日々新報』掲載

四 戦後の經濟界に於て眞に恐る可き事は何

此度の戦争は經濟上に種々の變化を齎したが、其終局後に於て——否な現に戦局中に於ても——眞に恐る可き事は何であるかに就て、我邦の論者の論ずる所我輩の承服し

難いものが多々ある。新聞雑誌の求める儘に別に考へを旋らさないで、當座の思ひ付きを公表することは無用なるのみならず、有害であると云ふ一の好證左として、吾輩は數多き戦時經濟談を擧げねばならぬと信ずる。論者はメノコ論から盲斷して曰く、此度の戦争は人命を損ずることも莫大であると共に、歐洲の富歐洲の資本を費消し盡くしたことに實に空前である。従つて戦後の歐洲經濟界は資本の缺乏に苦しむであらう。起るべき生産も資本の缺乏の爲めに起らず、而して其恢復は十年や二十年を期して待つ可きではない。或は五十年百年を要するであらう、是れ實に戦後經濟界に於て最も恐る可き事であると。而して獨逸に就ては特に此恐れ大なりとし、獨逸は戦争の上に於て如何なる成效を收むるとも其富力の上に受けた打撃は實に甚大なるものであるから、戦後長い間經濟上の發展を沮まれ飛躍を爲すこと能はず、英佛米の爲めに壓倒せられるであらうと。今吾輩を以て見るに、此論程の愚論は減多にないのである。

二

第一此種論者は十九世紀の舊經濟觀たる資本萬能主義の夢想を脱せぬものである。生産の効程は常に既存資本の額によりて定まる *Industry is limited by Capital* と云ふジョンスチュアートミルの謬論から覺めぬものである。第二に此種論者は經濟界は活物であることを忘れたものである。成程資本なくして生産が起らぬことは言ふ迄もない、併し乍ら資本と云ふものは資本なる固定態を取つて存して居るものでない、一國の資本は限定せられた或物ではない、否資本と云ふ具體的な物があるのではない。有るものは富である、其富の中或ものが生産營利に於て或る用法に向けられるときに始めて資本となるのである。生産が資本によつて限定せらるゝよりも、資本は生産の必要によつて或は増され或は減ぜられるのである。資本に對する必要大なるとき、具體的に云へば、資本に對する需要が大にして、利子率と利潤率と（或は其一丈けが）が高いときは、今まで資本たらざりし富も資本となる。其反對に資本に對する需要減ずるときは、今まで資本として使用せられた富も資本でなくなつて仕舞ふ。而して資本となる可き富も一の流れの如きものであつて、決して不動の固定態にあるものではない。直ちに消費することの要大

なるか、又は直ちに費消する方が國民經濟的限界餘剰大なるときは、富として保有せられるものは少くなる。其反對に直ちに消費するよりも、富として保有し又は進んで資本として生産に投下する方が國民經濟的限界餘剰大なるときは、富従つて資本は其瞬間に於て増加するものである。決して一定不易に富又は資本の高が限定せられて居るものではない。經濟界は絶へず限界餘剰價値の活則によつて支配せられ居る活物である。資本も此活則によつて支配せられて、絶へず時々刻々に或は著しく増し、或は著しく減ずるものである。國民資本と云ふが如き固定の大きさのものは決して存するものではない。是れが最近の經濟學理の打勝得た眞理で、ミル一流の資本觀の一擲せられた所以である。

三

従つて戰爭中資本の減少したのは事實に相違ないが、戦後何十年間も減少した儘で續く等と云ふのは、經濟界の通則を少しも知らぬ人の言である。我々は左様なる幼稚な愚説に迷はされてはならぬ。況んや戦後五十年も百年も資本の缺乏に苦しむ可し等と論

するが如き、馬鹿らしくて挨拶も出来ぬ次第である。資本の増減は人口の増減と同様である。否、人口の増減よりも速かに働くものである。此度の戰爭で何十萬かの人命を損じたから、戦後二十年も三十年も歐洲は人口の少きに苦しむ可しと主張する人があつたら、其人は馬鹿者の稱を直ちに下されるであらう。戦後歐洲の出生率は必ず増進すべきこと、今より逆踏することが出来る。戰爭の爲めに起つた人口の減少は、或度まで——或は全部——此の如く戰爭の爲めに減少した歐洲の富歐洲の資本は、必ずや戦後生産率の増進資本形成力の増進の爲めに、或度まで——或は全部、或國にては戦前の状態を超越するまでも——補填せらるゝと考ふ可きである。唯其十分に補填せらるゝ迄には多少の日子を要する。然し其は決して甚しく憂ふ可きこと、甚だしく恐る可き事ではない。減少した資本を以て行はるゝ生産は生産能率——企業能率、労働能率、土地收穫率——の増進を惹起すに相違ない。資本減少の迷惑は相對的たるに止まる。英國に於けるより獨逸に於ける方資本の減少が大なるときは、其相對關係に於て獨逸は苦しむ。何となれば獨逸に

於ては英國に於けるより資本に對して高き報酬を拂ふことを要し、其れ丈け生産費を高めるか、又は勞銀利潤の分け前を減ずるかせなければならぬからである。

四

然るに歐洲各國共に戦争の爲めに富の減少を來たしたならば、迷惑を被る度合は寧ろ少ないのである。即ち迷惑は主として相對的であつて、絶對的ではないのである。英も獨も佛も富の減少を見るならば、資本減少の爲めに生産費の嵩むこと、又は他の分配者の分前の減少することは同様であつて、國際競争上別に大した不利益を見ないのである。少なく生産すれば少なく消費し、多く生産すれば多く消費する。資本減少の結果は消費を少なくすることにはなるが、活物たる我々の經濟生活は又た之に順應して行くから、其處に甚だしく憂ふ可き事恐る可き事は起らぬ。唯暫時の不便とアブスチネンスとが一般に要求せらるゝに止るのである。斯くの如く戦争の爲めに富の減少した事は、之れなきは之れあるには勝れりと雖も、決して之を以つて戦後經濟界に於て眞に憂ふ可き事、眞

に恐る可き事とするには足りないこと、戦争の爲めに幾十萬の人が死んだとて、世界人口の永久的減少を憂ふるに及ばないと同一理に歸着するのである。

以上極く簡単に説明したから、舊經濟界の謬想に囚はれて居る人を正路へ導き來るには不十分であるかも知れぬが、先入の僻見を有せざる人に對しては粗ぼ事足りると信ずる。

五

さて然らば戦後の經濟界に於て眞に恐る可き事は何であるか。今此問に對し一言を以て答へれば、戦時中に採用せられた誤れる經濟財政々策の爲めに、國民所得分配の行程を根本から破壊する事である。歐洲交戦國に於ては國民は皆必死な努力を爲して居るは疑がないが、然し戦時の爲めに誰が何の階級が最も多くの犠牲を獻じたかと云へば、其は無産者階級である。有産者階級は上に行くほど犠牲の財産に對するパーセンテージは少く、或る有産階級は戦争成金とさへなつて居る。自己の生命をさへ國家の爲めに

獻じて居るものが澤山ある他方には却つて戦争の爲めに財産を肥したものとさへある。不公平も亦極れりと云ふ可きであるが其は兩極端に就て言つたものであるから姑く論外として其中間者流に就て見るに、戦争の爲めに國家が費した莫大な費用は何れも國民の富又は所得を以て支ふる外はないのである。

六

さて國家が此費用を國民から取り立てるには三つの方法がある。第一は課税第二は公債の募集第三はインフレーション是である。課税に就ても其負擔の割合は無産者下層社會に重く、上流の有産階級には比較的輕いのである。正しく言ふならば英國の如き新たに徴兵制度を強制して、人民の生命をさへ國の爲めに徵發することゝした以上、有産階級に對する課税は或額以上は其人々の所得の全部を徵收す可き筈である、中流に向つても生活の必要を十分に充し得た殘餘に對しては100%の税を課して然る可きである。此く言ふと或は反駁して云ふ人があらう。其れでは國民の貯財心を全く絶滅して、百年

の長計たらずと。然り平和の時に於ては此くす可きではない。然し今戦時中に於ては富の蓄積資本の形成を沮喪する云々の顧慮は少しも要らぬのである、平和恢復すれば直ちに100%の率は廢さる可きは無論であるが故に、其爲めに富の蓄積の妨げらるゝを憂ふるに及ばぬ。戦争中は富は蓄積するよりも直ちに之を國家の用途に充つ可きは無論である。ドーセ其れ丈の富は消費せられるのであるから、之を蓄積したとて何にもならぬのである。然るに英國を始め何れの國でも、下層社會に對しては生活の必要以外の所得に對して100%に近い課税を實行して居ても、有産階級上流階級に對しては30%にすら及んで居らぬ。即ち課税の上に於て戦時非常の時と云ひつゝ、猶此の不公平が行はれて居る。然し之れは未だ眞に恐る可き事とは言へぬ、又た平時さへ課税の不公平は現存して居るのだから特に戦争に伴ふことも言へぬ。

七

次は公債の募集であるが、此れは二つに分けて見ねばならぬ。眞に國民が新たに得る

所得——又た新たに得可き所得を擔保として得たる借金——を以て之に應ずるは誠に結構な事であるが、既に一寸述べて置いた通り、英國でさへ此頃は獨逸の眞似をして銀行の融通による應募を大に奨励して居る。『公債應募の爲めの貸付の義は特に精々勉強して御相談に可應申候』との銀行廣告は英國の新聞雜誌に此頃頻繁に見る所である。此れ隠れたる一種のインフレーションである。加ふるに現はれたるインフレーションがある、今次に此二つを一つにして論じて見よう。

八

吾輩は戦後の經濟界に於て最も恐る可きは此の二種のインフレーションであると確信する。何となれば、インフレーションは國民所得分配の根本を滅茶苦茶に破壊するものであるからである。

戦争に要する費用は、現在又は將來の富を割いて之に當てる外はない。戦時増税は現在の富又所得を以て戦費を支へる所以であつて最も合理的にして最も餘弊の少い支辨

法であるが歐洲各國共租税のみを以て戦費を支辨して居らぬ。租税に依頼する割合の最も多いと言はれて居る英國ですら其割合は半分にも達して居らぬ。ソコで現戦争は主として將來の富と所得とを當てにして居るものと云はねばならぬが、其將來の所得を當てにすることが正當に行はれて居り、明瞭に確實に行はれて居れば弊害はあつても不得止所と言はねばならぬ。即ち國民が將來何年かに涉つて年々生産する富、年々收得する所の所得の一部分を割いて、戦費の補填に正直に當て、行くのであれば、現在直に支辨するには劣るけれども、之を除いては先以て最も確實健全な方法と認む可きである。インフレーションは即ち之と異なるのである。是又た一の戦費支辨法であるが、其弊害最も大なるものである。其弊害は戦時中に於ても著大であるが、其最も恐る可きは平和克復の後に於てある。

九

此の方法たる誰が負擔に應ずるか少しも明瞭ならざる隱密曖昧の二の方法であつて、

而して主として下層社會から甚だ多く其所得を奪取る所の方法であるからである。インフレーションに二種ある。一は前云ふ如く、借金をして公債の募に應ずる是れである。其借金をした國民が向後の所得の中から其借金を償却して行けば別に差支はないが、無理に借金を奨励すること獨逸の如く、佛國の如く、又近頃の英國の如くであれば、自然借金をした國民は融通に融通を重ねることとなる。自分が正直に贏得した所を以て償却すること能はざる程の無理な借金をする。又た戦時公債の募に應ずる爲めに、今迄持つて居た他の有價證券を賣放つて其手取金を以て應募するが如きは唯だ乗り換へに過ぎずして、國民から云へば何の貢獻を成す譯でなく、而して其結果は一種のインフレーションとなる。何故なれば、銀行からの融通又た證券の賣り放ちは銀行預金の増加、通貨の増加といふ形を取るに定まつて居る。従つて其額丈けは通貨を膨脹することになるのである。インフレーションの第二種は英國の戦時貯金證券 War Savings Certificate 並に流通證券 Currency notes の發行、又た獨逸の貸付金庫證券 Darlehenskassenschein の發行を初め、各國に於ける不換紙幣の増發即ち之であつて、直接に流通要具の額を増大することである。

國家は課税と公債とを以てして猶足らず、更らに自ら積極的に通貨を膨脹せしめて以て一時を糊塗する。成程至極簡便な方法であるが、素人の手療治で一時病を抑へたのと同じく、却つて病根を深からしむるものである。何故となれば、通貨の膨脹は物價の騰貴を來し、其結果つまり國民一般に課税以外に騰貴せる生活費に於て、戦費を負擔することになる。不知不識の間に非常なる負擔を爲す譯である。

十

物價騰貴の爲めに受くる打撃は有産階級よりも無産下層社會に強いことは言ふ迄もない。即ち唯さへ戦費の負擔の不公平なのを更らに助長することになつて、下層無産階級は益々苦む外はない。加之公債の募に應ずる者は兎に角多少の餘裕ある者である。彼等が戦後に於て長い間受くる所の利子の支拂は、一般國民が負擔する、而して其負擔は下層者に重い。即ち下層者は戦後長い時期に涉つて、有産者の懐へ利子を拂ふ爲めに納税に於てのみならず、騰貴せる生活費の形に於て不公平に重い所の負擔を支拂ふ譯にな

るのである。而して公債の募に應じた有産者は、一方に増税の負擔を爲すと共に、他方公債利子の支拂を受けるのみならず、戦時中價の下つた貨幣を以て應募したに對し、價の恢復した貨幣に於て元金と利子とを支拂はるのである。戦時中の百磅は戦後に於て百十磅百二十磅に相當する購買力を有するに至るであらう。是れ支けでも彼等は利益を占める。加之年々支拂を受くる利息も、亦戦後に於てより、大なる購買力を有するに至るであらう。然れば戦後に於て、下層者は彌々苦しむと共に、有産者の利益は遞増的となつて、茲に國民所得の分配状態は根本的に破壊せらるゝこととなる。是れが戦後に於て尤も恐る可く憂ふ可き事である。之に比すれば資本の減少の如きは到底日を同ふして談ず可きではなからず。

十一

我邦に於ては、戦後と云はず戦争中の今日に於て、此作用が明かに現はれて居る。即ち當今の一般物價の騰貴、就中米價の騰貴は、即ち我々國民が此戦争の爲めに要求せられて

居る犠牲を意味して居るのである。我邦は戦争の爲めに直接増税の苦しみは受けなないと安心して居るが、爰ぞ知らん我々は高き米高き生活費高き運賃高き保険料の形に於て、一種の課税をされて居るのである。而して他方には七割の配當をする郵船會社あり、國家が二千萬圓近くの戦時補償金を損して居る他方に、莫大の利を占めて居る海上保險會社があり、又た幾十幾百の成金と稱する輩があり、米の買占に巨利を得て居る人々がある。我々一般國民が苦しい生活を爲しつゝあるは、我々所得の一部を高き物價の形に於て、彼等暴富者に獻上して居る次第である。然るに怠慢なる政府は、戦時所得税は調査中に屬す、米價の調節は議會の閉會を待つて考究す可し等と無責任千萬な事を唱へつゝ、此の有様を高見の見物して居る。

十二

さて我邦が此くの如き物價騰貴を繼續するに至つた根本の原因は、(他の原因は姑く措き)在外正貨の手品にある。外國銀行預金を以て正貨準備に充て、恬として耻ぢざる

大非違にある、在外正貨を正貨準備に計上して、下シ、兌換券發行額を膨脹せしめるから物價は他の原因なくとも騰貴するは當り前である。試みに大正四年六月より同六年五月に至る二ヶ年間の物價指數と兌換券流通額とを表に作つて見たに、左の如き有様を示して居る。前段六四一頁
乙表を見よ

兌換券流通高の増加と物價指數の大きとは、大體に於て如何にも規則正しく併行して居ること一目瞭然たりと云ふ可きである。此事實は政府當局者が如何に辭を構へても之を否定することを許さないものである。在外正貨を正貨準備に充つる制度は、自ら兌換券の膨脹を來し、而して物價の騰貴となり、我々國民は眼に見えざる大なる増税を賦課せられ、而して他方成金共を肥して居ることとなつて居るのである。

我邦も歐洲も（米國も今や參戰し、而して其戰費を租税のみに求めず、巨額の公債（自由公債と云ふ美名を附してあるが、其實は奴隸公債と云つた方が當を得て居る——）を募る以上同様である）何れも戦後に於て國民所得の分配の根柢を破壊する事になる外はない。予は戦後の經濟界に於て眞に恐る可き事とは、實に此の謂であると確信する。資本

萬能論者以つて如何と爲すか。

|| 大正六年七月十六日稿同八月『理財評論』掲載 ||

五 意氣地なき戦後經濟論を排す

一 愚説の好標本

我邦の經濟界には、屢々餘計な取越し苦勞や愚にもつかぬ杞憂等が行はれる。目下經濟界に於て盛んに論議せられて居る所の戦後の經濟戰爭説や、獨逸の廉價投賣問題の如きは、即ち其の好標本である。若し我邦の學者にオリヂナリチーがあり、我邦の經濟界に自主的精神があつたならば、斯くの如き迷論愚説が事々しく行はるゝ筈はないのである。元來今次の世界大戰は、漫然英吉利の口吻を眞似て説をなす者の言ふが如く、カイゼル

の野心や乃至は獨逸の軍國主義のみが其の原因では無いのである。吾輩をして云はしむれば、其の主要なる原因は英獨のキアピタル・マグネート（資本閥）が、其の利益を獲得擁護せんとする事に存するので、詮じ詰めて云へば、資本閥の争覇戦である。言を換へて云へば、他國の利權販路勢力等を奪ひ若くは之れを壓迫せんとする經濟的帝國主義の結果、勃發したるものであると云ひ得るのである。

二 英國經濟政策變動の原因

蓋し、英吉利は自由貿易主義の國家であつた。英吉利が自由貿易國たり、且つ自由貿易國を以つて今日の繁盛を見るに至つた所以は、彼が商賣國であつたからである。即ち彼は品質佳良にして價格低廉なる貨物を製出し得る國である。已に品が良くて價が廉ければ、其商品は何處へ賣り出しても賣れるに定つて居る。されば他に妨害者が無ければ、其商品の販路は維持擴張することが出来るのは見易い道理である。従つて國家が態々是れに對して干涉するの必要を認めない。さればこそ英吉利には自由貿易主義が行

はれ而も巨大の國富を蓄積することが出来たのである。

斯くの如く良くて廉い品物を生産し得る商賣國たる英吉利であるから、自由貿易主義が行はれ且つ其の成功を見るに至つたのである。此の英吉利の事情を知らずして、英吉利の經濟政策を其の儘他國に應用せんとするは大なる誤りである。オリヂナリチなき學者の多くは、兎角斯る迷謬に陥るが誠に困つたものではないか。例へば三越呉服店の如き信用ある弊價ある大商店ならば、正確な品物を正當な價格で販賣すると云ふ事が世間に知れて居るから、別段自家の賣品の佳良なる事や、價格の正當なる事杯を吹聴する必要を認めぬれば、他の小商店に於ては、其の販路を擴張し顧客を作るためには、勧誘員を出したり目立つた廣告杯をしたりして、世間に自家賣品の眞價を知らせねばならぬ。

三越は恰も自由貿易主義の英國の如く、後者は保護貿易主義の國家の如きものである。前述の如く、商品を賣ることを本位として居た商賣國たる英吉利は、爾來自由貿易主義に據つて着々其の効果を擧げ、國內には富が充溢するに至つた。於是乎、彼は從來の商品專賣より轉じて、國內に充溢せる富を他國に投じて利益を收めんとするに至つたのであ

る。商品輸出本位より轉じて、今は資本輸出國とならねばならぬ事となつた。然るに商品の輸出と資本の輸出とは、二者大に趣を異にせざるを得ぬ、商品は單に賣りさへすれば宜しい對手は何んな者でも構はぬ。然るに資本の輸出には、其の輸出先即ち債務者を吟味する必要がある、そして安全にして確實なる者を選択せねばならぬ。之れは申す迄もなく、金を貸せば結局は其の貸したる金を回収せねばならず、利子も取立ねばならぬ。若し債務國が確乎たるものでなかつたならば、貸金の回収も出來ず、利子の取立も出來なくなる。云ふ結果を生ずる。故に資本輸出の時代には、従來の如き自由貿易主義では危険である。國家が相當の干渉保護をせねばならなくなつて來る。是れ即ち保護主義に變轉せねばならぬ所以である。今や英吉利の經濟政策が一變しつゝあるのは當然の成行で、其の大海軍は管商質をてつ保護したものであつたが、今日では資本をも保護するの責務を帯ぶるに至つた。吾人は斯の世界的情勢を能く觀察し了解して置かねばならぬ。

三 戦後のダムピングを恐るゝは愚の至り

自國生産の商品を外國へ輸出して利益を收めんとする時代には、販路の争奪は實に國際商業上に於ける重大問題である。而してダムピング (Dumping) に據つて其の販路を擴張せんとする者の出現するは、實に對手國に取つて大に警戒すべき事であるが、今日では販路争奪の時代に非ずして、キアピタルウオアの時代に推移して居るのであるから、之れは恐るゝには足らぬのである。

蓋し現大戰の結果、歐洲の各交戰國は甚だしく疲弊して居るが如くに觀察せらるゝが、世人は兎角今次の戦争の絶大なることを論じ、歐洲交戰列國は其の富其の資本を極度に費消盡したから、戦後に於ては列國の經濟界は資本の缺乏に苦しみ、それが爲めに生産困難に陥り、其の恢復には數十年も掛るであらうと臆斷するが、これは舊い經濟觀即ち資本萬能主義に囚はれた議論で、今日には通用せぬ。勿論、生産は資本が無ければ出來ないが併しながら資本は固定したものでない、資本は生産に依つて左右せらるゝ作用を有つて居る。即ち生産に依つて資本は増減せらるゝものである。舊經濟觀たる資本萬能主義で、戦後の經濟界を判斷すると飛んでもない迷論謬説に陥る、我々は頭を一新して觀測

を下すの要がある。

擬て然らば戦後の世界経済界は斯くの如しとすれば英吉利も獨逸も夫れ相當に活躍するのは分り切つて居る。戦争の爲めに獨逸のマーケットは他國に奪はれて居るが併し今日奪つて居る國の商品よりも獨逸の商品の方が佳ければ結局獨逸が其のマーケットを恢復すべきは當然である。現に獨逸の製品でなければならぬ物も随分有る。戦時の今日は獨逸の製品を得ることが出来ぬために他製品で間に合して居る所もあるから、戦後に於ては獨逸の商品は旺んに市場に流れ出づるに相違ない。尤も其の商品は戦争中に生産せられた物であるとか、或は開戦當時より停滞して居た物であるとか云ふものではない。戦後に於て生産せられたるものであるべきだと思ふ。斯くして獨逸は旺んにダムピングを行つても、而も之れを防止せんとするは愚の骨頂で事實出来る事でもない。獨逸のダムピングが英吉利に取つては勿論苦痛である可きで、今日から英吉利がそれを惧れて居るのは無理もない話であるがそれは苦痛を感じる英吉利にして初めて惧るべき筋合のもので、苦痛を感じぬ日本などが同じやうにダムピングと云つて

惧ろしがつて居るのは、何の事やら吾輩には了解し兼ねる次第である。こんな心配は全く意味の無い心配である。況んや戦後の経済戦などと云つて騒いだり惧れたりするのは馬鹿々々しい話である。英吉利が惧れて居るから日本も惧れねばならぬ。英吉利が騒いで居るから日本も騒がねばならぬと云ふのなら、英吉利が亡びたら日本も亡びなければならぬと云ふ事になる。こんな馬鹿々々しい話があるか。吾輩は日本が英吉利に囚はれてゐる以上、正當な議論や觀察や判断は起らぬと思ふ。

四 戦後経済界の重大問題

獨逸が戦後に於てダムピングを行つるとか、戦後の経済戦が何うのかうのと騒ぐは愚の骨頂で有と云事は、以上述べた通で、吾輩から見ればこんなとは問題にならぬと思ふ。其よりも戦後に於て英獨共通の大問題が横はつて居る、之は貧富の問題である。今次の戦争の爲に國民所得の分配が著しく病的となつた。無資産者階級即ち貧者が多くの犠牲を拂ひ其と反對に有産者階級は寧ろ戦争の爲に利益を占て居る、此が戦後の大問題である。

蓋し戦争の爲めに國家が巨大の費用を支出して居る。その費用の調達には三種ある。課税とインフレーションと公債の募集とである。公債は之れを外國債に據つたものもあるが多くは内國債である。殊に獨逸の如きは巨額の内國債を募つて居る。而して此の戦費に使用される爲めに調達せられた金の負擔額を考へると、富者よりも貧者に重いのは疑ふ可らざる事である。課税も然り、殊にインフレーションと國債の募集とは戦後の經濟界に恐る可き結果を與ふるものである。尤も國債も、政府がそれを募集する時には應募者に貸付金をして、その貸付けた金で應募せしめるのであるから、結局國債の募集もインフレーションを齎すことになる。斯くして通貨は膨脹し物價は騰貴する。物價騰貴の爲めに受くる打撃は富者よりも貧者に甚だしいと云ふのは改めて言ふ迄も無い。同時に又、政府は其の國債を償還せねばならず、償還するまでは多額の利子を支拂はねばならぬ。之れを英吉利に就て見るも二十億圓と云ふ巨額に達して居る。これが爲めに政府はその資金を國民から調達せねばならぬ。その調達の方法は、結局課税に據らねばならぬ。税金は之れを一般國民殊に貧者から絞り取るこゝとなる。貧者から取り立てた

金を富者に渡す。即ち右から左へと出すので、貧者は富者の犠牲に供せられる譯である。何となれば國債の所有者は富者であるから、どうしても富者の懷中に金が吸收されて了ふ。其の結果貧富の懸隔が益々激しくなつて來るのは自然の理である。これこそ實に戦後の重大問題で識者の第一に顧慮すべきことである。兎も角、今や世界經濟界は非常の大變化大激動を受けつゝあるのである。

五 英獨の如き侵略主義の國たる勿れ

ダムピングに對する吾輩の見解及び吾輩の戦後の大問題とする貧富問題に對する意見は、簡單ながら以上を以て足れりとして、扱て各國は何れも今次の悲惨なる大戦に依つて、不當に他國の市場を侵略せんとすることの不可なる所以を知り、之が爲めに飛んでもない結果を起したと云ふ事を悟つたであらうと思はれる。蓋し獨逸の軍國主義は勿論憎む可く、是非共此を滅亡せしめる必要があるが、同時に英吉利の慾張り主義、我利々々主義をも排斥せねばならぬ。其でなければ世界の平和は維持するとは出來ぬのである。

姉崎博士は昨年十一月の『中央公論』に於て『戦後の世界』と云ふ論文を發表した。我輩は博士の意見には或る點に於て賛成し、或る點に於ては賛成することが出来ない。如何なる點を賛成するか、それは博士の言を縮めて言へば『日本人は侵略主義の考ばかりから戦後の世界の形勢を判断するの傾向があるからいけない』と云ふ點である。即ち各國とも自由を尊重し、平和を維持することに努む可きで、日本も勿論斯くある可きである。然らば我輩は如何なる點に於て博士の言に首肯することが出来ぬか。曰く、博士が英吉利や亞米利加のみが自由平和の確保者で、獨逸は侵略主義の代表者であると云つてゐる點である。これは大なる謬りである。侵略主義は獨逸のみではない。英吉利の如きは慾張りの甚だしきものであつて、明かに侵略主義の國家である。米國も亦然り、尤も米國は先年迄は人道主義の立派な國家であつたが、最近の傾向は正義人道を無視して侵略的政策を取るに至つた。故に姉崎博士が英米を正義人道の國の如くに見做して居るのは妄の至りである。我輩は英米獨何れも平和人道の國家に非ずして、侵略主義の國家であると信ずる。たゞ國々に依つて、其侵略の形式が相異して居るに過ぎぬのである。

但し我輩は各國が人道主義を以つて世界に國を樹つるに至らんことを望む。此の點に於ては博士の意見に賛意を表するものである。

日本としては英米を人道主義の國家の如くに買被るのは愚の骨頂である。従つて英米の眞似をする必要は毫も無いのである。日本は日本として正しき道を進む可きである。即ち日本の國是を其のまゝにして進むべきである。今日迄日本は歐羅巴の先進國のやうに悪いことをやつて居らぬ、尤も悪い事をしやうと思つても、境遇上出来なかつたのであらうが、兎も角悪い事をやつて居ない。されば戦後と雖も、英獨の疲弊の虚を衝いて、彼等の利權を獲取せんとするが如きは全く謬つた考へである。若し日本が斯くの如き金權的侵略主義を取るならば、それは第二の英國若くは獨逸である。

蓋し正義人道は政治上許りではない、經濟上に於ても本當の正義人道に立つのでなければならぬ。姉崎博士の所謂世界が如何なるか許り考へて如何すると云ふ意氣のないのは世上の經濟論者に於て殊に甚しい。グムピング何ぞ恐るゝに足らん。其を恐れて我邦の立場を定む可し、杯と云ふのは、姉崎博士の言を借りれば『國を亡ぼす』謬想である。

|| 大正七年一月『日本評論』掲載 ||

六 戦後の世界經濟當面の大問題

一

聯合軍側も獨逸側も戦争の爲めに非常なる損害を蒙つたから、戦後に於ては兩方とも餘程の困難に陥るであらう其恢復には恐らく數十年を要するであらう。而して經濟財政上に於ても其打撃は莫大なものであらうが、所謂經濟戰なるものが始つて獨逸などでは極力『ダムピング』を實行して市場の争奪に勉めるであらう、聯合國は決して拱手しては居るまい同じく極度まであらゆる方策を用ゐて之と對抗するだらう、是れが戦後の世界經濟上の最大問題と認む可きである、唯幸にも我邦は此度の戦争の爲め經濟上甚だ有

利なる状態を現出し何等の損失を蒙らなかつたから此勢を持続して行けば戦後に來る可き經濟戰に處しても甚しき不利を感ずることなくて済むであらう。唯問題は如何にして戦時中に得た利益を戦後までも持續して行く可きや否やにあると。是れが目今我邦識者の大多數を支配して居る戦後經濟觀であるように見受ける。吾輩は此の説に對して根本的に異なる考を有して居るものである。よつて此一文に於て少しく卑見の次第を開陳して見たいと思ふのである。

二

此度の大戦争が聯合側敵側に均しく非常な打撃を能へた事は言ふ迄もない其經濟上の打撃の如きは寧ろ小なるものに屬する。其れよりも遙に大なる損害を兩方とも蒙つて居る。人命の損失は勿論負傷者の驚く可き數丈けでも經濟上の損失などとは到底日を同うして語る可きものでない。精神上の損害に至つては殊に大である。道德上の損害も筆紙に盡くし得ぬ。尤も他方には戦争の爲めに愛國心報國の精神自己犠牲心の著

しく高まつたと云ふ美點も考へに入れねばならぬが、他方に於て國と國、國民と國民との間に深き敵對心を植ゑ付けた大損害がある。基督教徒同志が異教徒に對するよりも甚しき憎惡の念を互に構へるようになった損害がある。數へ立てれば實に際限のない事である。人類が被つた此の莫大な損害に比較するときは、經濟上又は財政上の損害の如きは殆んど言ふに足らないと斷じて誤はないことゝ信ずる。歐洲の人は今まだ戰爭に熱中して居るようであつて、戰爭の爲めに受くる人文の這個の大悲惨を或は十分に自覺せず、何處迄も此の戰爭を繼續しようとして居るが如くであるが、靜かに思を旋らして見れば、Is this war worth fighting? (此の戰爭は戦ふの價ありや)との根本的疑惑が胸中に湧き來ることゝ信ずる。殊に露國の如き其軍隊には殆んど闘志なしと傳へられて居る。其國民も今や殆んど戰爭繼續を希はなくなつて居るようである。然るに英佛國は其の闘志なき露國の兵士をして、其戰爭を厭ひ始めたる露國々民をして、飽迄も戰爭を繼續せしむ可しとし、休戰又は講和の如きことを敢てするならば、其の露國を敵とす可しとして強制しつゝあるのである。英佛又は米國の識者中高き道德の立場に立歸つて、此くの如

き強制と所謂獨逸の軍國主義なるものと何れか人類存在の深き意義から見て、より多く非人道的であるかの疑問を起しつゝあるもの絶無ではあるまい。併し此は今予が論ぜんとする所ではない。予の論ぜんとする所は大戦の興へた幾多の損害中、寧ろ其小なるものに屬する經濟上の事柄にのみ限つて居るのである。

三

他の意味に於ける損害との比較を全く考慮の外に置いて、單に經濟上の損害如何を考へて見ても、其は中々莫大のものであることは世人の云ふ通りである。聯合國の一切と獨逸側の一切との開戦當初から今日迄に費した戦費丈けを見ても、其額は實に莫大なものである。さて此の戦費なるものには廣い意味の戦費と、狭い意味の戦費と二様あることを知らねばならぬ。今例を聯合國の旗頭たる英國に取つて一寸説明して見よう。英國が開戦當初から今日迄に被つた經濟上の損害即ち戦費とは、廣い意味で云へば、英國政府の費やした戦費と英國々民全體が費やした戰爭に直接關連する費用とを總計したも

の、謂である。此額は精確には知ること出来ない。國民の一人々々が直接間接に戦争の爲めに費した額は、如何に統計調査の機關の遺憾なきまで發達して居る英國と雖も到底之を調査計上する道がないので、唯だ概測を下し得るのみである。然るに狭い意味の戦費に至つては、精密に之を數字に顯はして計算することが出来るのである。狭い意味の戦費とは何を指して云ふか、答英國政府が支出した戦費是れである。其額は明かに且つ詳かに之を知ることが出来るのである。今最近の數字をあげて見ると、千九百十四年八月一日から本年(大正六年)十月六日までの合計五十六億五千三百萬磅で、其内聯合英國及領地への立替貸金(七月二十一日までにて)十一億七千百萬磅を差引くと英國政府が戦費として使つた高は四十四億八千二百萬磅、ザット四百五十億圓である。此れが狭い意味で云ふ英國の戦費であるから、之れに國民全體が支出した高を加へたなら、實に驚く可き巨額に達するのである。此事實文から見ると、戦争の齎らした犠牲は經濟上に於ても實に莫大なものであつて、其與へた打撃は想像も及ばぬようにも考へられる。英國一ヶ國でさへ此くの有様であるから、他の交戦諸國の戦費を總計したら猶更以つて言語に

絶する次第である。ソコで戦後の世界を考へるに當つて、先づ此事實から出立せねばならぬ。戦後の世界經濟は此莫大な戦費の爲に被つた打撃の下に立つと云ふことが其前提である。而して英國以外の國は此巨額の戦費は殆ど全部負債を以て支辨して居るから、其戦費の全部は戦後の各國政府が其々に償却せねばならぬ次第である。英國文は健實な方針を取つて戦費の一部は戦時中増税によつて支辨して居る、乍去其は一部分に止まつて居るので英國と雖も、大部分は矢張負債を以て支辨して居るので、右にあげた額の中、國庫現収入を以て支辨した高は十三億五千七百萬磅に過ぎず、殘十二億九千五百萬磅即ち約四百三十億圓は負債である。従て其利子許りでも戦後に於て一ヶ年に我日本の公債の元金總高以上に當る額を支拂はねばならぬのである。此は英國の様な豊かな財政と雖も、中々以つて堪へ兼ねる大負擔である。況んや其他の交戦國をや。故に此點文けを捕らへて考へると、戦後の世界經濟に於て現交戦國は非常にハンヂキヤツプ付けられて居て、米國なり我日本なりは此點に於て甚だ有利な状態に立つ様に一般に考へられるのも無理はないことである。然し乍ら此點が先づ吾輩に異論の存する所である。

四

成程右の如き數字を見ると我々は唯だ驚愕に囚はれるの外はないが其處が大いに吟味を要する點なのである。先づ第一に右に數字を以て現はした戦費は貨幣價值を以て言表はした戦費であることを忘れてはならぬ。貨幣價值を以て言表はすと云ふのは金高を以て言表はしたと云ふことであつて實際其れ丈の金が費消せられたと云ふことは同じではない。四百五十億圓といふ貨幣が戦争の爲に費消せられたのではない。英國は開戦以來四百五十億圓を戦争の爲に使つたと云ふが能くまあソナに澤山な金が英國に在つたものだと言ふ人がある。是は間違ひである英國だとして四百五十億圓などと云ふ金がある譯ではない四百五十億圓と云のは開戦以來最近迄に使つた富（物及働き）を金高に積て見れば左様なると云に外ならぬのである。其使つた物と働きとは如何なる物であるかを見なければ實際の戦費なる物は分らない。其主なる物を舉れば第一には陸海軍の將卒の働き第二には間接に陸海軍の用を勤める人々一切の働き即ち兵

器軍需品の製造に従事する人々の働き及び此製造に使用した器械や材料第三は戦争の爲に使はれた各種運送機關（鐵道汽船其他）の働き及其従業員の仕事、第四傷病兵救護治療其他に使つた物及人の働き、第五陸海軍人の食料被服其他（但し平時要する物に當る分を差引かなければならぬ）等である。此等の物や働きは戦争がなければ入らぬのであるが、平時とても陸海軍に入費がかゝつて居るのであるから、其分は戦費の内に組入る可きではなく差引かなければならぬし、又戦争の爲め新たに起つた物や人の働きは之を差引かなければならぬ。例へば平時に於ては無職者であつたものが戦争の爲めに職業を得て働くようになれば、其れ丈け國の富を増したのであるから、之れは戦費から控除す可きである。従つて金高で言表はした支出高は實際の戦費（即ち實際戦争の爲めに要した餘分の失費）とは同じものではない。戦争の爲に交戦諸國が被つた經濟上の損害なるものは國民各々が被る物は別としても、其國の政府の支出高丈に就いて言つても、右に表はした金高の數字とは一致するものではない。此事は前段に於て『金の經濟』と『物の經濟』との區別に就て論じたが我々は平時經濟に於ては常に金の經濟の支配の下

に立つて居つて、凡て經濟上の物事を金の經濟に養はれた頭を以つて判斷して居るものだから、戰時經濟に就ても動もすると金の經濟の頭許りで判斷すると云ふ誤に陥るを免れない。前段六〇頁『ロムバード・ストリート』を
本位の戰時經濟論を笑ふ』を見よ 戰費とは戰爭の爲に直接間接に費やした支出の謂である。戰爭の爲に支拂つた金高ではない。支拂つた金高の中には眞實の費用も入つて居るが又其他の物も含んで居るし、又反對に眞實の費用にして金高に表はれないものもある。戰爭用の軍需品製造工場で何萬圓の賃銀を拂つた、其賃銀總額は皆國の損に歸すると云ふものならば、其誤なることは誰も直ぐ氣が付くであらう。否更に一步を進めて考へなければならぬ、英國は今日迄之を金高に積算して見ると、四百五十億圓に當る丈けの物を政府として使つたのであるが、さて然らば此四百五十億圓に當る丈けの物(即ち以上あげた五項及び其他)が取りも直さず、英國が其政府を通して被つた經濟上の損失であるかと云と、實は左様ではないのである。其れ丈けの物を使つたには相違ないが、使つたと云ふことゝ損をしたといふことゝは、必ずしも一致しないのである。何故なれば前に言つた通り、其使つた内には戰爭が無ければ、テンデ作り出されないものがある。

又其使つた人の内には、戰爭が無ければ徒手遊食する人もある。であるから眞に戰爭の爲に被つた損失とは如何なる物であるかと云へば、其は積極的に現に使つた物ではなく、其等の物を作り出す爲に生産が中止せられた物、其等の働きを爲すが爲めに打捨られた働きの合計が、眞實に云ふ戰爭の損失となるのである。戰爭がなければ、軍人軍屬の大部分、軍需品製造其他戰爭關係事業の従業員は、夫々平和の産業に従事して、富の生産に従事するのであるが、戰爭が在るが爲めに其等の産業は打捨てられ停止せられた。此く打捨てられ停止せられた生産物及人の働きの合計が、即ち戰爭の爲めに一國が被つた損害の總計であるのである。然るに金の經濟に育てられた頭から見ると、此の眞實なる損害は支拂金高さへ見れば、其れで間違はないものと考へる。其誤なることの一點を云へば、四十五億磅といふ金高は平時經濟の金高とは甚だ意味が違ふのである。英國の戰前に於る一ヶ年の國民所得高は約二十四億磅と推算せられて居た、此二十四億磅に對して四十五億磅の損失があつたと云へば、餘程事重大に考へられるが、二十四億磅と云ふ其磅と、今日の四十五億磅と云ふ磅とは大に違ふ物である。即ち英國に於ても他の國に於る如く

物價は非常に騰貴して居る、ステーチスト指數によると、戦前の千九百十四年六月三十日の指數に對する本年八月三十一日の指數は、總平均に於て十一割六分五厘の増加を示して居る。即ち磅の購買力は戦前に比して半分以下に落ちて居るのである。されば四五億磅と云ふ金高を戦前の磅に言直して見ると多くとも其半額にしか當らぬ譯で、即ち二十四億磅位となる。之を言換へると英國の年所得は二十四億磅であつたと云ふは昔の話で、之れを今日の購買力にて言表はすときは、少くとも其の倍額四十八億磅以上に當つて居るのである。此く正して見れば單に金高丈けから云つても戦費の大なることは勿論だが一見して喫驚した程大なるものでないことは疑を容れないのである。所が此に對して次の如きことを考へるものが尠からずある。成程四十五億の戦費は購買力を減じた貨幣を以て言表はしたもので、戦前に於て云ふ四十五億磅とは大いに譯が違ふには相違ないが、他方に於て戦前二十四億磅と計上せられた所得は今日は非常に減じて居るので、此の減少した所得から右の如き巨額の戦費を負擔すると云ふことを知らねばならぬ假りに貨幣の購買力が半分になつたとして、戦前二十四億であつた所得は、今日の金

高に積つて見ると四十八億磅に當るとした所で、今戦時中の所得は此の四十八億よりは遙かに少いのである、即ち實際の戦費は四十五億に加ふるに、戦争の爲めに直接間接引上げられて居る國民の所得高を以てした物に當る筈で、直接間接戦争に従事する國民が戦前に於て得て居た丈けの所得は、戦争の爲に全く損失に歸した物であると。是れは甚しい謬想である。何となれば、右の様に考へることは一つものを二度算入することに當るのである。直接間接戦争に従事する人の働きは産業から取り去られたから、其れが損失に歸するものだと言ふなれば、其他方に於て政府より受くる所の俸給給與は、之を利得の中へ算入して損害から差引なければならぬ。反對に政府が直接間接軍事に従ふ人々に支拂ひ、又其の給與に費した高を以て損失なりと認むるならば、此等の人々が平時に於て得て居た所得を更らに損失として之を加算す可き筈のものではない。政府の支出以外に此等の人が受く可かりし所得が損失であると云のは、軍事に従事しつゝ猶ほ産業に従事し得るものと考へる間違に陥つて居るものである。戦争に従ふことが損であつて、更らに其人々が平和の産業に従事し得ぬことも損失であるとは、一寸考へると如何にも尤

千萬の様に考へられるが其は事實に合つて居らぬ。損失は戦争に従ふことであるか又は平和の産業に従ひ得ぬことであるか、何れか一方のみでなければならぬのである。戦争に従つたことも損であり、其爲めに平和の産業を營むことの出来なくなつたのも損である。と云ふ可きではない。戦争は平和の産業に従事して居る人何百人かを一方より他方へ移して使つたので、其眞の損失は此く移したることによつて平和の産業が營めなくなつたこと是れである。

さて右を以て戦争の爲めに被つた經濟上の損失なるものゝ性質内容が分つたとして、其れが戦後の經濟に如何なる關係を持つかを論じて見よう。戦後英國を始め各國は巨額の負債を始末せねばならぬと云ふことが、先づ第一の問題である。戦費を負債にて支辨したことは、つまり將來を見當てて戦争をして居ることであると普通の解釋である。成程國の政府の立場から云へば正に左様である。各國とも政府は戦時中の歳入を以て戦費を支辨した部分は甚だ少いか又は皆無であつて、何れも將來の國庫收入を見當てて戦費を融通して居たのである。然し乍ら此れは政府の立場から云ふときの話で、國全體と

しての立場から云ふときは事態が違ふのである。英國を始め獨佛等の負債の大部分は内債であつて、外國から借りた部分は少い、殊に獨逸の如きは今日迄七回に渉る募債は全部國內に於て募入したのである。外國から借りた分は將來の返済に國の生産品なり正貨なりを輸出せねばならぬから、將來其れ丈けの富は新たに稼ぎ出すか又は自國の富を其れ丈け取り去られるかせねばならぬものである。利息の支拂も無論左様で、年々公債の利子に當る丈けの富は外國へ取り去られるのであるから、其れ丈けの苦しみを國民經濟は忍ばねばならぬは勿論のことである。之に反し國內に於て募集した公債は自國內の富を使つたのであつて、公債の應募者が應募の爲め他から借入れた場合は、其借入金の返済の爲め將來に涉つて餘計の生産をするか、又は自分の費用を節するかせねばならぬので、其れは將來を見當てて使つた高であると云ふ可きであるが、現に自己の有する財産又は所得を以て應募した分は、政府から云へば將來を見當てにしたのではあるが、國全體から云へば左様ではない、現在の富を使つたものである。英國の四十三億磅の公債高の大部分は將來を見當てて支辨した高ではなく、戦時中に生じた所得又は現在の富を戦争

の爲めに使つたものである。英國全體として見れば其高丈けは負擔して將來に持越す物ではない。既に現金拂にして仕舞つたのである。其内には資本を喰ひへらしたのもあらうし、個人消費用の富を戦争の方へ繰替へた部分もあらうが、大部分は戦争中に右に生じた所得を左に戦争の方へ投じたものである。即ち國民各自が或は直ちに消費し或は將來の爲めに貯蓄す可き分を政府に貸付け、政府は之を取り入れて戦争の爲に使つたのである。だから其爲め國民の貯蓄高が減つたことは疑を容れない。又た生産々業の爲に用ゐらる可き資本が減じたことも疑ひを容れない、是れは戦後の經濟に重要な關係を持つて居る、即ち戦後の歐洲經濟は各國共著しき資本の減少を被むる可きは逆睹するに難くない。併し乍ら其高は決して國全體としての借金ではない。即ち消極的に資本が減つた丈けであつて積極的に其れ丈けの負擔が残るわけではない。我々が病氣に罹つて醫藥料の尖費が嵩むとき、出来る丈け家計を節しても猶且つ及ばないから、郵便貯金を引出したり、又は家具家財を賣拂つて病院の支拂を濟ませたのと事理は同じである。其爲貯金高は減り、家具は減少はして居るが別に借金が残つて居るのではない。而

して家計を節して醫藥の費に當て、又は家内が平素營まない内職をして藥費の一部に當てた分は、財産も減らないし借金も造らずして事を辨じた物である如く、英佛獨其他の國に於て國民が戦時節約をやつたり、非常特別の働きをしたり、婦人が職業に従事したり、徒手遊食の輩が夫々職業に有り附いたりして公債の募集に應じた高は、恰も家計の節約細君の内職によつて藥費を支辨した如く、少しも國の富を減ぜず資本に手を付けず、又將來に負擔を持越すことなくして、戦争の費用を支辨したものである。此く考へ來れば各國共其政府の立場から見た負債高は實に莫大なものではあるが、其内眞に國全體の借金として將來に持越す所の積極的負擔たるものは一部分に止るのである。大部分は現に戦時中に於て支辨し了つたものである。戦時増税によつて支辨したものの、みみ、決濟すみの戦費であると思ふのは大なる間違である。國民は租税として政府へ上納する以外に、公債の應募と云ふ形ちに於て戦費の大部分を、右から左へと現在端的に負擔し終つて居るのである。決して戦後までも之を持越すものではないのである。再び前の例を以つて云ふと、主人は病中僅かしか収入がないが、細君が自分の貯金や内職の所得を主人の醫

藥の費に提供した如くである。其家全體として何の借金も病後へ持越す次第ではない。唯だ主人は細君に對して深き感謝と而して若し細君と會計を別として居るならば、主人は細君に對して其れ丈け借金を背負ふことゝなつて居るのである。即ち各國とも國全體としては其れ丈けの借金の持越しは無いけれども、國の政府は國民に對して其れ丈けの借金を背負つて居るのである。故に細君が主人に對して私の立替金は帳消にして下さいと云ふが如く、國民が政府に對して公債償還の權利を放棄すれば、借金はなくなつて仕舞ふのである。外の國は左様な事はあるまいが、露國丈けは政府の方から強談的に汝の立替金は負けて置けと細君を壓迫する亭主の如き態度を取るかも知れない。

さて露國は別として、他の國は獨塊側と雖も左様な事は必ず爲すまい。況んや英佛の如き健實なる財政を維持する國をや。然れば戦後に於て此等諸國は年々の公債利子の支拂と期限到着のとき又は數回借替後の或機會に於て、元金の償還との義務を負擔せねばならぬのである。乍去政府其自身には利子を拂ふ可き高も元金償還用の高も所有して居るのでなく、又た自己の所得なるものは(官業及官有財産収入は別として)ないので

あつて、右に當る高は必ず租稅專賣其他の形に於て國民から徴收する外はないのである。國民全體として云へば、其應募した公債の元金も利子も取る權利が一方にあると共に、他方には又た其れ丈けの高は政府へ納む可き義務を課せられて居るのである。即ち國民全體として云へば、貸しも借りもない出す入らずである。假りに英國の内債高三十億磅とすれば、國民は他日何時か其れ丈け政府から返して貰ふ權利を有すると共に、何年かに涉つて又た四十億磅丈けは一般政費以外に政府へ租稅其他によつて納めなければならぬのであつて、差引零に歸するのである(外債は別問題たること勿論なり)。而して此四十億磅と云ふ内には戦前に在つた富を以て之に充てたものもあらう、其れ丈けは國の富が減つたのである、富の内産業に資本として使はれて居た分は、其れ丈け資本の減少を來たしたわけであるが、其補填は政府は之を爲すのではない、矢張國民が戦後に於ける經濟的活動によつて自ら補填する外は道はないのである。而して四十億磅中の大なる部分は、戦時中の所得を以つて支辨したものであるから、其分は別に補填は要しない。即ち戦後に於て補填を要する持越し高は決して四十億磅など云ふ巨額によつて表はさる可き

ものではない唯だ其一部分のみである。

五

右は國民全體として見た話である、而して英も佛も獨も塊も伊も露も皆同じ道理の下に立つのである。歐洲諸國は均しく戦争の爲めに減少した資本の補填を爲さなければならぬ仕事を持つて居る。お互ひに恨みつこなしである。而して此點に於て英國は兎に角租税を以て戦費の一部分を支辨したし、又公債應募にも餘り無理な細工を用ゐず、國民現實の所得を以て右から左へと現に支辨した部分が多くあつて、資本を喰ひへらした部分は或は小であるから、他の交戦諸國よりは戦後に於て樂であるかも知れず、其の反對に獨逸は貸付金庫の巧妙なる運用によつて随分無理に借金せしめて公債に應募せしめ、且つ租税支辨は全く爲なかつたから國の資本を喰ひへらした部分も可也大であるかも知れない。而して米國及日本は資本を喰へらした事がないから、或は可也有利なる状態の下にあるかも知れないが、此點は後段に論ずるとして、資本の喰ひへらしと否とに拘ら

ず、兎に角政府として巨額の負債の始末をせねばならぬのであるから、此點から先に論じて見よう。此が戦後の經濟の最根本的問題であるから。

六

各國の政府が巨額の公債に對して年々利子を拂ひ、又早晚其元金を償却せねばならぬと云ふことは、歐洲交戦國が何れも同様に背負ふ所の重大事項であるが、其支拂償却は國全體として見れば、右のものを左に移すと云ふ問題であつて、國外へ取去られると云ふ問題ではない。經濟學の術語で云へば、生産の問題でなく分配の問題である。其れ丈け新しい富を作り出さねばならぬと云ふことが重要な意義を有して居るのでなく、其れ丈けの富が國民間に於て地位を換へると云ふ事が甚だ重大なる意義を有して居るのである。何故なれば前に述べた様に、其れ丈けのものゝ全部が將來に持越されて居るのではない、將來に持越されて居る物は資本の減少の補填及外債の元利支拂ひ丈けであつて、其以外の分即ち大部分は、國全體として見れば既に已に支辨し了つて居るのである。戦後に

於て新たに其れ丈け作り出さねばならぬわけではない。唯だ主人と細君との間の立替勘定を處理することを要する如き丈けである。政府としては一方一般國民から其れ丈け取つて、他方公債所有者たる國民に其れを拂渡すを要する丈けである。此點が戦後の經濟の特色を形づくる最重要の點である。即ち戦後の歐洲諸國の經濟界に於ては、富の分配に非常なる變動が起ると云ふことは是である。政府が巨額なる公債の元利支拂を要する收入を得る爲に課する租稅專賣其他の増徴は國民一般に課せられる物である。獨り有産者富者のみに増課するのではない、無産者勞働者貧者も亦た必ず之を負擔せねばならぬのである。殊に間接稅の増徴は比較的多くの負擔を下流階級に課する物である。英國が戦前まで取り來つた健實なる財政方針によつて重きを直接稅に置くとするも、猶全く間接稅に手を觸れないと云ふわけには行かぬ。況んや獨逸の如き其帝國財政が甚だ重きを間接稅に置いて居た國をや。然れば戦後に於て他の點は今問題外としても、比較的の下流階級の負擔の増すことは、如何しても免れない事と覺悟して置かねばならぬ。而して他方に公債の元利の支拂を受くる所の國民は、多く如何なる階級に屬するかと云

へば先第一に財産階級であるは勿論である。其に次では財産階級とは云へなくとも兎に角多少の餘裕があつて公債の募集に應じ得られた人々である。最後には其の餘力はないけれども、多少の經濟的信用があつて公債應募の爲めに借金をすることが出來、其借金を以て應募した人々である。獨逸の如きは随分極端まで範圍を及ぼしたから所謂下流社會又は勞働社會の人々でも公債所有者は少からぬであらうと思ふ。先頃大藏省に開かれた黒田參事官將來の獨逸戰時經濟書展覽會出陳の材料で吾輩が調べた所によると、二 麻克以下の應募の數が

第一回 二十三萬千百十二人

第二回 四十五萬二千百十三人

第三回 九十八萬四千三百五十八人

第四回 二百四十萬六千百十八人

第五回 百七十九萬四千八十四人

ある、三百麻克以上五百麻克以下の應募者は

第一回 二十四萬千八百四人

第二回 五十八萬千四百七十人

第三回 八十五萬八千二百五十九人

第四回 九十六萬七千九百二十九人

第五回 六十八萬千二十七人

ある最も多かつたのは第四回で、五百麻克以下の應募人員が總應募人員五百二十七萬九千六百四十五人の内無慮三百三十七萬四千四十七人ある。此内には右に云つた無理な借金應募をしたものも澤山あらうし、又た健氣な心掛けで身を切詰めて應募したものもあらうが、兎に角戦後の分配大變動に當つて、聊か其の影響を緩和する作用を爲す次第であつて、獨逸としては心強い點と云はねばならぬ。併し之れは唯だ人員の數から見た事で、金高から見ると、第四回の總募入額百七億千二百萬麻克の内、五百麻克以下の募入總額は僅に六億八百萬麻克にしか當らず、二百麻克以下の募入總額は二億百萬しかない。即ち人員の方からザット百分の六十に當るが、百麻克以下の少額應募數も金高から云へば

僅かに百分の六にしか當らないのである。無理に無理を重ね切り詰めた獨逸でさへ斯くの有様であるから、英國の様に遂に樂にやつて居た國に於ては、公債權利額の大々部分は無論裕福の者の手にあつて、下層社會の與る高は極めて少ないことは推し量られる。即ち戦後に於て政府から公債の元利として支拂ふ高の大々部分は、國民中の少數なる財產階級富豪者の手に入るのである。而して此の少數者に政府が支拂ふ爲めに要する金は、貧者も中流階級も一般に租税其他として政府へ納入することを要するのである。即ち言葉を改めて云ふと、戦後の公債始末は國民中の貧者勞働者下流社會の富を富源財產階級へ年々ドシ／＼運び移すことを意味するのである。吾輩が生産の問題として重要ではなく、分配の問題として重要なりと斷言した理由が是れで十分に明白となるであらう。所が之れのみには止まらない、右に説いた通り、公債應募租税増徴又は其他の方法で、現に戦時中各國が自國の資本を喰ひへらした部分が尠からずあることは疑を容れないから、戦後の歐洲經濟界に於ては資本の不足を感じるであらう。而して戦後産業の復舊否改新には資本を要すること愈々急切となるは疑を容れない。即ち戦後に於ては

資本に對する需要は戦前よりも増加す可きに、他方資本の供給は戦前より減少して居ることゝなるに相違ない。需要が増して供給が少ければ經濟の大則によつて資本の價が騰貴す可きは當然である。資本の價とは即ち金利のことである。ソコデ少くとも戦後若干年間は歐洲に於ては資本の價たる金利は、戦前よりは高かる可きは今より逆睹とす可き現象である。所が金利が高ければ勞働者の受くる勞銀も必ず其影響を受くる事を免れない其影響とは勞銀が金高では依然として居るかも知れないが、實質に於て即ち其購買力に於て下落することは是れである。戦後に於て通貨の縮少が行はれれば別であるが此は當分望まないことゝして通貨が多ければ物價の高いことは、依然として繼續するであらうから、勞銀は金高では下落はせず或は却つて騰貴しても、其購買力は却つて減ずるのであらう。或は物價は多少下落するかも知れない（其は物品によつて必ず起ることゝ信ずる）が勞銀も亦下落することゝなれば結局勞働者の實際所得は少くなるのである。金利として資本家の方へ取り去らるゝ部分が多くなれば其れと同額とは云へないが、或割合丈けは勞銀として勞働者の手に入る可き所得が減ずることは、何の道免れ難

いことである。而して右に假定した第二の場合、即ち戦後通貨の縮少が行はれて貨幣の購買力が恢復することは、歐洲各國の爲め希はしいことたるは勿論であるが、其は又他方に更らに一の新しい不公平を加へることゝなる。其の理由は財産階級富者が應募した公債金額は、戦時中購買力の著しく減じた貨幣を以て政府に拂込んだのである。然るに戦後貨幣の購買力が高まるものとすると、政府が公債所有者に元利金として支拂ふ高は金高には相違は起らないが、其支拂ふ貨幣は購買力の増加した貨幣であるから、公債所有者は其間に更らに利益を受けることになる。安い貨幣を拂込んで高い貨幣で元利を返済して貰ふのであるから、其れ丈け得となる。即ち戦後下流社會から取つて上流社會に運ぶ富の實際高は、其金額を以て言ひ表はされたものより更らに多いことになる。

七

斯う考へて來ると、戦後の歐洲經濟界に於る勞働者貧者下流階級の運命は、實に同情に堪へない氣の毒極まつたもので、他方に富者資本家階級の地位は實に言ひ様のない結構

なものである。斯くて戦後の世界經濟當面の大問題は、此の富の分配上に於ける大變調を措いて外にないことは讀者の十分なる諒解を得ることゝ信ずる。而して平和一度來らば、陸海軍人並に間接軍事に従事せる莫大なる人員は復員せられて産業界に職を求め、其調節が果して直ぐ行はれるか如何か、當分は職を得られない勞働者も澤山起るであらう。又た國內に止まつて男子の代りに職に就いて居た婦人勞働者の間に失職の現象が起るであらう。此等は長い間には其々其處を得て失職離職は戦前よりも多くはないことになるかも知れぬが、當分の間は必ず戦前よりも多いであらう。是れ又勞働階級を苦しむ可き一の事柄である。戦争は無職者を根絶した形であつて、此は不幸中の幸であるが、其幸は戦争が終ると共に消え去つて、却つて悪くなることを考へなければならぬ。

八

更に一つ考ふ可き事がある。其は通貨の過増に基く物價騰貴である。戦時中に於ては各國民共臥薪嘗膽の覺悟で、あらゆるものを國の爲めに犠牲として居るのであるから、

物價騰貴より來る苦しみも亦不得止事として忍ぶのであるが、若しも其れが戦後まで繼續するとなると、此犠牲は實に堪へ難きものとなつて思ふ。元來戦時中に於ける物價騰貴には種々の原因もあるが、吾輩の信ずる所では、其最大の原因は不換紙幣不換銀行券又は名は兌換にして其實不換なる紙幣及銀行券證券の過發是れである。此を英語で『インフレーション』と名けるが、『インフレーション』は一種の隠れたる増税と看做して大過ないものである。直接税なり間接税なり明かに租税と名乗つて國民から取つて戦費に當てる外に、各國民は『インフレーション』の形に於て其所得を政府へ徴收せられて居るのである。物價が騰貴した爲め支出高が多くなるから不得止節約する其の節約した富は國民の貯蓄とはならぬ、誰の手に歸するかと云へば過増通貨を發行する政府の手に歸するのである。二片喰ふパンを一片に減じた残りの一片は實は政府の收入に歸して戦争又は一般政費に充てられて居るのである。衣服を減ず飲料を減ず子供に與へるのを減ずる、其減じたものは何れも政府へ入るのである。此は戦時中は無論致方なしとして甘んじて犠牲を獻するが、戦後に涉つて殊に切り詰め一杯の生活をして居る下流社會

が犠牲を繼續することは實に容易ならぬことである。

九

右段々説いた所で、戦後の世界經濟當面の大問題は生産の問題でなくして、分配の問題であることが明瞭になつたと思ふ。即ち戦費其ものゝ額が莫大であつて、而して各國の公債高が非常に増したことが戦後の大問題で、我邦や米國の如きが、大に有利の地位に立つ所以は、此の大負擔無きこと是れであると云ふ説の受取り難いことは分つたであらう。問題は戦費が莫大であつたこと、其事でもなく、又其爲めに公債高が増したこと、其事でもない、其れから起つて来る作用たる富の分配の一大變調是れである。所謂經濟學者が得意の題目とする國際間の經濟戦とか、獨逸ダムピング之に對する聯合側の對策の如きは、事決して輕微ではないが、右に論じた根本の大問題に比すれば、到底同一の談ではない。經濟戦やダムピング問題にのみ頭を没して居るのは、畢竟素町人經濟學に囚れた古い思想である。大戦争の與へた大教訓を理解する能はざる低級の經濟觀である。予の所謂

ロムバード・ストリート本位の經濟財政觀である。金權的侵略主義の謬想を脱せざるものである。市場の争奪、金融權の争奪のみが大事件だと考へつゝある間に、世界の經濟界は其根柢に於て、這般の大動搖を起しつゝあることに氣が附かないのである。今や米國は自ら求めて此の大動搖の渦中に國を投ずること、歐洲諸國と同一となつた、而して此は米國である、丈けに更らに細心の考究を要する。戦前『ブルートクラシー』金權政治の跋扈し、開戦と共に驚く可き富の増加を主として、此の金權階級に附け加へて大成金を現出した米國が、今更らに正義人道の爲めとか、小國の自由とか、人道の解放とか、様々に立派なる名義を列擧して大戦に加入したことは、之を經濟上の眼から見ると、右に段々説明した富分配の大移動の大潮流へ自ら好んで身を投じたものに外ならぬ。既に『ブルートクラシー』の横行に於て世界第一の國である上に、更らに自ら求めて其勢を急進せしむ可き機會を作り出したことが、米國參戰の經濟上の眞意義である。

十

翻つて我邦を見るに、世上論者の所謂戦時中の利益なるものあるは元より言を須たず、戦後亦た此點に於て有利の地位に立つ可きことあり得るには相違ない。併し乍ら其れが我邦の最大幸福ではない、戦後に涉つて世界の變調に處して巧みに我邦の地位を維持することは實に希はしいこと勿論である。併し其れが可能であることが、我邦の最大幸福ではない。従つて其を可能ならしむ可く努力することが、凡ての經濟政策の『アルファ』にして『オメガ』たる譯では斷じてない。元より此れが爲めに努力することを怠つてはならぬ、乍併最大の努力、最善の貢獻の要求せらるゝは自ら存して他にある。我邦の最大幸福は、右云ふ如き富の分配の大變調の渦中に投じなかつたことは是れである。多少は成金も出來たが他方には下層社會も恵に浴して居る、物價騰貴の爲めに苦しむものも澤山あるが又利したるものも少からずある、即ち或度まで富の移動は惹起されたが、是を右に述べた歐洲諸國に比するときは到底同日の談ではない。是れが我邦の優勝の地位に立つ所以である（歐洲出兵の如き妄舉の斷じて非なる所以は、經濟上から云へば、此の優勝の地位を一擲する結果に終るからである）。

然れども害のある所には利がある得のある所には損がある。歐洲諸國は右の如き大難局に陥つたと共に他方大なる利益を經濟上に得た。其れは別事ではない、戦費を負擔する爲めに極度まで無駄を省き、又種々有用の工夫發明を起し、國民が緊張した氣分を養ひ得たことは是れである。戦費の大部分は實に既に已に國民の節儉勤勉によつて支辨し了られたことは其事が喜しい丈けに止まらぬ、之によつて養ひ得た國民能率の増進、勤儉耐苦の風俗習慣が永く戦後に涉つて、彼等の生産力を高めることは是れである。是れ實に苦中に得た樂不幸中に見出した大幸福である。此生産力の増進能率の向上、勤儉活動の習慣のある以上は、以上に列擧した大難局に處しても、早晩國力を十分に恢復する事を得るに至るであらう、其の多い國民ほど戦後に活躍し得る。獨逸の如き戦時中實に名狀す可からざる困難を嘗めたが、其代償として得た國民生産力の増進も亦た實に非常なものであらう。獨逸が戦後疲弊に倒るゝが如きことの斷じてないは、此點から考へても明々白々疑を容れない所と思ふ。英佛兩國に就ても亦然りと思ふ。其反對に我邦は世上論者の云ふ如く、戦時中大なる利益を得た、戦後も其は或度合まで續くであらう、是は實に有

難仕合である。乍併其と同時に他方には歐洲諸國が得た這般の大利益は殆んど我邦に來つて居らぬ。多少の新面目を呈した事は勿論であるが、歐洲諸國民が命懸けで得た貴重なる經驗國民能率の大増進に比すべきものは、我邦に於て之を見ることが出來ないのである。戦後の世界經濟に處して我邦の最も憂ふ可きは此一事である。獨逸のダムピング米國の保護政策、歐洲諸國の經濟戰の如きは、此一事に比すれば甚だ小なる憂である。戦後の世界經濟は一方には非常に緊張した氣分、著しく増進した能率を養ひ得て Social Reconstruction 英國人の近頃唱ふる『社會改造』を企つる所の歐洲諸國と、他方には此の變化を被らなかつた日本始め他の諸國とによつて經營せらるゝことゝなるとは、我々の一刻も忘れてはならぬ所である。

論じて茲に到れば次の如き結論は總明なる讀者の首肯を購ひ得ることゝ信ずる。歐洲諸國は此の長所を飽迄助長するによりて富の分配に於ける大變調を無事に切り抜けることを第一の務とする如く、我邦は此の大變調を蒙らなかつたと云ふ長所を飽迄助長し、無益なる政策によつて其渦中に投ずるが如きことを極度迄戒飭し、又た社會政策の建

設を進むることによりて今後に於て新たに此種の現象の起らぬよう飽迄努力すると共に、他方には能率の増進國民覺悟の緊張を出來るだけ歐洲諸國民の程度に近づかしむるによつて其の差違より來る不利益を可成軽減することが、日本が戦後の世界經濟に處する最大の務である。是れ吾輩が堅く執つて信ずる所である。

—— 大正六月十二月一日稿 全七年一月『太陽』掲載 ——

四 國本は動かさず

—— 黎明日本の諸問題 ——

一 新社會とは何ぞや

此度林毅陸君を中心として同志の友人等が新社會と云ふ雑誌を創めらるゝと云ふ誠